
黒く滾る炎

tkkosa

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

黒く滾る炎

【Nコード】

N0901J

【作者名】

tkkosa

【あらすじ】

過去に負った深い傷から抜け出せず、闇に閉ざした心から強い野望を持った男の物語

その0（前書き）

登場人物

大田恵一・おおたけいいち（タクシードライバー、野望を携えて生きる野心家）

片柳彩子・かたやなぎあやこ（モデル、今どきの十代で分かりやすい性格）

久留米雀・くるめすずめ（女優、誰もが一目置く大物）

野木晃彦・のぎあきひこ（大田の学生時代の同級生、既婚で子供もいる世帯主）

柴村忍・しばむらしのぶ（週刊誌記者、久留米の連載を担当している）

亀谷右京・かめやうきょう（刑事、大田と過去に接してから後を追いつけている）

光村沙耶・みつむらさや（キャバクラ嬢、名の知れた有名店でナンバーツーを誇る）

その0

男の瞳は黒く燃えていた。

深き野望に心根を狂わし、乾いた時代への勝利に執念を尽くす。

それが生き様、それだけ。

優しさなんていらぬ。同情も、生温い感情も。沁みつたれた情動など願ひ下げだ。

金、それこそがこの心を満たしてくれる。

俺はその全てを手に入れてみせる。この手がどんなに汚くなるうとも。だって、そい

つらを手にするのは欲望に溺れた不浄な人間だけなんだから、

俺は喜んでこの身体

を汚してやるさ。この心にある天使を悪魔と取り引きしてでも、俺は勝ってみせる。負

け犬の遠吠えなんて、真つ平ごめんだ。この正義の薄れた大地へ勝利の雄叫びをあげてやる。

眼前に拡がる水平線にこの先の未来を映し、昇りくる朝陽に己を置き換えた。生きて

やる、炎立つ情念のうごめく社会を。我欲にまみれた利己的な人間たちを負かし、その

頂点であざ笑ってやる。そして、地べたを這って命を乞う敗者へこう言ってやるのさ。

「何を言ってるんだ。俺はお前らと同じことをしただけだ」

勝ち続けてきた連中は敗者になり、初めてその気持ちを理解する。それまでに、どれ

だけ俺のような敗者を蔑んできたのかも。ただし、そこで知ったと

ころでもう遅い。悪

に染まった俺には負け屑の相手などしてる暇はない。屑は所詮は屑でしかない。過去の

栄誉など意味を持ちはしない。なあに、気落ちなんかなくていい。お前らが前に俺に

してきたことじゃないか。お前らには気落ちする資格さえない。ただ暗く淀んだ日々

心を擦り減らせ、やがて消滅すればいい。消えたことすら気づかないままに。

昇りつめてやる、この乾いた時代を。俺はそれに値するだけの人間だ。今までに俺が

どれだけの悪魔と契約してきたことか。見てろよ、俺を卑下してきた屑ども。お前らの

鼻を完膚無きまでに折れ曲がらせてやるから。

その1（前書き）

登場人物

大田恵一・おおたけいいち（タクシードライバー、野望を携えて生きる野心家）

片柳彩子・かたやなぎあやこ（モデル、今どきの十代で分かりやすい性格）

久留米雀・くるめすずめ（女優、誰もが一目置く大物）

野木晃彦・のぎあきひこ（大田の学生時代の同級生、既婚で子供もいる世帯主）

柴村忍・しばむらしのぶ（週刊誌記者、久留米の連載を担当している）

亀谷右京・かめやうきょう（刑事、大田と過去に接してから後を追いつけている）

光村沙耶・みつむらさや（キャバクラ嬢、名の知れた有名店でナンバーツーを誇る）

その1

男は雨に好嫌を抱いている。好きでもあるし、嫌いでもある。捉え方の側面により、好みは真逆になりうる。何も難しいことではない。誰にでも、雨を望む日があり、晴れを望む日がある。要はそれだ。

ちなみに、今はというと「好まない」に属する。理由は簡単だ。勤務中だから。

仕事はタクシードライバーをしている。といっても、老齡ではない。むしろ、若い。

二十八歳、この職業にしては珍しいほどの低年齢だ。周りからは驚かれることもある。

別に、他に働き口がなかったわけではない。何か訳ありなのかと疑われもするが、それは否定している。訳ありはその通りだが、そこからここへ直結したことが違う。やろう

と思えば、いくらでも大手企業に潜り込むことは可能だ。磐石に出世の道を歩む自信もある。こんな冴えない職業をしてるからには当然に理由がある。

雨は作夜半から降り出し、朝になると雨足は増した。雨そのものが嫌いではないが、

仕事に差し支えるのは勘弁だ。気分も萎えてくる。沈みそうにもなる。頭に、肩に、腕に重りを乗せてるような心的苦痛を伴う。

こんな日は死んでしまいたくなる。いっそ、この呪縛を解いて楽になってしまおう。

自由だ。俺は自由なんだ。そう己に叫ぶ。進行はそこで停止をする。残念ながら、まだ

死ぬことはできない。俺には果たさなければならぬことがある。

溜め息を繰り返し、雨道をゆつくりと走っていく。会社の車は乗り心地がいい。他人

の所有物であることが変な緊張感を打ち消してくれる。この車に愛情はないし、会社にもない。

時刻は正午を過ぎた。あと五分も客がつかまらなければ昼休憩にしよう。大概の昼食

は弁当屋の温かいものに頼るが、今日は気分転換でもしてみようか。喫茶店の軽食など

いいかもしれない。ああいった類はたまに無性に食べなくなる。食欲というやつか。食

に一切のこだわりはないが、人間である以上はこうした欲も衝動的にやってくる。そう、

俺は人間だ。人の体に魂を宿した悪魔の化身、そんな表現が合う。

そう考えてると、大通りの左手から適度なアピールをする姿が見受けられた。客だ。

「はあ、今日は降ってんなあ」

車内に足早に入り込んだ客の第一声は男に向けられたものではなかった。独り言だ。

独り言を独り言の音量を超えて発する人間は意外に多い。こちらに話しかけてるのが

判断しにくい時もあり、非情に困る。一人で処理するのなら勝手にやってもらいたい。

巻き込まれたくはない。時間の無駄だ。

「どちらまで」

行き先を軽く促す。僅かに体勢を後ろに向けるが、軸はそのまま。ドライバーと客の

距離感をそこに示す。体は捻るが、体ごと回しはしない。そんなに客に対して好意的に出ることはない。この関係は仕事上、あくまで数区間のメーターの元に成り立つもの。

馴れ馴れしくしたり、愛想笑いを振り撒くことは極力避けたい。個人的な意思もあるが、余計な馴れ合いで関係を狭める意味もないと思う。金を払う側と貰う側、そこに図式は完成されている。それ以上に上下関係を如実に表すことはしたくない。

「ヒルズ、行ってくれるか」

六本木か、ここからなら十五分もあれば行けるだろうか。

新宿近郊を出発し、車は雨を滴らせながら緩めの速度を保つ。車内には雨音とともに

ラジオが流れている。普段は消しているが、客がいる時は電源をいれる。客が聞いているかどうかは別にして。

「雨、ずっと降ってんなあ」

「そうですね。止みそうにもないですよ」

客からの言葉には当然反応する。愛想笑いも浮かべる。相手がバツクミラーを通し、

こちらの表情を見ていることは知ってるから。悪い印象を与えはしない。程ほどにだ。

対人関係はそれに限る。

「おたくはいいなあ。雨に降られんでいいから」

「そうですね。助かります」

客は派手に笑い、男も同じ程度に笑う。こんな乗りのいい客もたまにいます。大抵は仕事に疲れ、当てもなく窓外を眺める人間が多い。景色を見たいわけでもなく、都会の流

れを客観的に見ているだけだ。毎日そこで戦っている自分の休息、傍に存在を移すこと

で感情に浸ることができる。

「こっちは大変だよ。これから戻って、すぐ仕込みにかけられないと」

「飲食店でもやられてるんですか」

仕込みという言葉にピンときた。職業柄、様々な人間と接する機会があるので人物像

の判別にはいささか慣れている。少々の小太り、穏やかな人柄をみるところ、中華料理

屋の主人と思える。

「ああ、こう見えてもねえ、店を持ってるんだよ」

「本当ですか。凄いですね」

店を持つてるということはオーナーシェフか。ヒルズってことは、相当腕のいい人物

なんじゃないだろうか。六十歳の手前、この語調からも人の良さが窺える。

男は心にあるモードを切り替える。奥に眠る悪魔が顔を出す。

「六本木ヒルズに店を持たれてるんですか」

「そう。割と繁盛してるよ。明天家っていう店、知ってるかな」

「知ってますよ。名店じゃないですか」

「名店か。それは嬉しいな」

明天家といえば、多くの人間が一度はその名を耳にしたことのある名前だ。本場さな

がらの四川料理が人気を博している。そのオーナーシェフが今ここに、俺の後ろにいる。

こんなチャンス逃さない手はない。

「一度だけ、食べに行かせていただいた事があるんですよ」

「本当かい。君みたいな若い人が珍しいな」

嘘ではない。男は偶然にも明天家で食事をしたことがあった。美

美味しいものを食べさ

せてあげる、という裏の魂胆の見える女の財布で。ここでそれを明け透けにすることはしないが。

「いえ、僕も上司の奢りで連れてってもらっただけで。あそこの料理は何を食べても素晴らしかった」

「おいおい、お世辞かい」

「そんなんじゃないですね。素直な気持ちです」

「そうかい、それならこっちも素直に受け取っておくよ」

客は上機嫌だ。男の言葉に気を良くしている。攻めるなら今だ。

「ただ……」

「何だい」

「いえ、何でもありません」

男は言いかけた言葉を嚥む。無論、初めからそのつもりで。相手がそれに乗っかって

くれば、ペースはこちらのものだ。

「途中でやめるなんて気持ち悪いじゃないか。いいから言っておくれ」

掛かった。人は会話の歯切れの悪さに違和感を覚える。それが自分に関わることなら尚更のこと。

「気にしないでください。僕みたいな若僧の思っことなんて、きつと大したことないですから」

「いいや。そういう意見こそ、是非聞いてみたい。教えてくれな

いか」

「じゃあ……よろしいでしょうか」
うん、と客は頷く。車はちょうど赤信号で停止した。男は申し訳なさそうに言葉を並

べていく。

「接客でいくつか気になったことがあります。若い男性店員が髪型を気にして触って

いて。その後、その手を洗うことなく物に触れていたことに幻滅しました。女性店員同

士が談笑している場面も何度か見られました。あれでは、客が声を掛けにくいかもしれ

ません。あと、水を客が頼む前に積極的に注いでくれるのはありがたい心掛けですが、

グラスに水がなくなってから注ぎに来ることが多く見受けられました。どうせやるなら、

水はグラスの半分以下になった頃には注いでもいいと思います。四川料理ですから、水

の減る量も必然として多くなりますし」

男の発する言葉はどれも的を得ていて、客はその様に引き込まれた。どこの馬の骨か

も分からない運転手の若者が一度来ただけの店をこれほど捉えていることに感心の一手

しか生じてこない。

信号は青に変わる。男はそれに気づき、車を再び走らせる。

「すいません。今言ったことは忘れてください」

「何を言ってる。とても参考になる意見だったよ。オーナーといつても厨房にいるこ

とがほとんどだからね。接客についてはフロアマナージャーに任せ

てるんだ。君の意見

は大変参酌にすべきものだ。ありがとう」

客の真つすくな言葉に男は恐縮する。
車道の上から伸びる看板が六本木に入ったことを示す。車はまもなく目的地へ着く。

客は名刺を差し出し、男に感謝を述べる。名刺には確かに先の通

りの肩書きがあつた。

自分の手を開くには充分の人間だ。

「またウチの店に食べに来てくれないか。君のような人には是非とも来てもらいたいんだ」

「そうですね。ただ、僕みたいな庶民には近づきがたくもありますけど」

「なあに、ろくに味も分らないくせに金だけ持つてる人間よりも余程マシだ」

「ありがとうございます。機会があつたら、伺わせていただきます」

車は目的地へ到着し、料金は表示額より多めの札をもらった。情報提供料だからと、

お釣りはいらなと言われた。遠慮がちに男はそれをポケットマネーへとする。

「そうだ。君の名前を聞いておこう」

「僕ですか。大田恵一といいます」

客は満足気にヒルズの高級観へと紛れていった。男は名刺を片手に揺らしながら雨空へ掲げる。思わず、奇妙な笑みがこぼれていった。

仕事が終わった夜中、男は渋谷に向かう。泣き続けた雨雲は、この頃には小降りに変わった。黒傘を差して歩くと、その先から適度に雫が垂れていく。まるで、雨雲に

つられて傘まで泣いているようだ。そうか、お前も悲しいのか。奇遇だな、俺も悲しい

んだ。悲しくて悲しくてたまらないんだ。こんな不定な感情、どこかに捨ててきてしま

いたいけれどダメなんだ。俺はこのやりきれない思いを抱えて生き

ることを決めたから。

忘れてはならない過去を背負って。

なあ、雨雲よ。お前は どうして泣いてるんだ。

渋谷の高級マンションの一室に着くと、合鍵を使って中に入る。

そう、この部屋は男

のものではない。所有者は今とは不在なのは知っている。男は荷物をリビングに置き、体

をシャワーで洗い流していく。一日の膿を落としながら、自己と見つめ合う。外部の汚

れが消え、現れる内部の本性。その卑しさが本物の自分であることの確認。

俺は汚い。心の曲がった歪な人間なんだ。

風呂上りに硬水を口に含ませ、窓から外観を見下ろす。すでに明け方となり、辺りは

白く透けた世界が芽吹きだしている。毎日変わらず訪れる世界、不秩序で不調和な欲望

の彷徨う世界。俺はここで生きている。そして、俺も例外になることなく危険な世界の

一片となっている。ただ、一片だけで終わる人生など送るつもりはない。俺はこんな廃

れた集団に埋もれる逸材なんかじゃない。一片どもを踏み倒し、押し上げるべき人間なんだ。

「あつ、来てたんだ」

インターホンとともに、女は部屋に入ってきた。男を視界におさめると、表情は急に

明るくなる。女はこの部屋の所有者だ。二十五歳、男よりも年下になる。それが何故、

こんな身分不相応と取れる部屋に住んでいるのか。答えは簡単だ。それに見合った金を

持っているから。

「ずいぶん変わった趣味の男とご帰宅だったな」

「違う。あれはアフターに強引に誘われたから。結構良いボトルとかオーダーしてく

れる人だし、断りきれないの。そうでなけりゃ、誰があんなもっさい奴なんかと一緒にいるのさ」

女はキャバクラで働いている。それも、そこそ有名といえる高級店で。その業界にどっぷり浸かってしまってる人間なら、おそらく名前を知っているであろうレベルだ。

女はその店でナンバーツの座に就いている。元々持ち合わせている美貌に加え、甘え上手の聞き上手。女性関係に苦労している男性ならば、一発で勘違いしてしまうだろう。

そして、今さつきマンションの下で女の隣にいた奴もその中の一人になる。見た感じは五十代、スーツから窺うに役員クラスの会社員といったところか。収入はそこそこにあるし、家族も養えているが、異性に対しての胸の疼きがどうにも欲しい年齢なのだろう。

男としての機能、その最後の悪あがき。惨めな分、哀れみで許してやりたくなる。

女は後ろから近寄り、男の裸の背中に身を寄り添わす。

「私が愛してるのは恵一だけだから」

息を吹き掛けるような柔な声を背に伝える。頬をそつと擦りつけ、唇を何度かつけ、

男の体に回した両腕の指先で胸から腹部あたりを摩る。愛撫に入ろうとする女の両腕を掴み、解いて下げる。

「疲れてるだろ。無理なくていいよ」

「そんなことないよ。恵一がして欲しいんなら頑張るし」

そう言い、男の乳首を捏ねくる。女は異性の乳首が好きらしい。遊んであげれば素直

に反応し、突起してくる様が愛らしいと言っていた。自身についても、そこが性感帯と

主張している。なので、性交渉の時には入念に攻めることにしてる。女はなんとも言え

ない喘ぎ声を届けてくれる。性器も同じ変化を起こすが、過去の経験から嫌気が伴って

いるようだ。女はキャバクラの前に泡姫としても働いていた。数ヶ月の期間だったが、

毎日数人の性器を感じさせることが嫌になって辞めたらしい。元来、そんなところに格

好のいい男性なんて来るわけもない。応対するのは年齢もいき、不潔さも備わった奴ら

ばかりだ。そんな性器を触り、舐め、口に含むことに抵抗感を憶えるのは普通といえる。

女はそれから本番のないキャバクラの仕事に移り、そこで成功をおさめた。泡姫時代の

客も来てくれるようで、出だしから女の成績は伸び続けたようだ。

「仕事の後は眠った方がいい。休みになったら、いくらでもしてあげるさ」

「はあい」

不貞腐れぎみな女の頬を手のひらで撫で、唇を奪う。強気に押しつけていくと、気が

高揚したような声をあげていた。女を手なずけるぐらい簡単なものだ。異性としての武

器を最大限に使えばいいだけのこと。

男は仮眠をとり、七時前には女の部屋を出た。自宅にも戻らず、会社に向かうため。

タクシードライバーは勤務時間が長い。実働だけでも一日で十五時間近く、事務や洗車

なども含めれば大した重労働になる。運動量は少ない職種だが、あの座席にそれだけの

長さを過ごすのも労力は問われる。慣れないうちは気が滅入ることも多い。それでもこ

の仕事を続けるのは相応のメリットもあるからだ。昨日の一件が例になろう。ヒルズの

明天家のオーナーシェフ、あんな出会いはそうそうあるもんじゃない。男が平穩に普通

の人生を送っていれば、おそらく無かったであろう関係だ。不思議なもので、物事とい

うのは強い信念に共鳴されるところがある。普通の男には普通の人生があり、そうでは

ない男にはそうではない人生がある。男の願いには数奇な巡り合わせが必要だ。そして、

それを強固に望む人間にそれは訪れる可能性が高い。

男は過去を秘密にしている。隠すべき過去がある。悲惨な人生を送り、選び、二度と

そこに戻らぬことを決めた。環境による拒否権のない己への罰、自らの手で下した他へ

の罰。それを忘れず、心に刻んだまま生きてきた。忘れようにも忘れることなど無理だ。

だから、深く深く刻みつけた。傷の深さがバロメーターとなり、この体の内側を幾度と

なく叩く。伸し上がれ、どんな手を使っても。そう叫んでいる。悪魔に魂を売った男に恐いものなどない。男を踏み、女を抱き、

人間を騙す。選択肢

は少なくていい。進むべき道は決まっているのだから、余計な迷いは必要ない。知恵と情報に長け、残酷な判断を下せる者に勝者の切符は渡る。下手な正義感を翳し、聖者のフリをしている者が勝つことのできない不条理な世であることぐらい悟っている。その道を渡るために、今は地味な仕事を地道にこなす日々を選んでいるのだ。

白い靄を粧し込み、太陽が光っている。我を主張するその様は悪くない。民衆に期待されながら、雲に邪魔されることも多い。主役だが絶対的ではない。弱さを見せること

は好感を呼ぶ。太陽が女だったら惚れてるかもしれない、そう思った。おそらく、男を

惑わす存在のはずだ。自分に通ずるものがあり、共感が生まれる。

連なる建物の数々の流れは気持ち固くさせる。都会はこんなにも刺激的なのに、どこか中身の無さも感じる。執拗に飾りすぎ、内容が伴っていない部分もある。様々な関

係が詰まってるのに孤独感も否めない。楽園の集合体のような場所なのに不快でもあり、情報が飛び交っているのに不都合でもあり、それぞれが自己をこれでもかと発信してるのに不思議でもあり、ありとあらゆる物が揃っているのに不自由でもある、大抵が底をつくような生活を送っていないのに不機嫌でもあり、普通な望みなら大概が叶えられるのに不平不満を漏らす。全員が独りばっちなんだ。単体が複数いるだけの淋しい世界、

そうではない。我光ると燃える太陽だってそうなんだ。

そう考えると、大通りの左手から適度なアピールをする姿が見受けられた。客だ。

女性二人、一方は五十歳代とみられ、一方は四十歳前後とみれる。

前者は全身を高級品

でどうだと言わんばかりに着飾った貴婦人のようで、後者は適度に洒落込んだ洋服だ。

明らかに、前者が主役、後者が引き立て役。それを両者ともが理解し、納得している。

タクシーに乗り込んでくる様で存在感の強さが分かりうる。前者の醸し出す気は一般

のものとは違う、奇抜で重みもある静かなものだ。後者は前者になぞらえるようにし、

前者の存在をおろそかにしないための振る舞いをする。この女は一流だ。男はそう直感を働かせた。

「どちらまで」

行き先を軽く促す。

「東京駅まで行ってちょうだい」

言ったのは後者の女の方だった。そうだろう、それは引き立ての役目だ。前者の第三

の手足となり、第二の頭と目を利かせる。完璧な裏方になる事で能力を際立たせ、前者を投影した縁に自身を映し込む事で己の存在を確立させる。曲折的ではあるが、こんな

人間はごまんといる。上に立つ者の参謀としての役割を担い、それに全力を投じ、そこに才能を見い出す者もいる。それは時として、上を脅かすほどの仕事をやってのける場

合もある。そう、人間は決められた日々を脱却し、逆転をする可能

性も秘めている。だ

からこそ、人生というゲームは面白い。

「十三時二十分発の新幹線に乗ります。しばらく時間が空くので、駅で昼食を摂りましょう。」

あと、先方様へのお土産も何か買っていきましょう」
後者の女の言葉に、前者はそうねと返す。言い慣れたようなやり取りに、常日頃の二

人の会話なのだろうと察する。新幹線で行くのは大阪か福岡だろうか。それ以外もありうるが、そこら辺が考えやすいところだ。

男は女のことを知っている。無論、前者の方を。過去に交流があったわけじゃない。

男が一方的に女のことを知っているだけだ。女の方は男のことなど知る由もない。映像

を通し、女の記憶が脳にインプットされているのだ。女は役者をしている。年齢からも

予測できるだろうが、熟練の域に達した位置にいる。ミーハーな面のない男でも一発で

分かりえるだけの大物女優だ。作品にのみ限らず、情報番組や報道番組でも顔を見たり

する。男はどちらかといえば、そっち側で女を拝見する事が多い。点を突くような発言

は聞いていて口角を上げさせられる。

この女を手なずけさせたい。男はそう腹を動かした。表には出さぬ悪考が蠢き、全身

に漲っていく。こんな、またとない好機を見逃すわけにいかない。この短時間の密室な

空間の中で勝負を決す。おそらく、相手は中々に手強い。ただ、そんなことに怯む自分

じゃない。やってやる、決めてこそその咲花だ。

「ねえ、お兄さん」

きつかけは意外にも女の方からだった。どう攻め出していくかと倦ねる中、手は相手から差し出された。

「はい。何でしょう」

語調は普通を心掛けた。接客業における普通は幾分か足される部分もあるが、過ぎることのない程度の爽やかさで。緊張はしていない。映像で目にしていた人物を車に乗せている事ぐらいで浮かれたりはしない。そんな事をした時点で、そこに明らかな優劣が出来てしまう。自ら墓穴を掘るようなマネはしない。

「タバコを吸ってもいいかしら」

「はい、もちろん。そんな事、お聞きしないでいいですよ」

「そう。吸われるのが嫌な人もいるだろうから、一応聞いてみたの」

「そうですか。すいません、お気遣いいただいて」

バックミラー越しに女と目が合う。少しばかりの笑みも付属されていた。女は後部窓を開け、タバコに火をつける。その行為は女の体に馴染んでいて、その姿は様になっていた。

男はタバコを吸う女が嫌いだ。男が吸うべきものと差別するつもりはないが、女性にはどうにも合わない気がする。格好をつけてるようにしても、様にはならない。それは元々に備わっていない要素なのだと思う。長髪の合う男性、筋肉質の女性、そんな感じに需要も供給も少ない。例外も当然にある。格好がよければいい。それを満たす者には

一切の文句はない。そして、女はそこに適っていた。

「お兄さん、タバコは吸うの」

次の一手を考えていると、また女からの手が伸びてきた。都合よく事の進む状況に男

も惑うが乗らない手はない。流されないよう、流れに置いていく。

「気分次第ですね。吸う人と一緒にいれば吸いますし、吸わない人となら吸わないし。

一人でいる時もそのときの心持ちで変わります。あまりタバコに執着はないんで、無いなら無いでも構わないっていうぐらいですかね」

この言葉に嘘はない。男にとって、タバコは気休めか武器ほどではない。吸ってる

様に色気を感じるという女が相手なら何本でも吸うし、明日から法律で全面禁止される

というなら特に意見はない。

「そう。似合いそうだから、もっと囚われた方がいいわよ」

「そうですか」

「そうよ。お兄さん、中々綺麗な顔立ちしてるじゃない。もう少しワイルドに男臭く

したり、格好つけたりしたら結構良い男になると思うわよ」

「そんな……俺なんか全然ですよ」

わざと萎縮してみせる。相手のペースに巻かれてるフリをし、こちらの間合いに入れ

込む。上下関係は成立している。車内の二人の女性のように。ただ、それをどう利用す

るかは本人次第だ。牙を剥き、上を食つてのける逸材の下位もいることを心得ていなけ

れば、それは下にとつてはやりやすい限りになる。

「お兄さん、モデルか演技の経験は御有りかしら」

「いえ、そんなのあるわけじゃないですか」

「勿体ないわね。折角の素材なのに活かさないとダメよ」

男は魅力的な顔をしている。世の人間の十中八九は彼を男前と判断するに違いない。

それも、周辺にいるような仲間内のレベルではない。この男には何かがある、と思わさ

れてしまうものがあるのだ。それはこうした一般社会の中に紛れていようと、分かる者

には分かってしまう。感性の鋭い人間は同じ類の者を察知する嗅覚があるものだ。

「ありがとうございます。お客様にそんなことを言っていただけるなんて光栄です」

「なにもお世辞で言ってるんじゃないのよ。私、そういうことを言うの好きじゃない

から。お兄さんはこんなタクシードライバーなんかでいちゃいけないわ。どうかしら、

芸能の仕事に興味は」

「芸能……ですか」

「私のこと、知ってるでしょ」

「はい、存じてます」

女の名前は久留米雀だ。今まで気づいてる様子は出さなかったが、最初からもちろん

認識している。客のプライバシーを詮索することはしない。相手から開放するまでは。

女は二本目のタバコに火をつけた。後者の女は前者の女の話に口を挟んではこない。

暗黙の中で二人には通じている何かがあるのだろう。出るべきところ、そうではないと

ころ、それが出来上がっている。

「あなたは磨けば光る。だから、お兄さんにその気があるなら私がサポートしてあげ

るわ。人脈は広いから心配しないで」

男は言葉を失くす。返答は決まっている。あくまで、悩んでいる仕草をバツクミラー

越しに女に届けているだけだ。流れる会話の一つにすぎないが、それは男の人生を左右

させるだけのこと。即答などするはずはない。そんなことするのは、余程の自惚れ屋か頭の悪い人間だろう。

「すいませんが、今すぐに返事できる内容じゃないというか」
「まあ、そうね」

言いかげんする男の気持ちを察したように女は早い言葉を投げた。女の側からしても、放った餌に難なく引つ掛かる素材に用はない。自分が名の通った女優だから安心だろう、と楽観した人間に興味はそそられない。

前者の女は後者の女に言い、久留米雀の名刺を男に渡させた。

「返事はいつでもいいわ。気が変わったら、その電話番号に掛けてちょうだい」

女から要求を受け、男も自分の名刺を渡した。

「大田恵一ねえ、普通の名前なこと」

「すいません」

「いいのよ、自分で決めるものじゃないんだし。私もね、芸名なの。本名は教えないけど、いたって普通よ。親からみても、子供の一生に係わる事だから無難な選択をするんですよ」

車は目的地へと到着した。伝統的で古調な建築と未来的で新調な建築が周囲に並んでいる。人の往来は激しく、平日の昼間とは思いがたい。その渦の中へ、後部座席へ乗っ

ていた女二人が巻き込まれていく。都会の人間はよくもあんな不規則な流れに対応して

いけるな、と思う。あの中に放り込まれば、男なら吐き気を催す。いつからか、孤独

に身を寄せる生活を安息としてしまっていた。抜け出すのは困難な絡みに嵌って。抜け

たいと思ったことなどないが。

女は去り際、催促の言葉を残していった。男はそれに作り笑いで応える。当然に似た

展開だが、全て男の思い通りに事は運んでいた。回答を先延ばしにしたのは次の展開へ

繋げるため。結果、女の名刺を手に入れることが出来た。並みの暮らしを続けていて、

こんな転機の出会いをする可能性など皆無に等しい。大物女優と会い、スカウトの誘い

を受け、連絡先を知る事など。

男は自らの成果に笑みをこぼし、太陽へそれを向けた。

その2（前書き）

登場人物

大田恵一・おおたけいいち（タクシードライバー、野望を携えて生きる野心家）

片柳彩子・かたやなぎあやこ（モデル、今どきの十代で分かりやすい性格）

久留米雀・くるめすずめ（女優、誰もが一目置く大物）

野木晃彦・のぎあきひこ（大田の学生時代の同級生、既婚で子供もいる世帯主）

柴村忍・しばむらしのぶ（週刊誌記者、久留米の連載を担当している）

亀谷右京・かめやうきょう（刑事、大田と過去に接してから後を追いつけている）

光村沙耶・みつむらさや（キャバクラ嬢、名の知れた有名店でナンバーツーを誇る）

その2

明朝、男は渋谷の高級マンションを訪れていた。良い獲物に会えた喜びもあり、気分

も珍しくいい。しばらくしてキャバクラから帰宅した女も雰囲気からそれを察し、そこ

を突こうと甘えを出す。男もそれに応じ、行為は白い光の差し込む部屋で続けられた。

男の制圧、女の喜色、一つに繋がった二つの肉体から欲が噴き出す。行為が終わると、男は天井をどこということもなく眺めながら考えを巡らす。甘えて

くる女は適当に往なしておく。女は終わってから男の体を物欲しげに毎度触ってくる

から。泡姫時代に嫌気が差したはずだが、血は男によって再び戻ってしまったらしい。

「そんなに俺の体が好きか」

「好き。大好き。独り占めしたい」

女は男の体を愛おしく抱きしめる。この体を自分だけのものにしたい。他の誰にも渡したりしない。

「困った奴だな、お前は」

「困っちゃう、私も。離れられないんだもん」

男は泡姫の頃の女を知らない。女と初めて会ったのは今も働いているキャバクラだ。

男はそんな場所に興味はなかったが、別の興味があった。なので、この手の店に通って

いる会社の先輩に仕向け、良店に連れていってもらうことになった。

そのときに男の隣に座ったのが女だった。店での名前はしおり、今は光村沙耶として接している。最初は今どきのギャルという印象だったが、よく話していくと客にうまく溶け込む術を持っていると読み取れた。甘え上手の聞き上手、さらに容姿も口を挟むところはない。会話の内容から、客の立ち入った部分まで聞き出すことをしていることが分かった。それが男の望む、別の興味の部分だった。この女は使える、そう判断すると男は女を口説きにかかった。ミ―ハーなところのある女は男の外見に好印象を抱いており、その日のうちに連絡先を交換する。それからメールでやり取りをしたが、女の文章が客に対するそれではないことは分かりえた。すぐに電話でのやり取りへと変わり、会う約束を交わし、初めてのデートで女の家で性交渉まで進んだ。女は泡姫の経歴を隠していたが、ある日に男へ打ち明ける。隠していることが苦しくなるほど、男に嵌ってしまっていたから。男はそれを咎めるどころか、変わらぬ態度を続けてくれた。それで、女の心は完璧に男に持っていかれてしまった。女は男を愛している。結婚したいと本気で思っている。将来の家族像を妄想すること。は日常茶飯事となっている。子供は二人か三人、いくつになっても愛情の絶えない関係でいたい。そう切に願っている。ただ、女の希望には障壁が存在する。男は女を愛して

はいないからだ。女には真剣な恋でも、男には見せかけでしかない。この体を時間的に遊ばせてやる代わりに、女の特性を利用させてもらう。それだけのこと。愛情は一方的なものであり、女はそれに気づいてはいない。

「恵一、私のこと愛してる」

「ああ、愛してるよ」

「どのくらい」

男は考える素振りを見せ、女の目を見ながら告げる。

「どうにかしてやりたいくらい愛してる」

その言葉に、女は鳥肌が立つほど感動を覚える。偽者の愛情を疑うことなく、感情の

深さを本望と抱きしめる。その欲が愛欲ではないと知らずに。

女は男の過去を知らない。女が知っているのは男の出まかせの情報だけだ。その裏に潜む本性など知る由もない。もしそれを知ったら、女はどうするだろうか。恐怖に慄き、必死に逃げ出すのだろうか。真逆に、それでも男から離れられないほど愛してしまっているのだろうか。

男は夕暮れ前、女が仕事場へ向かう時に部屋を出た。この日は休日だったため、ジムや飲み屋で時間を過ごし、ほろ酔いで家に帰った。男は会社の寮に住んでいる。社員寮といっても男性しかいないので、無意味なむさ苦しさが建物には充満している。住人の平均年齢も高く、何という理由はないが汚らしいような錯覚も生まれる。部屋は狭く、

快適とはいいがたいが、男性の一人暮らしにはこれぐらいで充分だ。

住み心地は悪くは

ない。労働時間の長い仕事なので、ここで暮らしている分は金は膨れていくばかりだ。

男は基本的に物欲に乏しい。愛欲にも飢えていない。その分は全て出世欲へと回って

いる。人間として高い位置、それが欲しい。今まで自分に傷を与えてきた奴らを見下し、

手玉に取れるだけの位置が。物欲も出世欲に繋げるための欲、愛欲も出世欲に繋げるた

めの欲、そう決めている。これまでの泥にまみれた人生の精算にはそれが要だ。男は

瞑想を巡らせる。どうすれば、飛躍的に舞い上がる事が出来るのか。日付の変わる前に寮の大田恵一の部屋の明かりは消える。その様

子を遠くから眺めている一人の男がいた。男は踵を返し、夜道を歩き出す。今日も何も変化は起こらない。

それでも、男はたまにこうして大田の動向を追っている。

男は刑事をしている。名前は亀谷右京。大田を追っているのには当然に理由がある。

それは彼が起こしたはずの過去の事件によるものだ。その事件は解決している。大田で

はない別の男性が逮捕され、加害者であることを認め、今も刑務所で罪を償っている。

だが、男はそれに納得をしていない。大田恵一が必ず事件に絡んでいると確信し、こう

して仕事外の時間に現れている。

過去のあの男の目は何かをしでかした目だ。現在の目はこれから睨んだ目だ。あの

男はこのままでは終わらない、そう思っている。何かが起こってからは遅い。未然に

食い止め、過去の過ちも浮き彫りにさせてやるんだ。そう決意した男の目は夜の闇に光を放っていく。

昼下がり、空席のタクシーを走らせる大田に予約の連絡が届く。それはGPSによる会社からの無線ではなく、男の携帯へと個人的に寄せられたものだった。年季の入ったハスキーな声には機嫌の良さも窺え、男は手応えの有無を事前に予想しえる。

昼間から人通りの多い赤坂の名所近くへ位置づけると、約束の間まではあったので男は以前に手にした名刺を眺めていた。成功の空想を描いていると、車窓を小突かれる音がする。助手席の窓を開けると、女性が軽い笑みを浮かべて立っていた。女性というより、女の子と表現した方がいいような感覚を受ける。

「今、いいですか」
乗車をお願いする意味だろう。女の子がこちらに向ける笑みはなんとも可愛らしい。ちよつと首を傾けてるあたりがそれを増しにさせる。

「すみませんが、予約のお客様を待ってるんですよ」
えゝつ、と女の子は落胆する。隣にいる二十歳代後半にみられる女性と二言三言交わ

すと、再び助手席の窓から顔を出した。

「分かりました。すみません」
そう言い置くと、女の子は女性と困った表情を見合わせる。よく見みると、女性が

二人で持つには過剰なほどの大荷物がある。男は腕時計で時刻を確認し、身を乗り出す

ようにして大きく声を掛ける。

「どちらまで行かれるんですか」

振り向いた女の子の告げた行き先は近場だった。車なら五分もあれば着くほどの距離のところだ。

「いいですよ。乗ってください」

「えっ、いいんですか」

「はい。予約の時間まで少しあるんで大丈夫ですよ」

「やったっ、ありがとうございます」

女の子はしゃぐように喜んだ。その笑顔は女の子の先にある太陽に見劣りしないだけの質を放っている。若さから成る輝きは侮れない。倍数に等しいほどの力を持ち合わせているのだから。

大荷物はトランクに積めて、車内にもいくらかを持ち込んだ。後部座席に荷物とともに女性が座り、助手席に女の子が座る。左隣から移ろってきたのは甘みのある香水の匂いだった。

「ありがとうございます。ホントに助かりました」

「いえ、僕は普通の事をしただけですから」

女の子は言葉の通りの表情を見せている。言葉は弾み、表情は生き生きとしている。

このぐらいの年代なら、毎日が新鮮で楽しいのだろう。自分にはそんな時期はなかったけれど、そっちが通常だ。

「近いんですけど、荷物が多いから車じゃないとダメだなんてなっつて。でも、あんな大荷物ぶらさげてタクシー待ってるのとか超目立つじゃないですか。だけど、ちょうど

いいところにタクシーがいてくれて。しかも、お兄さんみたいに超
良い人でラッキーで
した」

「運がいいですね、お客さん」

「ホント、そうですよお」

よくいるタイプの若者といった感じだろうか。少なくともあるが、
この年代の子を後ろ

に乗せることもある。運転手なんかにはまるで興味がなく、後部座
席で携帯をイジって

いることがほとんどだ。話を耳にしていると、とても着いていける
内容ではない。そう

しようとも思わない。もちろん、若者の全員がこうであるとは思っ
ちやいない。そんな

奴らのために、一部の優等生を同じ括りにするようなことはしない。
そんなことしたら、

男まで昔はそんな括りの中の人間だったことになってしまう。

「ずいぶんな荷物ですね」

「そうなんです。重いつたらないし。だからって、引きずった
りできないし」

見たところ、大荷物の正体は衣類だと思われる。外から見えるも
のもあるし、トラン

クに詰めてあるものもある。二人に対してでは相当な量だ。買物や
旅行の類による多さ

でないことは読み取れた。

「スタイリストとかじゃないですよね」

「違いますよ。自分で着る用です」

そうだろう。女の子は演者の側の人間だ。裏方の存在感ではない。
華々しい場に身を

置く仕事をしているはずだ。

「私、スタイリストに見えますか」

冗談めかしく聞かれた。

「いや、スタイリストにしては可愛すぎるなあって思っ」

「うつひよ、可愛すぎるだってえ」

男の煽てに乗り、後部座席の女性へと感情をひけらかす。女性は裏方の人間だろう。

単純に見て、華がない。

「ただ、洋服がとても多いんで」

「ああ、これはプレゼン用なんです。私、モデルやって。今度、ブランドとコラボ

する企画があつて、そのプロデュースをするんですよ。その会議が今からあるんです

けど、そのためのもので」

「へえ、凄いですね」

「いやあ、まだまだ全然ですよ」

モデルか。身長が低めなところを見ると、ティーン系の雑誌だろうか。身につけてる

洋服やアクセサリーからしても、そんな印象だ。シンプルなところもあり、派手なところもある。冒険をしたいが、枠を外れるのは恐れる年頃らしい。

「運転手さん、私のこと知らないですか」

不意に言われたので、虚に入られる。走行中なため、助手席の顔を確認はできない。

さっきまでに目に入った記憶から女の子の顔を浮かべる。どうにも、男の過去にそれは

無い。

「すいません。疎いもので」

「いいですよ、謝らないでも。私が出てるような雑誌、運転手さんは見てないだろうから」

言葉から察するに、この女の子は男より年下の年代なら一般的に

知られてるぐらいの
認知度の子なのだろう。確かに、煽てで使ったが「可愛すぎる」と
いう表現は行き過ぎ
ではないと思う。男が女の子と同年代で、正常な人生を歩んでいた
ら間違いなく恋心を
奪われていることだろう。

「そうだった。運転手さん、写メって撮ってもいいですか」

「いいですよ、そのぐらいご自由に。何を撮るんですか」

「運転手さん」

「僕の、ですか」

はい、と女の子は頷く。男には理由が掴めず、返答に迷ってしま
う。

「どうして、また僕なんかを」

「ブログに載せたいんです。私、自分のブログも持ってるんで、
折角だから今の事を

書きたくて。そんで、運転手さんの写真も一緒に入れたいんですよ」

なるほど、そういうことか。ブログというものは、なんとなく認
識している。日々の

何気ない出来事を掲載したり、様々な情報伝達のツールとして流行
している。著名人が

日記的な活用をしているのも知っている。だが、男にとっては現実
味のないものでしか
ない。

「申し訳ないですが、それは遠慮させてください」

「どうして。損はないですよ。きっと、運転手さん目当てでタク
シー乗る子とかいま
すよ」

「僕についても書くんですか」

「運転手さんさえよければ」

女の子の言葉はいやに通常のだ。現代の若者からすれば、こうし

て日常を切り取り、

見も知らぬ大勢の人間とそれを分かち合うことは普通なのだろう。
深みのない欲求の共

有、そんな自由気ままな要求に引き出されるのは御免だ。

「すいません。やっぱり、僕のことを書くのはお断りさせてもらいます。仕事中的事

を書かれるのは、会社の事なんかも係わってきますし」

そっかあ、と女の子の弾んでいた気は沈んでしまふ。携帯を顎元にあて、なにか考えている。

「後ろ姿はダメですか。運転手さんが誰か分からないし、会社も分からないようにするから」

再び、女の子は食い下がってくる。何故、そんなにブログの掲載に固執してるのかは分からない。女の子にとって、ブログはそれだけの価値のある事物ということかもしれないが。

「何で、そこまで僕を載せようとするんですか」

「だって、運転手さん良い人だから」

「それだけですか」

「それに、結構格好いいし」

やはり、男の考える通りのようだ。感情の共有、深みはない。男には理解しがたいが、

おそらくこれが世の通常なのだろう。

「分かりました。折れますよ」

「ホントに。いいんですか」

「はい。お客さんには負けました」

「やった。ありがとうございます」

写真は後部座席の女性に頼み、ポップな音とともに撮影された。

別に、緊張はない。

自分は風景の一部、そう思えば気楽でいられる。主役でもなく、脇役でも端役でもなく、あるのかどうかも定かではないほどの微小たる存在。有名モデルと対等に接しているの

ではなく、ただ姪の気まぐれに付き合わされている叔父の類。

写真が撮れたところで、目的地へと到着した。女の子と女性は改めて感謝を男に告げ、

大荷物を抱えて去っていく。名刺が欲しいと言われたので渡したが、意図は分からなかった。

急ぎめに指定の場所へと戻ったが、客は二人で強く印象を醸す放送局の前に待ち構えていた。時間はあるからと突発的な客に対応したが、さすがに近場

でも往復となると相

応の時間は経過している。

久留米雀とマネージャーは車に乗り込み、行き先に東京駅を告げる。新幹線で地方へ

また行くのだろうか。車が走り出すと、女は後部座席の窓を気持ち空け、タバコを吸い

出す。今日は喫煙の了承は取ってこない。一度取れば、あとは前に同じくというところなのだろう。

「少し遅かったじゃない」

「すいません。予約車の表示は出していたんですけど、高齢の方が乗車を求めています」

して。聞いたところ、距離も近めだったので送っていました」

大まかな内容は引き継ぎ、大荷物の若者という部分だけ高齢者に変更しておく。この

場合、こっちの方が情を勝ち取れる可能性は高い。

「あら、ずいぶん優しいのね」

「いえ、そんなことはありません」

どんな態度を取られるかと警戒はあったが、年齢を熟してるだけあつて冷静を保つて

いた。女優という職業はそれこそ作品ごとに違う制作陣や役者と仕事をする。臨機応変

な性格が求められるはずだ。そこで一線を張り続けているということとは、その能力に長

けているのだろう。若さゆえの暴走などはとうに過ぎ、自己を確立し、寛容な空間を生

み出す。

「正直、怒られるのかなと思って緊張してました」

「どうして。お年寄りの方を助けてたんでしょ。何を怒る事があるの」

「久留米さんほどの女優さんだと、我が強いんだろうなっていうのがあつて。それは

決して自分勝手というんじゃないで、長く人生を歩いてきたからこそ自信という範疇

において」

「そんなことないわ。まあ、そういう人もいるけどね。私は割と温厚な方だと思つて

るわ」

それを聞いて安心した。この年代、この職業に有りがちなギラつきを放たれる女だと

多少やりづらい。だが、温和な女なら手なずけるのに難度は下がる。頭の悪い女に比べ

れば格は上だが、なんとか出来るはずだ。

「そういえば、この前の件は考えてもらえたかしら」

「この前」

「芸能の仕事をやってみないか、ってことよ。もう忘れたの」

「そんな、忘れるわけじゃないじゃないですか。忘れようがないですよ」

すぐに折れる事はしない。軽くホイホイと着いていく人間と思われてはたまらない。

それでは、主導権は明らかに女に握られてしまう。そんな馬鹿な真似はしない。手綱を

握るのは男、馬になるのが女だ。そうなるよう、慎重に攻めていく。

「じゃあ、返事を貰えるわね」

「なんというか……想像が出来ないんですよ、あまりに懸け離れた世界で。」

さすがに、イメージも浮かばないような場所へ自分を投げ出すのはギャンブルが過ぎる

と思うんです。だから、お受けするのは難しいかなと」

さあ、どう来る。そっちが大田恵一を好んでいるのは分かっている。そう容易く手を

放すのか、それとも縋ってくるのか。次の一手はある。それを出すのがどっちからか、

という問題だ。二十代のタクシードライバー、五十代の大物女優、どちらが交渉に打ち

勝つか。世間一般で考えるなら、勝負は見えている。だが、そんな温い考えに浸かって

いるようなら勝負は返してみせる。その自信はある。

「想像が出来ない、か。それはそうね。当然よ」

一つ間を置き、新たな展開を打つように続けられる。

「なら、単純に芸能の仕事に興味はあるかを聞いていい」

芸能、男の本心としてはその仕事に興味などない。そこに集まる人間に野心家が多い

印象はあるが、実際にテレビで見る番組に大したものは見当たらない。深い入口に入り、

どう抜けていけば出口があれだけ浅くなるのか見当もつかない。無くて支障のない番組を消していったら、新聞のテレビ欄はスカスカになるだろう。そんな世界に惹かれるわけがない。

「興味が無い事はありません。あんな華やかな場所にいられたら幸せだろうなと思いますし。ただ、自分があそこにいる画が全然浮かんでこないんです」

「なるほどね」

女はしばし考えに耽る。タバコを何度か吹かしてたが、本人にその意識は左程ないだろう。バックミラー越しにこちらの顔を見遣り、開口する。

「なら、形を変えるわ。私の運転手になる気はない」

「運転手、ですか」

「ええ。こうやってタクシーじゃなくて、私個人の運転手として毎日の送り迎えをするのよ。今の仕事よりも良い待遇を約束するわ」

隣にいる後者の女性に口を挟まれるが、女はそれを制止させる。

「どうかしら。悪い条件じゃないでしょ」

悪いどころか好条件だ。女の思いはしかと伝わった。開けている懐の分だけ隙が生まれているのに。

「何でまた、そんなに僕を気にかけてくださるんですか」

「あなたにはね、何か強いものを感じるのよ。こんなところで見も知らぬ人間の送迎をさせておくのは勿体ない。ならば、せめて私の近くに置いておくわ。機会があれば、

仕事場にも呼んであげるから。現場を見ているうちに、芸能界に興味が出てきたら私に言ってちょうだい。いくらでも、後ろ盾をしてあげるから」

女は男の気に惹かれていた。それがどんな種類の感情かを分けるには至っていないが、心を揺さぶられるものがあつた。この男は野放しにしておくべき人間ではない。

いつか何かを成し遂げる者の瞳をしている。そう直感し、側に置いておく事を選択した。

他の人間に盗られる前に、と。

「とても有りがたい話を頂いて、ありがとうございます。申し訳ないですけど、また時間を頂いていいでしょうか。すぐには決められないので。こんなふうに言ってください

るのは本当に嬉しいんですよ」

「分かっているわ。それなら、数日経ったらまたあなたに予約を入れるから」

話はスムーズに男へと傾いてくれた。男から手を伸ばさずとも、女から伸ばしてくれ

るので楽に事は運ぶ。才能のある人間を惹くのは才能。男に備わる気を感じ、女は自ら

手を出さずにはいらなかった。男は勝利への自信を高める。この女は俺のものになる、

植えつけるように言い聞かせた。

車は目的地の東京駅へ到着する。女性二人の姿はそこへ消えていき、それを確認する

と男は両手で顔を覆って笑い出す。男の望むばかりの展開に進む現状に面白さを隠せな

かった。今はまだ飛ぶための助走の段階、気を緩めるのは好まれない。だが、思うまま

に駆けていける自らの足は機械のように正確に地面を踏みつけていた。

十七年前のある冬の夜、報せを受けた全ての者を戦慄させる事故が起こった。徳島県

の吉野川流域でキャンプの集会に参加していた十七人が焼死したという報道はその日の

トップニュースで扱われ、人々に居たたまれない思いを刻みつけた。

当時、現場を目にした時には悪い夢でも見てるんじゃないかと現実を疑った。こんな

惨事が有りうるのか、と眼前の光景を受け入れることは不可能に近かった。消防隊から

すると、現場に到着した時点で火は噴くように燃え上がっており、場所的にも消火活動

が難しく時間を費やした。刑事が現場に足を踏み入れる頃には、空よりも黒く焦げ尽く

された遺体や残骸が残されていた。奇跡を祈る気も生じない。祈りたいのは当然の思い

だったが、それがどれだけの無意味であるかを壊廃した跡が示している。さっきまでは

ここで楽しくキャンプに興じていたはずなのに、今は誰かも分からないような無残な姿

で運ばれていく。湧いてきた感情は悲しいというものではなく、儚いというものが近かつた。

その日、吉野川に集まっていたのは近くにある小学校に通う子供たちだった。引率の

教師の二人を除く十八人が参加。再来週に控えた卒業式を前に、みんなで思い出を作り

たいと決まったのがキャンプだった。夜に始まり、朝には終わり、教師も着いていくと

いうことで親御の了承も得られた。一人だけがインフルエンザでやむなく欠席となって

しまったが、合計で二十人が夜川に集まった。全員でテントを設営し、手分けして夕食を作り、キャンプファイヤーを囲み、それぞれが楽しんでいた。そして、全員が寝静まった深夜に事故は発生してしまった。

キャンプに参加した二十人のうち、帰らぬ人となったのは十七人。そう、三人は助かったのだ。教師の一人、生徒の二人、いずれも無傷だった。教師は子供たちが勝手に出歩く事のないように交代の見張り番をしていて、テントにはいなかった。生徒は寝つけなかった。二人で話していたため、早くに火の手に気づいて逃げる事が出来た。

平和で閑静な街に起こった衝撃的な事故は辺り一帯を悲しみで包んだ。それで終わるのなら、事態は最悪のうちに幕を閉じただろう。悲しみはやがて憎しみとなり、怒りの矛先は学校側へと向けられる。親御たちは学校と引率の教師を相手に訴えを起こした。事態は泥沼と化してしまった。裁判の結果は迷うこともない。引率の教師は火事の時に現場で居眠りをしていて炎に気づくのが遅れたのだから。生徒の証言もあり、言い逃れの仕様はなかった。勝訴によって、親御たちの心の溝は僅かに埋まり、学校側は立ち直れない大打撃を食らった。

亀谷右京は自宅にある資料を読み返しながら、十七年前の記憶を起こしていく。あの事故は未だに忘れることが出来ない。あの現場は今でもこの脳に焼きついており、定期

的に映し出される。男自身にとっても、忘れてはならないと決している過去だ。事故は終わってはいないと思っている。いや、事故ではないのではないかと踏んでいる。そう考える時、いつも浮かぶのはあの少年の瞳だ。

男は瞳を閉じ、窓外の景色を見据えていく。視界には何も映らない。瞳の内側に自らの記憶にある景色を映し出し、感慨に浸る。澄んだ空気、仄かな郷愁、溢れる自然、飛び交う意気、何もかもが望むべきもののなに男はそれを己から廃れさせてしまいたい。

決別したはずの過去、なのに頭の片隅から捨て去る事が出来ない。片隅どころか、それ

はたまに脳内を汚染するように広がる時すらある。忘れられない影、忘れられない声、

それらが自分を苦しめる。一体、いつまでこの意識の中に居座り続けるんだ。そうだ、

金だ。金さえ手に入れば。手に余るほどの富さえあれば、この悪しき記憶を捨てる事が

できる。自分を苦しめてきた物に満たされれば、精神は浄化されるはずだ。もう少しで抜け出せるはずだ。

瞳を開くと、息が荒いでいるのに気づく。唇を噛み、気を正常に戻そうと落ち着ける。

ここは東京、都会の渋谷の一等地。あんな田舎臭い場所の欠片もない。飾られた男と女が飾られた街を歩く景色に、過ぎた街並みの面影は存在しない。

「どうしたの」

言葉とともに、飾られた女の気配が舞い込む。男の体を後ろから

包み、裸の肌をしつ

かりと密着させていく。女は自らを飾り、男を飾られたものと位置づけている。だが、

今の男は飾りの有無の狭間で揺れていた。

「汗掻いてるよ。何かあったの」

「どいてくれ」

「えっ」

「いいから、どいてくれって言うてるんだ」

強い言葉に女は怯む。ごめんと呟き、男から体を離す。男がその場から離れると、女

は裸のまま取り残された自身が惨めになった。視線を向けると、男は冷蔵庫から出した硬水を飲んでいる。

この展開はたまに生じる。男が何かを思うように窓外を見つめ、側に寄ると怪訝にさ

れる。あまり感情を表に曝け出すタイプではないのに、その時はムキになるように怒り

を見せて女を冷たくあしらう。何に心を悩ませているのだろうと心配になるが、それを

訊ねてはいけない気を出されてるようで聞く事ができていない。大田恵一には心の傷が

ある。それが何であるかは分からない。それでも、女は変わらず男を愛している。傷の

内容を聞いてくれるなというのなら聞きはしない。私はあなたを想ってる、それでいい。

元々、影のある男性は好きだ。ただ、そんなことは関係ないほどに男に惹かれてしまっ

ている。

水を冷蔵庫に戻し、大きく息をつくとも男はこちらに歩いてきた。

男の裸は文句のない

素敵な美だ。筋肉は付き過ぎていない程よくで、腹も筋が確認でき、肌も一切の汚れが

見当たらず、容姿は言うことがない。この体にさっきまで抱かれていたんだと思うと、

それだけで浮かんでくる感情がある。

「悪かった。ごめんよ」

そう女の耳元で囁き、孤独になっていた体を抱きしめる。温かさは体内にまで沁みていき、心まで伝わっていく。

「ううん、全然いいから」

それで女は満たされる。簡単に動く純な女の感情は、愛のない男にとって利用すべきものでしかないのに。

その3（前書き）

登場人物

大田恵一・おおたけいいち（タクシードライバー、野望を携えて生きる野心家）

片柳彩子・かたやなぎあやこ（モデル、今どきの十代で分かりやすい性格）

久留米雀・くるめすずめ（女優、誰もが一目置く大物）

野木晃彦・のぎあきひこ（大田の学生時代の同級生、既婚で子供もいる世帯主）

柴村忍・しばむらしのぶ（週刊誌記者、久留米の連載を担当している）

亀谷右京・かめやうきょう（刑事、大田と過去に接してから後を追いつけている）

光村沙耶・みつむらさや（キャバクラ嬢、名の知れた有名店でナンバーツーを誇る）

その3

数日後、男は肌慣れない空間に身を置いていた。四方の壁の彩りには強めの色味が多く使われており、それらが我を出そうと戦ってるようで妙なマッチングをしている。

照明は対称的にシンプルを心掛け、その合わせさり具合がまた変に芸術を感じさせられてしまう。

男は明天家で待ち合わせをしている。六本木のヒルズにかまえる四川料理の名店を男

は選んだ。相手の位に合わせた品位の高い店をと思ったが、向こう側からあなたが緊張

しないお店でいいわよと言われたのでここに決めた。相手にそうは言われても、さすが

に普段通ってるような定食屋や居酒屋に呼び出すわけにはいかない。会社の先輩に教え

てもらった店ではどれも陳腐で役不足であり、大御所を招待する場所ではない。ここも

今の自分には不相応といえるが、心が縛られることはない。

明天家に来るのは二度目になる。前は十歳年上の客室乗務員に連れられて、対応も

なんら特別なものではなかった。だが、今回は相手も名が売れていて、自分への対応も

明らかに変わっている。

「やあ、今日は来てくれてありがとう」

店の奥から現れたのはオーナーの張偉だった。穏やかな表情と油

断した腹の出具合は

健在だ。その姿はそのまま店の入口に飾られてある彼の肖像画に重なる。自らを堂々と

看板にしようとは中々のナルシストとも取れるが、自身をキャラクターとして広告にす

る事で繁盛へと結んでいくのだろう。料理番組で何度か彼を見た事もある。地道に店を

切り盛りするよりもそっちが効果的と知っている。自分が世に好感される人間であるの

も分かっている。図太いかもしれないが、それがこの店にとっての近道なのだから間違

ってなんかいない。間違ってるのは、それを知っててやらない奴だ。明天家で食事がしたいと電話を入れると、わざわざ個室を用意してくれた。友好的と

いえど、一度だけ乗車したタクシードライバーに対してずいぶんな配慮といえる。あの

時の車内でのやり取りがそんなに向こうの気持ちを緩和させたのだろうか。

「いえ、こんな個室をありがとうございます」

「いやいや、君には貸しがあるからね。このぐらい、なんてことはないよ」

貸し、前に言った店の従業員の姿勢への文句か。おそらく、あの後に接客担当者は喝

を入れられたんだろう。とある客からの意見、とでも置かれて。まさか、その客がここ

にいる二十九歳の若僧とは思えない。

「あんな大きな口を叩いておいて、またのこのこ来店するなんてって思ってたんじゃないやあ
りませんか」

「何を言うか。是非、君には来てもらいたいと思っていたよ。逆

に、あんな意見をウ

チの店に持たれたままになんかしておけない」

「なるほど、それもそうですね」

男の言葉に、張偉は豪快に笑った。男も歯を見せて笑みを浮かべる。無論、作り笑い

だが。一つの世界で登り詰める人間、それが目の前の男性にある。

ただ腕がいいだけで

は限界もある。ない人間もいるかもしれないが、大抵はある。人間なんて大したことは

ないのだから。ならばどうするのかとなれば、武器を増やすことだ。

張偉にはこの性格

がある。これだけの人柄が備わっているなら、後を着いてくる者も多いはずだ。

その時、個室の扉をノックする音がした。失礼します、という声とともに女性従業員

が扉を開く。お連れ様が来られました、という声とともに静かに入ってきたのは久留米

雀だった。

「やあ、どうぞどうぞ。ようこそ、いらつしました」

張偉は大物女優を快く迎え入れる。意識的にか無意識にか、その笑顔の量が増してる

ような気がした。まあ、ここで何か粗相でもやらかす事でもあれば、大きな客を逃して

しまふのだから仕方がない。この客を味方にするか敵にするか、明天家にとっては一つ

の試練になるのかもしれない。あの老いた口から今後に発せられるであろう店の評判は

それだけで広告になりうる。それが良いものか悪いものか、それによって広告の価値が

変化する。

女は張偉の導きで男の対面の席に座る。二人に対してでは結構に大きな円卓のターン

テーブルだった。四人から五人用のタイプだと思われる。大物女優の接待に戸惑って、

見栄えも縮こまったものにならないようにとしたのだろうか。店側の意図は分からない

が、無難に正解といえるだろう。あのぐらいの人間にもなれば、安っぽいのは好まない

はずだ。洋服だって、アクセサリーだって、どれだけの値段か想像もつかない。光沢を

放ち、煌びやかな印象は庶民を近づけない。人生において、ある一定のラインを超えた

者でないと足を踏み入れることの出来ない域だ。

女性従業員は部屋から去り、初めの接客は張偉自らが行った。メ

ニューを二人に差し

出し、おすすめを口にしていく。季節やら産地やらのこだわりを話す言葉はどこか台詞

じみている。本人にはそんなつもりはないのだろうか、単純に緊張しているのだろう。

女はそのおすすめをオーダーし、張偉はごゆっくりと言いつつ残して部屋を去った。

「お喋りの上手なオーナーね」

感想か皮肉か、分からない程度に淡々と女が言いこぼす。媚びを売る者、自らを売る

者には慣れているようだ。

「ええ、話しているととても楽しいですよ」

「あなたがこんな店を知ってるとは思わなかったわ」

部屋をぐるりと一周見回し、最後にこちらを向く。目の前の男に相応しいといえる店

とは言えない。容姿なら分かるが、経済的には似合っていない。対

する女の方はこうい

った高級店がよく合っている。中華料理はそんなに食べないらしいが、たまには食べてみたいからと諾了した。

「偶然、オーナーと知り合いになりました」

その経過については、店をここに決めた報告をした時に話してある。男が以前にここ

で食事をした事があり、その後に張偉をタクシーに乗せた際にその話をするとは是非また

食べに来てほしいと言われた、と。

「ふうん。タクシードライバーっていうのはいろんな人を乗せるのね」

あるときは中華料理店のオーナー、あるときは大物女優、あるときはモデル、確かに

それは言える。ただ、そんなに華やかなものでもない。大抵はこの誰かも分からない人間を目的地まで送り届けるだけだ。

「ところで、本題の方なんですけど」

ああ、と男は畏まる。本題とは、もちろん前回要請された久留米雀の専属の運転手に対する返答だ。

「一つ、お伺いしてもいいですか」

「何かしら」

「具体的な待遇を教えてくださいますか」

男の言葉に、女は気をよくする。男は漂っていた浅瀬から深海へと潜り込んできた。

この話に前傾になっている証拠だ。もう何度か押せば、こちらへやって来る。そう女は踏んだ。

「今の会社の待遇を聞かせてちょうだい」

「はい。固定給が二十万円以下あって、それ以外は歩合給です。月によって違いますけど、合計で四十万円弱ですね。乗務にあたる出番は月に十二日、その後の明番が月に十二日、残りの六日から七日が休日になってます。会社の寮に住んでるので家賃は安く済んでます」

なるほどね、と女は考え出す。今よりも良い待遇を、と約束したのだから、それ相応の提示はしないとならない。かといって、運転手にそこまでの金など払えないだろう。金があるかないかではなく、職業的に日の目を見ない。

「月に五十万円出すわ。これでどう」

男は用意しておいた驚きの表情を見せる。女はどうだと言わんばかりだが、男はそれぐらいはしてくるだろうと予想していた。この女の目的は分かっている。男を芸能界に入れさせたいなどという思いはもはや半分にも満たないであろう。残りの半分以上を埋めてきているのは独占欲。男をどうにかして自分の手元に置いておきたいという我欲だ。

卑しい感情だが、そんな卑しさなら誰しも持っている。

「勤務時間は私の仕事に合わせてもらうから、日によって変わって不規則になるけど、拘束時間は少ないはずよ。簡単に言ってしまうば、私が車で移動する時間だけがあなたの労働時間になるわけだから。デスクワークもないし、今に比べれば相当に楽でしょ。そんなにタイトなスケジュールにはしてないから休日もあげられるし、地方に泊り込み

の撮影でもあれば連休にもなるわ」

女は畳み掛けるように男を諭していく。

「住まいは私の家を提供しましょう。今住んでる一軒家の他に、二十三区内にマンションを一部屋購入してるの。別荘も避暑地と海外に一つずつ持ってる、休暇が出来た時には環境を変えたい

時にそこに移るの。私の代わりに部屋に問題ないか見ておいてちょうだい」

やりすぎだろうと思うほどに女は押した。文句のつけようがない条件だが、ここまで

されたら何か裏があるんじゃないかと警戒心を抱かれるのが普通だ。なるほど、そうし

てまで大田恵一を手にしたいのか。大物女優といえど、一人の女。良質な男性を前にし、

金に物を言わせてもと欲を見せた。そうか、なら乗ってやろう。お前の望むようにこの

体を動かしてやる。ただ、残念なことに心は動きはしないが。

「どうかしら。悪い条件とは言わせないわ」

女はすでに男を手にしたつもりでいる。悩んでいる男に対し、人の子ならば金に目が

眩むのは当然のことと上に立って見下ろしている。本当は見下ろされているのは自分と

いうことに気づきもせずに。男を手で転がしていると思ってる時点で、女はもう男の手で転がされている。

「分かりました。受けさせていただきます」
ただ、と付け足す。

「条件の良し悪しで決めたくわけじゃありません。全く判断基準に

してないかとしたら

違いますけど。それよりも、そこまでしてくださる久留米さんの気持ちに応えたいと思

ったから受ける事にしました。そこは分かってください」

「ええ、そうでしょうね。あなたは他の人間とは違うもの」

そうは言いつつ、女は男の言葉の八割は嘘だと思った。所詮は金を積みば人の心など

動かせる、というのが本心だ。女自身、今自分がしている事の遣り方は分かっている。

汚い方法だとも思う。だが、それ以上に目の前にいる男が欲しかった。未来の事は未来

に考えればいい。今はただ男との未来の選択権を手にしなければならぬ。そのために

手荒な方法で躍起になってしまった。まあ、結果が着いてきたのだから良ししよう。

この男は自分の手元に来る、それでいい。

男は翌日に会社へ退職願を提出した。上司には驚かれ、引き止められた。若い世代は

重宝すべき存在だし、男のルックスも単純に客の受けがいい。勤労に問題はなかったし、

人間関係も同じだ。実家の親が病気がちになったので上京させて面倒みる事にしたから

もつと短時間の勤務のドライバーの仕事に就く事にした、と言うと上司も渋々納得した。

退職日を相談すると、今月末までという事で落ち着く。あと三週間、この古い廃れた仕事で我慢すればいい。

もう一つ、我慢すべき事があった。何やら、大田恵一への乗車の予約が増えている。

個人的な指名が来る事は水商売じゃあるまいし、普通は無い。なのに、日に一件か二件の指名が会社の電話に届いてくる。それも、若い声ばかり。同僚はどうしたもんかと頭を巡らせていたが、男にはその理由は分かっている。それを話すのは面倒くさいので、同僚には適当な嘘を付いてはぐらかしておいた。

「ホントだ。超格好いいじゃん」

この日は女子高生二人からの予約が入った。指定の場所へ迎えに行くと、後部座席に座るなりノリのいい声が響く。目的地は予想の通りに最寄り駅。予約する者のほとんどが数区間ほどの近場を口にする。それはそうだ、彼ら彼女らはタクシー移動に興味がないのだから。興味の先は運転席にいる男。その顔を拝むがためにわざわざ歩いてもいい距離にお金を費やしている。

短い乗車時間を無駄にしないとばかりに、女子高生からいろいろな質問を投げられる。

彼女の有無、女の遍歴、通ってる美容院、使ってる化粧品、といったどうでもいい質問をインタビュアー記者のように攻めてくる。仕事用の笑顔を保ち、満更でもない感じを出

しておくが腹底は煮えていた。連日、同じような質問に同じような答えをする虚無感。

こついうミーハーな人間がいるから嫌気を差し、そいつらのおかげで人気者商売は成り立っている。困った循環だ。

女の子からの連絡が携帯に届いたのはそれから二週間ほど経った

頃だった。見覚えのない番号からの電話を受けると、若々しい弾けた声が聞こえる。女の子からの軽い説明があり、電話口の女の子の正体を知る事が出来た。片柳彩子、以前に大荷物を下げて乗車した有名モデルだ。

あの時はまだ可愛い女の子としか認識がなかったが、あの後に漫画喫茶で女の子の姿を目にした。本人の姿ではなく、雑誌に載ってる写真での姿を。書店やコンビニで立ち読みするには気兼ねがいる系統の本だったので、個室で誰に見られる事もない場所を選んだ。表紙にいる三人の女の子の中にいる。他の二人は知らない。中のページを捲って

いくと、多くの特集コーナーにその姿はあった。季節を先取りした洋服の他、制服を着

ていたり、水着を着ているものもある。どれもモデルっぽいポーズを決め、清く明るい

笑顔を振り撒いている様は先日の姿と違いも感じられた。かなり距離の近かった関係が

碎かれる。雑誌での女の子は紛れもなく有名モデルだった。そうだが、元々こんな運転手

にあれだけ好意的になっていたのは救いの手を差し伸べたという事だけなんだ。

そう思っていただけに、女の子からの連絡は意外だった。確かに名刺は渡したが、こんな折り返しがあるとは思っていなかった。どういう意図で名刺を欲したのかは知らないが、あの関係はあの場限りのものだろうと決めた男の想像を良い意味で裏切った。

女の子からの指定場所は東京駅だった。地方口ケから戻ってくるから送迎して欲しい、

という予約だ。夜も二十三時を過ぎた東京駅から吐き出されてくる人々は大体が負に覆

われている。午前中にそこに飲み込まれていく人々とはエネルギーが違う。夢を持ち上

京してきた若者と夢に破れ帰郷していく若者の差を見るような感覚だ。肩が落ち、背中

が丸まり、夢を失ったように俯く人間の連続。流れを生み出す者ではなく、流れに飲ま

れていく者の連続。自分は今どっちにいるだろうか。後者寄りだろうか。それでも、た

だそこに留まっている奴らとは一緒じゃない。もうすぐ、前者になる事になる。これま

で見くびってきた奴らへの報復だ。

その時、助手席の窓を小突く音がした。顔を向けると、男の方へ手を振りながらアピ

ールをする女性がいる。片柳彩子、もう一人は前回の時にもいた二十歳代後半の女性だ。

女の子からの予約の電話でマネージャーも一緒にいるからと言われていたので、女性は

女の子のマネージャーなのだろう。目的地は四谷、女性の自宅へ車を出す。後部座席に

いる二人の話し声は翌日のスケジュールの確認に聞こえた。

「ねえ、運転手さん」

後ろからの会話が途切れると、女の子はこちらに話し掛けてくる。あの夜中の駅から

出てくる弱い人間たちには重ならない快活な調子だ。若さとは万薬に勝る栄養源なのだろう。

「この前のブログ、もしかして迷惑かけちゃったかな」

言葉の意味はすぐに分かった。前回乗車した際、押し切られて後ろ姿の写真と経緯の

文を女の子のブログに掲載する事を許可した。その日の夜、女の子のブログには男との

一連の出来事を書いたものがアップされており、男もそれを漫画喫茶のパソコンで確認

している。男が大荷物での移動に困っていた女の子と女性を予約車であるのに乗せた事

への感謝の文章があり、写真には男の容姿を褒める一文が加えられていた。それを見た

女の子のファンである若者たちがここ最近の妙に男を指名する乗車予約を続けてるのだろう。

「ああ、最近なんか僕を指名してくれるお客さんが多いのはあれのおかげですか」

今初めて気づいたようにする。本当はうんざりしているが、この場のために満更でもない雰囲気を作っておく。

「ごめんなさい。分かんないようにしたはずなんですけど、どっかしらから運転手さんの

情報を手に入れた人がいたみたいで。私のところに来たファンレターで運転手さんのタクシーに乗ったって書いてあって」

女の子は小さめに頭を下げる。健気な印象を受けた。確かにブログから男の事が割れたのだが、女の子の文章からそれを特定するのは無理なはずだ。今のネット精通者から

すれば、あんな気にもかからないような後ろ姿の写真からでも本人を割り出す事が可能

なのだろう。便利が過ぎる分、その隣合わせにこういった現実もある。

「いえ、いいんですよ。こんなのすぐに治まるに決まっていますから。それに、なんか

僕も人気者気分を束の間でも味わえたんで」

そう男が笑うと、女の子も続けて笑った。邪気の無い笑顔は淀んだ男には眩しく思え

てしまう。そんなもの、とうの昔に置いてきてしまった。いつ、どこに捨ててきたのかは痛いほど憶えている。

それからは女の子からの土産話が続いた。今日は福井県の田舎町に行つて、ドラマの

撮影をしていたらしい。演技をしてるのは知らなかったが、ちよくちよく脇役で映画や

連続ドラマにも出演しているそうだ。キャラクターから、呼ばれる作品はコメディだけ

なのが少し不満と愚痴る。

「いいじゃないですか。コメディ、楽しそうで」

「楽しいは楽しいんですけど、もつと感動系にも出たいんですよねえ」

「気持ち分かりますけど、そうやってオファーを貰える事って有りがたいと思います

すよ。あなたにはコメディの素質があるから求められてるんであつて、そうやって求め

られるのって凄い事なんですから。あなたには人を笑顔にさせる素質があるって事なん

ですよ。人を笑わせるのって難しいし」

ああ、と女の子は男の言葉に理解を示す。

「良いこと言いますね、運転手さん」

「いや、大した事は言つてませんよ」

「きつと、運転手さんみたいな人が感動系に出た方がいいんですよね」

「そうじゃないですよ。人にはそれぞれ得意分野があるわけですから。そこを伸ばしていった方が個性に繋がりますよ。個性はその人を光らせてくれますから、どんどんやっ
ていくべきです」

女の子は納得し、何度か頷いていた。女性も男の言葉に同調するようにし、女の子を諭していく。

車は目的地の四谷のマンションに到着した。女性は女の子に明日の集合時間を確認し、
よろしく願いますと男に一言添える。女の子の事を、という意味で。男もはいと会

釈をすると、マンションの中へと入っていった。

次の目的地は青山、女の子の自宅へと車を出す。そこからは女の子の一方的な質問攻めが続く。タクシードライバーの仕事に関する話題から入り、普段の男の車事情、趣味、生活、思考、と滑らかに深みへと潜っていく。会話自体が得意なのか、事前に話す内容を決めていたのか、司会のように話を入れ替える。

「どういう女の子が好きなの」

この質問に至ったときには女の子の顔は緩んでいた。会話を決めてきたのなら、おそ

らく最終的にここに行き着きたかったのだろう。姿勢も次第に前に傾いてきて、存在を主張してきている。こういう時、頭には二択が並ぶ。すぐ後ろにいる質問者をなぞった

ような言葉にするか、全く正反対にするか。あなたのように元気で

可愛らしい年下の子、

と言ったらどうなるか。あなたとは違う落ち着いていて清楚な年上の女性、と言ったら

どうなるか。試してみたくなるが、ここは無難にしておく。

「そういうの、特に無いんですよ」

「ええっ。嘘だよ、そんなの」

「だって、誰にだって良いところもあれば悪いところもあるんだから。僕はその人の良いところが好きです」

「ふうん。なんか、優等生な発言」

不満だったらしい。あなたのように元気で可愛らしい年下の子、と言って欲しかったんだろうか。

「じゃあ、彼女はいるの」

女の子の質問に、また男の頭には二択が並ぶ。いる、と言ったらどうなるか。いない、

と言ったらどうなるか。鎌を掛けてみたくなる。

「いません。残念なことに」

嘘はついていない。世間的に見るなら光村沙耶がそうなるのだろうが、あいにく男は

一度も彼女という概念で捉えた事はない。依存症な甘え女、というぐらいにしか。利用

に値する女は自分へ近づけていく。そして、女は蜜の香りに誘われるように寄ってくる。

罪悪感なんてない。勝手に嵌ってくる奴が馬鹿なだけだ。男の本意も読み取れないのに
ふらふら来る方が悪い。

「彼女、作らないの」

「作ろうと思って作れるなら万々歳ですよ。そんなに巧みにいく人なんて、よっぽど

の遊び人とかでしょう」

「運転手さん、モテそうなのに」

「全然。そういうの、器用じゃないんです」

へえ、と女の子は軽く頷く。何か別の事でも考えてそんな感じだ。織り交ぜた不器用

さが効果を為してるのだろうか。そういった男性が好きな女は多い。誘い巧みな遊び人

が好きな女なんて少数派だろう。

「ねえ、また運転手さんのタクシーを予約してもいいかな」

「どうしてですか」

意地悪を吹っ掛ける。女の子は返答を急ぎで用意していく。可能性の高さを計るには充分だった。

「運転手さんとお話してるの面白いから」

「僕の何が面白いんですか。僕ほどつまらない人間もそういないと思いますよ」

「そんなことない。楽しいですよ、すっごく」

「すいません。なんか気を遣わせちゃってるみたいで」

女の子はかぶりを振る。その意味は分かりもするし、分からなくもある。男は特にと

いて質の高い話などしていない。それなのに面白いと言うことが分からない。女の子

はただ単に男と話している事が楽しいのだろう。この時間をまた予約したい、そういうことだ。

男は一つ息をつく。女の子はそれに反応し、顔を向ける。

「残念ですが、その予約を受けれるかは分かりません」

女の子は何も言わない。疑問の表情だけを浮かべている。

「実は今の仕事を辞めるんです」

女の子の目が開く。疑問の表情はそのままにある。男の言葉の意

味が理解できない。

「何で」

「実家の親が病気がちになって、上京させて面倒みる事にしたんです。だから、今の

より短時間の勤務のドライバーの仕事に就く事にしました」

そう言つと、女の子は伏し目になった。言葉の意味は分かったし、それは納得せざる

をえない内容だ。ただ、体の中で複雑になっているものは簡単には解けない。

「何の仕事をするんですか」

「個人の運転手です。その方の送迎だけをすればいいので、時間的にはとても余裕が

出来ます。タクシーのお客さんで知り合った方なんですけど、その方が良い人で今に近

い給料や次の住まいまで用意してくれてるんです。そういう話に甘えるのはどうかと

思つたんですけど、折角のご好意なんで受けさせてもらうことにしました」

へえ、と女の子は呟く。空の返事だった。体だけをここに置き、

中身は別のところに行つてしまっている。

空気が淀んだ頃合を見ていたように目的地に到着した。代金を受け取ると、押し引きに構える。相手の出方次第で押すか引くかは決まる。願わくば、引く側になる方が好ましい。

女の子がバックを手取る。そのまま行くのか、それとも止まるのか。バックの中を物色すると、手帳とペンを取り出した。手帳にすらすらと書いたのを破り、その切れ端

を男に差し出す。

「これは」

紙に書かれているのは英字が一行と数字が一行。それが何であるかは百も承知だが、一応訊いておく。

「私の携帯のメアドと番号。朝、予約する時に使ったのはマネージャーの携帯なの。」

予約したいって言ったら、じゃあ私ので掛けなさいって。私の番号が通知されちゃうのが嫌だったんだと思う。かといって、非通知で掛けるのも失礼な気がしたからそうした。こっちが本物だから」

「どうして、これを僕に」

また意地悪を試してみた。相手から押してきた時点で、上手にいるのはこっちだ。優位に駆け引きをさせてもらう。

女の子は何も言っていない。何か言おうとしているが、的確な言葉が上つてこないよ

うだ。真実はすぐにでも口に出すことができるけど、それはしない。口には出来ない真

実だから。なら、巧みに嘘でも付いてしまえばいいのにそれもしない。嘘を付くことが

苦手なんだろう。言いたいことはあるのに、喉元で塞いでしまう。

何も言えずに、ただ

男の方を困った顔で見ることしかできない。その弱った表情が潤んだ目をした子犬みたいで可愛かった。

「分かった。これ以上は聞かないよ」

紙切れを受け取ると、スーツのポケットに入れる。女の子はじゃあとだけ言い、自宅

のあるマンションへ入っていった。光村沙耶のところほどではないが、十歳代が住むには洒落た建物だ。男は現実に溜め息をつき、車を走らせた。

一週間後、男は会社を退職した。野望を現実に繋げるためには良い職場だったと思う。おかげで、抜け口をいくつか見つけられた。御役御免だ。ここから怒涛の成り上がりをを見せてやる。俺を蔑んできた奴らを下に見てやるのさ。この三十年のじゃあなかった。その分、これからは充実した人生を送るんだ。逆襲、二度目の逆襲の始まりだ。

その日は時間の空いている同僚が送別会を開いてくれた。同僚といっても、ほとんどは生命力の乏しい白い髪の男性ばかりだ。十人ほどが居酒屋でテーブルを囲み、男のこれまでの思い出話を語っていく。そのどれもが男にはどうでもいい話だった。こんな枯れた人間たちに気を遣うのも今日で終わりだ。おそらく、あなたが死ぬまで会うことはないだろう。

お開きになったのは二十二時過ぎ。同じ寮住まいの数人と帰宅すると、男はすぐに外に出直す。数メートル先の電信柱に凭れていた人間に視線を据える。帰宅途中に後方からの視線には気づいていた。これまでに何度と背中に感じてきた鈍い感覚。睨むような鋭い目が印象的な短髪の男性は定期的に男の近くに現れる。特別に何かをするわけでも

なく、大体はこれぐらいの距離からただ男の事をただ眺めている。

あの目の場合、眺められるが睨まれるように感じる。一言か二言、男に言葉を言い置く時もある。その時も

二人の関係を埋めるような核心を突く言葉はない。注意を促すような言葉が多い。男の

近くに来る事も、その動向を見張っているように見える。この男がまた何かを仕出かすのでは、という気負いから。

男は歩を止めない。別段、男性の存在を気に留める素振りは見せない。通行人の一人、その程度の把握しか外側には表さない。無論、内心は煮えるような感情を湧かせている。

殺意にさえ届きそうな怒気を内側で押さえ込めている。

「会社、辞めたんだってな」

擦れ違いざま、世間話のような語調で男性は零す。男は何も言わず、男性に背を向け

たまま足を止めている。

「何を考えてるかは知らないが、余計な事はしない方が身のためだぞ」

男性も振り向きもせず、男に背を向けたままで零す。男は再び歩き出す。男性はそれ

を追ってはこない。存在の確認、注意の喚起、男性が男にするのは大抵それぐらいだ。

深い交わりはしてこない。それをあえて避けているのかは分からない。ただ言える事は、

男性は男を怪しんでいる。男の過去を。

その4（前書き）

登場人物

大田恵一・おおたけいいち（タクシードライバー、野望を携えて生きる野心家）

片柳彩子・かたやなぎあやこ（モデル、今どきの十代で分かりやすい性格）

久留米雀・くるめすずめ（女優、誰もが一目置く大物）

野木晃彦・のぎあきひこ（大田の学生時代の同級生、既婚で子供もいる世帯主）

柴村忍・しばむらしのぶ（週刊誌記者、久留米の連載を担当している）

亀谷右京・かめやうきょう（刑事、大田と過去に接してから後を追いつけている）

光村沙耶・みつむらさや（キャバクラ嬢、名の知れた有名店でナンバーツーを誇る）

その4

翌日と翌々日の二日間は新しい仕事の休日になっていた。引越しと仕事変わりのリフレッシュとして、久留米雀からの配慮を受けた。男は一日目を引越

し、二日目を休みに充てる。本当は荷造りもあつたし、まず心身を休ませたい思いがあ

つたが、取り合えずあのむさ苦しい寮を早く飛び出したかった。辞めるのであれば、あ

んなところに長くない。環境を変え、そこで新しい空気を吸って体を浄化させ

たい。なので、少々時間に無理をして荷造りを終わらせて引越しをした。ある程度の家

具なら揃っていると聞いていたので、荷物は少なく済ませられたのは幸いだった。余つ

た家具は、故郷から親が持つて来るからと言って同僚に進呈しておいた。

寮の一室から荷物が運び出されると、軽い満足感が生じる。何も

ない空の部屋、ここにいた今までの自分は消去する。ここから、また新たな毎日が始ま

る。これまでのような敗北の日々じゃない、勝利へ向かう日々だ。長年願っていた未

来が実現していく。階段を上っていくんだ。

新たな住居は品川にあった。マンションの賃貸ではあるが、家賃は男の月給を飲んで

しまえる。四LDK、二階には室外のバルコニーも設けられている。

一つ一つの部屋も

大きく、家主の物と思われる絵画や骨董品も並んでいた。基本のテイストは和風にして

あり、それは久留米雀の趣味だろう。模様替えについては何も言われてないので、手を

出すつもりはない。意見する気もないし、特にこだわりもない。インテリアはあくまで

飾り、この自適な空間さえあれば文句などない。

男は充足感に満ちていく。照明の明るさ、家具の大きさ、ベッドの柔らかさ、部屋の

広さ、全てが格段にレベルアップしている。これは自分の所有物でない、それは分かつ

ている。でも、この空間にいるのは紛れもなく自分自身。たとえ籠の中の動物だったと

しても、質の向上は確かだ。錆びれたサラリーマンの生活と一流の人間に育てられてる

ペットの生活、どっちが質が上かということだ。前者から後者への変化、それは大きな

違いのはずだ。ここからまた上昇していく、その一步を踏んだんだ。男は埋もれてしまいそうに柔らかなソファに身を預けると、声を

出して笑った。今、

自分は二度目の復讐を始めたんだ。一度目は相手の肉体を傷つける復讐、二度目は自ら

の精神を満たす復讐。もう誰にも止めさせはしない。

二日目の朝、目を覚ますと前に女が眠っていた。よく見る寝顔だ。人生で一番目にし

ている女性の寝顔かもしれない。別に、飽きてはいない。愛らしいものであると思う。

だが、心までは動かされない。魅力は当然ある。ただ単に、男に女

への愛情が足りないからだ。

新居を精神的に満喫した後、夜のうちに渋谷に移動した。女の住む高級マンションに入ると、さっきまでの部屋よりもさらにランクが上の部屋が広がっていた。まあ、仕方がない。女は自分の力でこの部屋を勝ち取ったのだから。男と違い、表札名も権利も家賃を納めるのも全て女自身。だから、認めざるをえない。そこにいない嫉妬はない。

この日は女も休日だったため、珍しく長い時間が取れた。大概是男が休日にこの部屋を訪れ、女が早朝に帰宅してから夕方に出掛けるまでの時間になる。それも、セックスをして残りは眠るぐらいの淡泊な過ごし方が大体だ。二人の休日が重なれば外に出掛ける事もあるが、月に一度か二度あたりだろう。女は夕食を用意して待っていた。オムレツ

に白米に味噌汁と小物が数品、家庭的なメニューは意外だった。それを意図して作った

のかもしれないが。味を褒めると、女は素直に喜んでいた。その後、風呂に二人で入り、ベッドで体を繋げる。女は股を広げ、快楽に包まれていた。

男が起きると、拍子に女も目覚めた。時間は六時前。男はそくさと起き上がるが、

女はまだ寝足りない。男は顔を洗い、コーヒーを飲む。女はまだベッドで眠気と戦って

いる。男がコーヒーを持って行って渡すと、ありがとうと笑みを見せた。化粧もしてい

ない寝起きの顔はキャバクラで働く時の顔より劣るが、それでもそ

これらの女性に比べれ

ば明らかに勝っている。女はコーヒーを飲み、緩やかに息をつく。

「ねえ、今日休みならゆつくりしてつてくれるよね」

女には昨夜のうちに転職の旨を報告した。久留米雀の運転手というところは隠して。

タクシীর乗客として接した企業の社長に気に入られ、ちょうど運転手が退職するから

やって欲しいと言われ、悩んだが住まいも退職する人のところを使つていいと言われた

ので承諾した、と。驚いていたが、男が落ち着いて話を進めていったので女も納得して

いく。相談してくれればいいのと言われたが、急な話だったからとはぐらかしておく。

女に同調を求めるのに大きな意味はない。

「悪い。今日は行くところがある」

「えっ。どこ」

「大阪。気分転換でもしてくる」

「ええっ、いいなあ。私も行きたい」

言葉だけの縋りなのは分かった。女は仕事で夕方には出勤しなければならぬ。土産

でも買ってくるから、と適当に宥めると女も了承する。

正午過ぎ、男は徳島にいた。新幹線と電車を乗り継ぎ、約六時間をかけて到着した。

無論、大阪に行くなんて嘘っぱちだ。大阪土産なんて、後でどうにでもなる。記念写真

も撮らない主義だから言い伏せるのは簡単だ。

男は女に出身地を偽っている。女だけではなく、周囲にいる少年期の自分を知らない

全員に。男の出身は岡山という事にしてある。実際に住んでいた事

もあるので、その場

しのぎの虚言ならいくらでも吐ける。

徳島の出身である事は知られたくはない。あの忌まわしい過去はこの胸にだけあれば

いい。ただでさえ深い傷なのだから、これ以上に広げる必要はない。今のままでいい。

安らかに復讐をさせてくれ。

駅の改札を抜け、五分ほどで予約したタクシーが来た。駅のホームに降りた時に携帯

で連絡を入れたので、時間は掛からなかった。正午ぐらいに着くと事前に伝えてあり、

車も乗客がいなかったのでスムーズにいったようだ。

「久しぶりだな」

「ああ、久しぶり」

後部座席に乗り込むと、久々の再会には調子の低い挨拶を交わす。

運転手の札には、

野木晃彦と書かれている。

「いつもの通りに回ってくれ」

「ああ」

通常通りにやり取りをすると、車は走り出す。男は窓外を眺める。ここを離れてから

二年から三年ごとに訪れるが、その度に街並みは変わっていく。古いものが新しくなっ

ていく。悪くないことだろうが、思うところはある。ここ古さは嫌な古さではない。

見えて不快になるものではなく、むしろ逆だ。それが無くなっていくのは喜ばしいと

手を叩けるだけではない。

「あそここの角の店、潰れたのか」

「ああ、薬局か。潰れちゃったよ。三ヶ月ぐらい前だったかな。」

今度は電気屋になる

らしい」

薬局は男がこの街に住んでる頃からあった。よく母親の薬を買いに行ったのを覚えて
いる。店をやっていた老夫婦は良い人間だった。当時の商店街はいくらか活気もあつた
ので、商人の威勢はよかった。その人情の店が潰れ、気鋭な店が並んでいく。進化なの
だろうか、後退なのだろうか。

「今度、図書館も移動になるらしい。新しく出来る駅近くの建物に入るみたいだ」

男の返答はない。無愛想ともいえるが、それで成立する関係性なのだ。

窓外には不思議な景色が流れる。建物が流れ、人が流れる。商店街を越え、川を越えていく。ここに住んでいた頃にあった景色となかった景色が混ざり合い、思い出を打ち消していく。

「最近はどうなんだ」

近況を問う意味で聞く。瞳に映る景色のように流れで聞いたわけではない。この場所
に戻ってくるたびに必ずする事だ。一つは思い出の地を巡る事、もう一つは男性の近況
を訊ねる事。

「これといって変わりはないよ。奥さんが二人目を妊娠したくらい」

おめでとう、ありがとう、と乾いた会話が続く。男性は結婚している。相手は県内の
大学に通ってる時に知り合った女性。男は顔も見たことはない。特に興味もないので、

写真を見せてもらうこともしない。結婚式にも当然出ていないし、結婚した事自体が事後報告だった。子供は女の子が一昨年に産まれている。前回ここに戻ってきたのが産まれて間もない頃で、親バカ話を長く聞かされたのを憶えてる。だが、興味はないから写真も見えていない。

時の流れは早くもあり遅くもある。タクシードライバーの仕事をしていると、勤務時間の長さに一日を過ごす事の長さを重ねられる。ただ、あの時の世間の何も知らない子供時代の仲間が結婚して子供を持っている現実には逆も感じずにはいられない。

車は一つ目の目的地に到着した。男と男性が二十年前に通っていた小学校。平日だったので、校庭には体育をしている小学生がいた。キックベースをしているように見える。男は車から降りずに小学校を眺めていた。懐かしむわけでもなく、郷愁に駆られるわけでもなく、単なる確認。自らの過去の点在する記憶の確認として。小学校は男が通っていた当時から大きな変化は見られなかった。もつと中に入っ

ければ細かな変化はあるのだろうが、大まかにはあの頃と同じに見受けられる。ここには良い思い出はほとんどない。探すのにそれなりの時間は要する。デパートで迷子になっ

た子供が親を見つけ出す程度の難度は必要だ。

五分ほどが過ぎ、車は小学校から出発した。既に男と男性の間には会話は無い。二年から三年ぶりの再会といっても、話すような事は左程ない。そんな

に話すような日常がないわけじゃない。この関係性において、報告すべき事がないだけだ。ここ最近、男が仕事を変える事、著名人と知り合いになった事。普通の仲間内ならすぐにでも口にするような事なのだろうけど、この二人の間ではその必要性はない。話す要素のある事といえば、男がこの街にいた十歳頃までにここに存在した事だろう。それ以外について、興味はない。

二つ目の目的地は隠れ基地だった。小学校から一本道に続く先にある中学校の裏手に広がる田園を抜けていくと山とかるうじて称していいぐらいの場所がある。無論、地図上ではそこは山と認定されていない。地元の人々の間でそう称されているだけだ。山の外観が似ていることから林檎山と誰だかが名づけている。

男と男性は山を自らの意思で登った事はない。むしろ、近寄りたくはない。その山は強い虫たちの溜まり場だった。学校内の権力者、といっても小学生だからそこまで大層なものじゃないけれど、学校内で威張りをきかせる奴らが放課後にそこに集合する。男と男性はそういうタイプの影に怯えながら過ごしていた弱虫な子供だったので、山は牽制すべき場所だ。なのに、二人にはそこへ足を運ばなければならぬ理由が出来てしまった。

「次に行ってくれ」
男の声で車は走り出した。細道から左右に広がる田園を見ながら、

過去の傷をほじり

返していく。大きな溜め息が出た。その姿をバックミラーで確認すると、男性も心痛を

覚える。男性は男の傷を知っている。その深さが分かっている。だから、今でも男の帰

郷には行動を共にしている。

三つ目の目的地は一軒家だった。周囲にポツポツと点在する家々と変わりのない普通

の一軒家、男が二十年前まで住んでいた家だ。今は別の家族の住まいになっている。庭

には洗濯物を干されている。その量からして、三人ほどの家族だろう。窓は開いており、

縁側と和室が家の外からでも見られる。ただ、男が見ている間に人は通らなかった。昼

食でも摂ってるのだろうか。そういえば、そろそろ腹も減ってきた。走り出した車の中で、あの一軒家での母親との思い出を巡らせる。

楽しいものもあり、

苦しいものもあった。父親は男がまだ一歳の時に家を出ていった。

詳しい事までは聞け

なかったが、どうやら女絡みで離婚したらしい。父親の顔は見た事はない。母親を捨て

ていくような奴の顔なんて見たくはない。どうせ、この顔に似ているのだらう。なら、

それをわざわざ確認したくなかない。

昼食は男性任せにし、駅近くのラーメン屋に行った。次の目的地に行くのに駅を越え

るので、ちょうど通り道に店はあった。男は醤油味、男性はとんこつ味を食べる。美味

しいは美味しいが、特別な何かがあるわけじゃなかった。よくあるラーメン店のレベル、

それに収まる。男も同職のため、馴染みのあるレベルの味だ。

四つ目の目的地は吉野川だった。河川敷のキャンプ地まで歩き、そこからの景色に目

を細める。やがて目を瞑ると、頭に過去の自分を思い起こす。忘れられない記憶、起こ

さなくとも流動的に現れる滾る炎。内部からこの頭を焼き焦がすように苦しめていく。

多くの悲鳴が響く。多くの助けを乞う影が見える。多くの果てゆく影が見える。あの時、

絶対に後悔しない事を誓った。後悔なんてしたら、思いに潰されてしまう。間違ってい

ないんだ、そう胸に刻みつけた。

「もう、いいのか」

「ああ、駅に行ってくれ」

車は駅へ走り出す。男は車中で苛々を堪えていた。心持ちが定まらず、整理つかない
思いを反芻していく。

なあ、とたまらず男性が声を掛ける。

「これ、終わりには出来ないのかな」

「どういう意味だ」

「二十年も経つんだよ。なのに、まだそんなに苦しんでる大田くんを見てると、居た

堪れないんだ。東京で新しい暮らし始めてるのに、こうやってわざわざ帰って来て自分を苦しめるのは止めにしようよ」

おそらく、男性は男の姿を投影してるのだろう。男の痛みを共有するように自分にも

苦しみが届いてしまう。

「俺だっけ忘れてしまいたい。それが一番良いに決まってる。ただ、俺はこうする事

を選んだんだ。あの時の自分を忘れたくないんだ。だから、ここにも戻ってくる。これから変えるつもりはない。それについて、お前が責任を被る必要はない」

男性は釈然としない顔つきだった。男の言葉では迷いを解決できなかったのだろう。でも、それ以上に説くつもりはない。責任を負い続けるか逃れるか、それは勝手にしてくれればいい。

車が駅に到着すると、軽いやり取りをして男はタクシーを出た。離れたくても離れられない故郷の確認、男の誰にも話していない過去を唯一知っている仲間の確認。男性は男の裏の顔を見た事がある。それでも、誰一人にもそれを暴露したりはしない。奥さんや子供にも言いやしない。家族間に変な感情を持ち込みたくはないだろうし、なにより

男性にとって男は友であるから。

帰りの新幹線に乗ってる間、陽は傾いて消えていった。そして、夜になる。その暗み

が東京で新たな場所へ身を移す自分の心の闇に似ていると思った。

その5（前書き）

登場人物

大田恵一・おおたけいいち（タクシードライバー、野望を携えて生きる野心家）

片柳彩子・かたやなぎあやこ（モデル、今どきの十代で分かりやすい性格）

久留米雀・くるめすずめ（女優、誰もが一目置く大物）

野木晃彦・のぎあきひこ（大田の学生時代の同級生、既婚で子供もいる世帯主）

柴村忍・しばむらしのぶ（週刊誌記者、久留米の連載を担当している）

亀谷右京・かめやうきょう（刑事、大田と過去に接してから後を追いつけている）

光村沙耶・みつむらさや（キャバクラ嬢、名の知れた有名店でナンバーツーを誇る）

その5

翌日、起床は四時だった。六時入りの現場だが、久留米雀は三十分前には着いてたい
ということとで五時に迎えに行く事になり、初日なので余裕を見てこの時間にアラームを
設定しておいた。タクシードライバーの時はもう少し遅くまで寝れたが、これからは不
規則な時間になる事を実感する。体もうまく起ききれず、浮ついた感覚で身支度をして
家を出た。

マンションの地下駐車場から車を出すと、速度に乗せて軽快に走らせる。男に与えられた車はシルバーのベンツだった。以前の専用の移動車をそのまま受け取った形となつたため、車内はいろいろと中古感も滲んでいる。それでも、ベンツなんて初めての経験なので新鮮な気持ちにはなれた。なんというか、車本体の威勢の良さみたいなのがある気がする。走らせていて心地良い。

女の自宅に着いたのは指定の時間の十分前だった。女の住む一軒家は外観だけでその高貴さが窺える気品のよい佇まいだ。成城にこの家を建てるとは成功者の証といえるだろう。改めて、獲物の大きさを痛感する。現実には直面することで、衝動を確固とする事が出来た。

五時になつてから到着した旨を電話すると、女は三分ほどで姿を現す。ゆつたりとし

た貫禄のある動きでこちらに向かつてくる。男は外へと出て、女が車に来るのと同時に後部席の扉を開ける。

「そんなことしないでいいわよ。ドアぐらい自分で開けれるから」女はフツと笑みを見せる。勝手の分からない世界に戸惑う男に教育のしがいを見ただろうか。それなら、男の思うがままだ。まずは下手に出て、相手の様子を窺おう。

車は次の目的地へ走り出す。男は仕事や住まいを提供してもらった事の感謝を伝え、女はそれを大したことないというふうにする。その後はあまり話は繋がらない。朝一番

ということもあるが、これからは仕事上での関係になるのだから今までのようなお気楽な会話はいらないのだろう。思えば、これまでも女の仕事については触れてこなかった。

それはあくまで芸能人と一般人という関係だったからであり、今日からは男も女のスタッフの一員となる。だからこそ、今まで以上の配慮が伴う必要がある。こちらから無闇

に話を振るのは好ましくない。

十五分ほどで車は着き、女性マネージャーを拾って再び出発する。その十五分後に、目的地のスタジオへ到着した。女と女性は車を降り、建物へと入っていく。姿が見えなくなる。男は息をついた。

女は今日はドラマの撮影らしい。どんなドラマかは知らないし、聞く事もしない。別

にミハーでもないし、女の方も仕事の話を聞いてもらいたそうなタイプではない。腕

時計を見る、まだ五時三十一分。終わりの時間は二十二時頃と聞いている。つまり、今

から十六時間半は空きになってしまふ。撮影の終わりが早まったり、急な呼びつけもある

ようだが、基本的には何をしていても構わないらしい。三日前までのタクシードライ

バーの仕事と比べると、なんともやりがいがない。だが、これで今まで以上の生活を用意してもらえるのだから甘えておくに限る。

結局、男は家に戻って寝直した。昼過ぎに起き、片付けの行き届いてない引越しの荷物に手をつけていく。買物に行き、夕食を作り、それを食べてから仕事に向かう。ほぼ予定通りに仕事を終えた女と女性を自宅へ送り届け、男も自宅に変える。ずいぶん待遇のいいアルバイトをしてるような感覚になった。

それからしばらくはおとなしい生活を続けた。久留米雀の送迎の仕事をし、合間の時間は適当に過ごす。丸一日の休業日こそ少なくなったが、自由に使える時間は圧倒的に増えた。とはいっても、大した趣味もない男にはそれほど有難味のあるものではない。

結果、家でだらだらと過ごす事が多かった。

久留米雀はとにかく落ち着いていた。男が仕事を始めるとともに動きを見せてくるの

かと思っていたが、それはなかった。車内でも必要以上の話はなかったし、態度も年齢

相応にどつしりと構えたものだった。それがまた厄介だった。外に表現してくれるならやりやすいが、内に込められるとやりにくい。彼女は男をどうしたいと思っているのか。

強引になら、働き口や住まいを提供した事を引き合いに迫る事だっ
て出来る。好感触を
持つてゐるに違いない。だから、男を引き抜いたんだ。男からのモーションを待つてゐるの

だろうか。だとしたら、相当に洞察力に優れた人間でなければ見抜
けはしない。いつか、
そう遠くないいつかに動きは見られるはずだ。

光村沙耶は今回の転職を喜んでいた。理由は、単純に自由時間が
多く取れるようにな

ったから。二人とも不規則な仕事をしていたため、会うのは朝方が
多く、一発やって寝

るという展開が大体だった。それが今はどの時間帯でも男側が合わ
せられる事が増え、

一緒にいる時間も多くなった。彼女の休日にはデートをしたり、普
通にカップルみたい
な過ごし方をしている。

片柳彩子とは全く会っていなかった。理由は、単純に会う名目が
ないから。メールは

日に一回のペースでやり取りを続けていたが、それ以上の行為に走
る事はしなかった。

彼女もそれはしなかったし、届くメールの内容も日々の仕事の内容
ぐらいだった。思い

を制御してるのかは文字だけでは判別しにくかったが、実際は男か
らの誘いを待つてゐる

ように受けられた。ただ、それはしない。ここも無理な進展はせず、
慎重に行くべきと

決めた。

亀谷右京の動向は不明に近かった。時々、後方からの視線を感じる事はあったけど、特に注目はしていない。彼は動いてはこない。元々離れた場所から男の現在を確認する程度の事しかしていないし、警戒しすぎる必要性はない。だが、このまま終わると思つてはいない。お互いが果てるまで、この関係が変わらないと思わない。何かがある、そう感じている。

そんな生活を続け、二ヶ月が過ぎた。ありきたりな言葉を使うのなら、平穏と呼べる日々だったと思う。大物女優の送迎をし、売れっ子キャバ嬢の恋人役を務め、残った暇な時間は気紛れに過ごす。そんな毎日だ。

五日前には転職後の初給料が振り込まれた。確かに、五十万円だった。仕事の内容と対比すると、逆の意味で割に合っていなかったが、好待遇をしてもらってる側がそれを目指する事はしない。良い生活だ、そう思った。

その日の夜、二十時過ぎに久留米雀とマネージャーを吉祥寺のカフェに迎えに行った。雑誌の取材を受けた終わりらしい。いつものように中古同然に使われているシルバーのベンツを走らせてると、女から食事に付き合おう言われた。それはおかしい流れではなく、これまでも何度かあった場面だった。仕事終わりに夕食、運転手だからと車に待たせておくのは忍びないので三人で、という建て前で。

女性のナビで向かったのは和食店だった。昔ながらの日本家屋という店の佇まいからして、その質の高さが窺える。通された和室は庭に通じていて、池には鹿威しが引かれてあった。画面を通してでしか目にしていなかった景色や料理に勝手が利かない。ただ、それ自体は男の演技にリァリティが付属されて良い方向へ転がってくれたが。

「今日はごちそうさまでした。いつもいつもありがとうございます」

食事が終わり、女性を送り届けた後、車は女の自宅に向かっていく。男は運転席の窓を小さく開けている。後部座席に座る女の実在感はかなりのもので、密閉された空間にいると多少の圧迫を受ける。緊張しているわけではないが、楽にいく相手でない事は承知している。

「いいのよ、これぐらい」

語調と言葉が重なっていた。話はそこで止まると思ったが、この日は女からの動きがあった。

「ねえ、あなたの部屋へ行っていないかしら」

言葉から汲み取れる展開は数個あり、どうしても誇張されたものが突出してくるが女の語調からそれはまだ感じられない。

「僕のところですか。何かあったんですか」

「ううん、そういうんじゃないわ。前に言っただけ、私は気分転換したい時にあそこに行くのよ。それで、今はちょうどそうだったっていう話。気が落ち着くのよ、あそこ」

に行く」と

「ああ、そうでしたね」

男は女の申し出を了承した。そういう考えだったのか、と同時に言葉の裏も読み取る

事ができた。勝負の時かもしれない、そう心持ちを構える。

マンションに到着すると、女とともに自宅へと戻った。部屋に入ると、そこには女の

見覚えのある光景が並んでいる。男がこの部屋に持って来た荷物は少なく、元々のイン

テリアの配置も変えていないので、部屋の印象に変化は見られない。

男はリビングのソファに座った女に紅茶を差し出す。紅茶はここに引っ越してきた時からキッチンの棚にあったので、女がここに来た時に飲むためのものだろうと分かっていた。

男は女の隣に座り、話を始める。内容は女の仕事について。仕事の中には聞かなかった

ところへと手を伸ばす。ここは仕事場じゃなく、プライベートな場。心を解放していい

場所だから、というふうに。男は女の話聞き、女の仕事への熱心ぶりを褒め、愚痴を

聞き入れ、気遣いの言葉を投げ掛ける。

女の心が傾きだしたのも把握できた。上辺の話ではなく、本心を語り出してきたのが

そのサインだろう。タイミングを見計らい、男は女の手を握った。

女は顔を向けてきた

が、男は続けてくださいと先を促す。女はそれに気を許した。酒が飲みたいと言い出し、

年代物のワインを開けて二人で飲んでいく。味なんてどうだっていい。今はこの目の前

の獲物を手中にする事だけに欲は向いている。

「今の待遇に満足してるかしら」

女の方から男の手のひらを摩ってくる。感触を確かめるようにゆっくりと丁寧に触れていく。

「してますよ。当たり前じゃないですか」

月給五十万円、それ以上の家賃の四LDKマンション、仕事時間は平均三時間ほど。

これだけの待遇に満足しない人間はいないだろう。だが、これだけ破格の待遇を用意されるということに意味があるのは察している。良い話には裏がある、とどこかで誰かが言っていた。

「あなたが望むのなら、もう少し上乗せしてあげてもいいわよ」
女の手が男の首元に伸びてくる。鎖骨に触れ、下の方へと降りてくる。この後にどうなるかぐらい、アホでも分かる。

「そんなことしてくれるんですか」

「いいのよ。ウチの会社は私で成り立ってるようなものなんだから。私のわがままは

通してくれる。だから、あなたの事も雇ってくれたわ」

「でも、さすがに今以上となると疑われますよ」

「もし、そうなら私のポケットマネーであげるわよ」

お金ならあるから、とでも言いたげな顔だった。女の瞳は開錠さ
れている。この後の

展開を頭の中に動かせている。なら、望むようにしてみせよう。今
から俺はただの玩具

になる。俺の意思は必要ない。全ては女の欲望に埋もれればいい。
その先に俺の欲望が

あるのなら何だってやってみせるさ。

女の手は男の胸の下あたりで止まっている。遠慮があるのか。そんなものはいらない。

男は女の唇を奪い、体を触っていく。唇は角度を変え、何度と吸いつける。触れていく体には老いが感じられるが、そんなことは漠然としか気には掛からない。俺は、俺は道具なんだ。そう言い聞かせ、倍以上も年齢の離れた女の体に手を掛けていく。表現の仕様のない笑顔を浮かべて。

ベッドへと移動し、行為は加速する。男は服を脱ぎ、女の服を脱がし、艶のない体を隅まで舐めまわす。カーテンは閉め、鏡は予め別の場所に移しておいた。この狂った己を目に映す事にならないように。確認さえしなければ、あとで深く思い出す事もない。

男は女の体で最後まで行為を成し遂げた。女は感度の高い声を上げ、どれぐらいぶりかという若い男性の体を味わった。行為が終わると、女は大きな疲労を見せ、男は現実
に自らを引き戻す。男は女を抱き寄せ、女はそのまま男の腕の中で眠りにつく。男は女を包みながら、後悔の念に駆られないように必死に逃避していた。

翌日、男が目を覚ました時には女はすでに起きていた。男が起きると、女は二人分の朝食を作り終えていた。恋人気分と錯覚したわけではない。女はいつものままの久留米
雀として、そこにいた。自分の所有する家のキッチンで料理を作っていただけ、普通のこととして片付けられる範囲にある。

朝食を食べている間も、仕事へ向かう間も昨夜の事は話題に上がらなかった。男から

話す事はしない。逃避は続けている。事実の認識はある。あくまで、逃避だ。忘却では

ない。呼び起こそうと思えば、いつでも戻せる。

女を自宅へと送ると、二十分ほどで着替えを終えて戻ってきた。

その後、女性マネー

ジャーも拾って現場へと送り届ける。男と女の間になんげな点はない。体の内側にはあ

れど、外側から見ると事はできない。全て二人の中に仕舞われた。車を降り、スタジオへ

去っていく女と女性の姿を見届けると男は呪縛から解き放たれたように全身の力が抜けていった。

何かに縋りたくなり、誰かに包まれたくなり、男は携帯を手にする。最初に光村沙耶

を考えたが、すぐに止めにした。情性で付き合ってる人間と抱き合ったところで、根本

は昨夜の行為と変わらない気がしたから。じゃあ、どこかで金で繋がる女性にするか。

その方が何も考えずに済むかもしれない。ただ、その前に一人の女の顔が頭に浮かんだ。

その女には包まれそうにない。それでも、記憶の中の女の笑顔に救われなくなり、男は

携帯のボタンを押した。

「ごめんなさい。終わりが伸びちゃって」

二十二時過ぎ、待ち合わせ場所の焼き肉店に片柳彩子は姿を見せた。慌てぎみな様子

から急いできたのが窺える。

「いや、俺も今来たばかりだから」

男も久留米雀とマネージャーを自宅へ送り届けた足で来たところだった。朝に女の子

に電話をすると、今日は雑誌の撮影があるから夜になら会えると言われた。二十一時に

終わる予定だから、と二十二時に待ち合わせ時間を整える。場所は個室のある店を選び、男が指定した。

「頼んじゃっていいですか。もう、お腹ペッコペコで」

女の子は席につくなり、メニューを広げる。すぐに店員を呼び、適当に注文をしていくとようやく息をついた。

「今日、にわか雨あったじゃないですか。午前中はロケに出てたんですけど、雨で中断しちゃって押しちゃいました」

すいませんと女の子が謝ると、君のせいじゃないからと男が宥める。

「でも、嬉しかったです。誘ってくれて」

そう言い、下を向いてはにかむ姿はなんとも可愛らしかった。転職して以来、女の子

には一度も会っていなかった。獲物として捉えたい気持ちは正直あったが、まだ社会に

さほど揉まれていない純粋な子を利用する事に戸惑いもあって。汚れなさすぎている。

泥臭く揉まれてきた女性との駆け引きにはなれていたが、逆にこういうタイプにはどう

接すればいいのか迷う。計画性がない分、規格外の事を起こされてしまう可能性がある

気もしたから。

それでも、今日は誘ってしまった。気が正常ではないのかもしれない。そうだったと

しても、この子の笑顔に癒やされたかった。老いた生真面目な女の体に壊された身を、

若い快活な女の子の体に包んでもらいたかった。

「よかった。俺なんかが誘ってもよかったのかな、って思ってた」
「全然。誘ってくれたりしないのかなあ、って実は待ってたんです」

「そうなんだ。それを聞いて安心した」

二人は擦れ違いを笑った。本当は、女の子が誘いを待ってるのを男は気づいていた。

それを知りながら、そこに触れないようにしていた。脈がある、という事を武器として携えたままにして。

「待ってたって言うてたけど、こっちが誘わなかったらどうしてたの」

「どうだろう・・・こっちから誘ってたかも」

「どういうふうに」

ええ、と女の子は深く考え込む。男との様々なシチュエーションを頭に浮かべ、最適なものを選びこむ。

「好きな食べ物とか聞いて、そっから誘ってもらえるように探り探りで」

「それ、結局こっちが誘うんじゃない」

また二人で笑った。女の子のその笑顔に心を撫でられるのが分かる。男にとっては他の

のどの薬よりも特効性のあるものに感じれた。

その後は焼き肉を食べながら、女の子の仕事について、男の仕事について、今どきの

若者について、昔の若者について、話を交わしていく。目の前の子は未成年で、自分は

三十歳の手前である事を刻ませながら。今はこの時間に身を寄せる

が、これは長く続くものではない。

勘定の約二万円は男が払い、女の子はごちそうさまですと頭を下げる。それは男には

少し複雑な状況だった。その金は久留米雀から貰ったものだ。今朝、男が出掛ける支度

をしていると、リビングのテーブルに十万円が新の状態で置かれていた。要は、久留米

雀を抱いた報酬ということだろう。男はその金の中から勘定を払った。正しくない金を

使ってしまった気持ち、残しておくべきという気持ち、それを使った気持ち、女の子

との食事に使ったという気持ち、様々な感情が入り乱れる。何が今の自分にとって正解

なのかは分からなかった。

車で女の子を青山の自宅まで送り届ける。御馳走になった感謝を告げて車を降りよう

とする女の子を不意に止めていた。男は女の子の手を握っていた。女の子は男を見たま

まで止まっている。

「どう………したんですか」

すいません、と男は手を離す。息をつく男に異変を感じ、女の子は逆に離れたばかりの男の手を取った。

「話してください、よかったら。私なんかじゃ、全然役に立たないけど」

女の子の澄んだ瞳に見られると、心が洗われていく気がした。そのまま、体の中にある汚物を吐き出してしまいたくなる。

「実は、正直なところ、母親の看病と仕事の両立に負担が掛かつ

てて。家では看病、

外では仕事、つてなると気の休まる場所がありません。家で療養してる母親に仕事の

愚痴は零せませんし、外であれだけお世話になつてゐる社長の前で看病の重荷を零したり

できません。捌け口に困つてしまつて、今日は君を誘つたんだ」

「ごめんと言うと、女の子はかぶりを振る。

「嬉しいですよ。そういう時、呼んでくれるのって」

女の子はフツと笑みを見せる。弱さを見せてくれる男に頼られてる感じが、あり、心を

くすぶられる。男の嘘には気づく由もないが、本物の弱さは女の子の感情を揺さぶる。

守つてあげたい、そう強く思つた。

男は助手席の女の子に身を寄り添わせ、その体を女の子は柔に抱きしめる。愛おしい

ものとして。

「ありがとう。君のおかげで救われた」

「いえ。私でよければ、いつでも話してきてください」

女の子の温かさに昨夜の記憶は浄化されていった。傷を宥められながら、男は素直に

心を委ねた。

その日から、非日常的な循環が続く事になった。久留米雀は週に

一度、男の家を訪れ

て行為は行われた。その都度、十万円から二十万円の札が男に与えられる。そこに愛情

に等しい感情がない事は女も分かっている。少しでも気持ちが傾いていれればと思う事は

あるが、甘い考えに目を眩ませないようにと引き締めてある。金銭と欲で繋がった関係、

それを自負しながら関係は続いていった。

そして、その翌日に男は片柳彩子を誘う。精神の損失を補うため、女の子との時間は最も効き目があった。若く甘く香る体に包まれると心地良く、幾らかでも悪夢を散らす事はできた。

女の子の都合が合わない時には光村沙耶のところへ行く。早朝には家に戻ってるので、久留米雀を仕事場へ送り届けてから行く頃には女は眠りについていゝる事が大体だ。それでも、女を起こして行為に走る。数時間前に別の女に入れた性器を入れ、何も知らない女は快楽に誘われる。

客観的に眺めれば、自らの行動の変質さに痛くなる。だから、それはなるべくしないように心掛けた。俺は金のためなら何だってする亡者なんだ、と主観的に捉えては納得させていく。

金だ、金をくれ。金がこの腐つてく心を豊かにさせてくれるんだ。地位や権力なんて、どうだっていい。あるならあるでいいし、無いなら無いで構わない。あつても困りはしないし、無くても困らない。だって、それを持つてゐる人間たちがどれほど優れた人格だというんだ。見た目は平凡、着る物や身に付ける物ばかりに金をかけ、やってゐる事自体は大した事じゃない。同じ位置にいれば、他の人間にも出来るような事ぐらいしかやつちやいない。それなのに、そいつらは先生やら社長やら崇められる立場にある。それに

目が眩み、自らがだんだんと貶められていく事にも気づかずに衰退の一步を辿るだけではない。能ある鷹は爪を隠す、前面に出て目立つばかりの奴には一定の能力しかありはしない。俺はそんな人形に成り下がるつもりはない。この手で望む未来を勝ち取ってやるんだ。今、俺より高い位置にいる奴らは俺に平伏す準備でもしながら笑って待ってろよ。

その6（前書き）

登場人物

大田恵一・おおたけいいち（タクシードライバー、野望を携えて生きる野心家）

片柳彩子・かたやなぎあやこ（モデル、今どきの十代で分かりやすい性格）

久留米雀・くるめすずめ（女優、誰もが一目置く大物）

野木晃彦・のぎあきひこ（大田の学生時代の同級生、既婚で子供もいる世帯主）

柴村忍・しばむらしのぶ（週刊誌記者、久留米の連載を担当している）

亀谷右京・かめやうきょう（刑事、大田と過去に接してから後を追いつけている）

光村沙耶・みつむらさや（キャバクラ嬢、名の知れた有名店でナンバーツーを誇る）

その6

久留米雀との夜を重ねるたび、男は感情が薄くなっていくのを感じた。元々少ない情をさらに絞り取られ、不自然な人間を再構築していく。外見にはバシないようにしたが、身体の内側は病み始めていた。自分の中にある悪の部分が牙を剥き、正の部分を脅かすような不安が流れてくる。このまま、俺は獣と化していくんじゃないか。そんな考えも頭を過ぎていった。

女には、今の自分がどう映っているのだろうか。愛玩の男性、そんなふうにも捉えられてるのだろうか。おそらく、それはないだろう。女はそういったタイプではない。もう還暦を超えた女性だ。愛欲に溺れるような事はしないだろう。実際、普段の女の男に対する接し方にも全く変化は見られない。出会った頃の、冷静で知的な女性の印象のままだ。

女は自分次第でどうしても男を操れる。強制的に縛りつけた都合のいい玩具、とでも言ったところか。切ろうと思えば、女はいつでもこの関係を切れる。ただ、男はそれは困る。愛はない、それを互いも知っている。強くもなく厚くもない線を男は自力で繋ぎ留めなければならぬ。女の引つ張る首輪を外さないよう、ギリギ

リのところで戦いを
続けなければならない。なにも、毎回の十万円から二十万円の報酬
が欲しいだけで心を
投げてるわけじゃない。そんなレベルの金が欲しいのなら、タクシ
ードライバーの仕事
を続けていればいい。男の狙いはもっと大きなものだ。これだけ苦
しんででも手に入れ
たいもの。

「ちよつと仕事の話をしてもいいかしら」

女の仕事終わりの車中、いつもと変わらぬ重みのある声。女性マ
ネージャーはすでに
送り届け、車には二人しかない。

「はい、何でしょう」

男の声にも変わりはない。二人きりになったからといって、急に
対応が変化すること
はない。男がこの仕事に転職してから四ヶ月が経とうとしているが、
根本的な関係の変
化はなかった。

「実はね、あなたにマネージャーになってもらいたいと思ってる
の」

「マネージャー、ですか」

「ええ。最近、現場もいろいろ見てきてるから、そろそろかなと
思つて。あなたには
演者側になつてもらえればと最初は思つてたけど、どうやら気は向
かないみたいだから
マネージャーに思つて」

確かに、女と関係を持ち出した頃から、転職当初に言っていたよ
うに女の仕事現場へ
連れていかれる事が増えた。都合の合う日だけでいいと言われたが、
男には取り留めて

やらなければならない都合などないので毎日に近いペースで足を運んだ。

女の仕事場は、大きく女優とコメンテーターに分かれる。それ以外の、バラエティや

旅番組などにはほとんど係わりはない。女優の仕事は時代劇と二時間ドラマが多く、稀

に連続ドラマにも出ているらしい。コメンテーターの仕事は朝の生放送が一本、収録の

情報番組が一本ある。基本は女優の仕事が占めているため、スケジュールは不規則な事

が当然となっている。仕事で埋まってる週もあれば、ぽっかりと空白の週もある。朝早く

から夜中までの日もあれば、昼過ぎには終わる日もある。

女の仕事態度は健全そのものだった。周囲への気配りは忘れないため、信望も厚い。

あれだけキャリアを積んでいる大物が気を遣えば、女を見る目も変わるだろう。しかし、

時には厳しい意見も言う。女優の現場では自らの演技論を作品と照らし合わせ、それを

信念として突き進む。コメンテーターの現場でも、社会の矛盾に対しては鋭く切れ込んでいく。近くでその様子を見ると、女がこの入れ替わりの激しい世界で生き残っている理由が分かる。

「マネージャーっていつでも、僕にそんな大役が務まるんでしょか」

「大丈夫よ、心配しなくても。新人の役者じゃないんだから、売り込みなんてしないでいいんだし。私の仕事の管理と、あとは挨拶だけちゃんとやっておいてくれればいい」

のよ」

マネージャーという選択は予想外だった。演者側になるつもりは元よりなかったが、

その選択肢は可能性の外れにしかないものだった。

「でも、菊月さんはどうするんですか」

菊月はさっきまでこの車に乗っていた今のマネージャーだ。

「彼女は事務所の仕事に移るの。所属タレントの統括的なポジションになるわ。それ

で、あなたにマネージャーになってもらいたいのよ。実はね、会社の人達には最初から

あなたは私のマネージャーにする予定だからって言ってたの。その頃から菊月には昇格

の話が出てきてたから、あなたをマネージャーの候補として会社の人間には推していた

のよ。だって、さすがに見ず知らずの人間をいきなり運転手で月給五十万円で雇うのは難しいから」

押しつけに近い言葉だった。初めからマネージャーになるものとして雇ったのなら、

男がそれを拒否するのはクビに等しい事だろう。それを言われれば、男も引き受けざる

を得ない。なるほど、女も裏で考えて動いてるということか。

「分かりました。そういうことなら頑張ってみます。不自由な点多いと思うので、

いろいろご指導の方をお願いします」

「ええ、キチンとサポートはするから」

もしかしたら、女は頭からこの展開を描いていたのだろうか。菊月が事務所の業務に

移動する事を知っていたから、男を引き抜いた。男を側に置いておくために。女性が側

にいなくなれば、監視のない二人きりの状況が用意される。それなら、ずいぶん巧妙な遣り口を考えている。

その夜も、男は自宅で女を抱いた。当初と比べ、男の生气は弱まり、女の生气は強ま

っている。女が男の若い気を食い、呪縛に押し込めようとしている感覚が起こる。この

まま全てを女の意のままに食われてしまうんじゃないか、と危機感も生まれてしまう。

心が腐っていく様を感じながら、男は懸命に戦っていた。目の前の行為に耐えていけば、

いつか望むべき道が開けると信じて。

行為が終わり、男と女は仰向けに寝ている。何の飾りもない天井を眺め、身体の中で

当て所のない自分探しを続けていく。俺は、俺はどこにいるんだ。

女と体を重ねる度に

自分が遠くなっていつてる気がする。いずれ、自分で自分の居場所も分からなくなつて

しまうんじゃないだろうかとも思った。女は男の隣でただ物思いに耽っている。老いた

体にあれだけの刺激を与えてるのだから、そうそう眠りになんかつけない。腕枕なんか

したりはしない。間違つても、この関係に恋人が割り込んできたりしない。あくまでも

割り切った関係、ただそれだけの事。女が隣で何を考えているかは知らない。特に興味

もない。男には、自分を保つ事が精一杯だった。自分が大田恵一としてある事、それが

唯一に近い現状への反撃のように思えた。玩具でもない、逃亡者でもない、今ここに俺

はいる。

「この家はあなたにあげるわ」

そう言いながら、女は男の腕に触れる。

「あなたが今の関係が続けてくれるなら、この家だけじゃなくて私の遺産はあなたにいくようにしてあげる」

「えっ」

驚いたように繕う。本心は、男が待ち望んでいた言葉だった。

「本当は、最終的にあなたを事務所の代表取締役になるようにしてあげようかと思っ

たの。ただ、それだと周りの目もあるし、なによりあの会社は私がいなくなったら未来

は高が知れてるわ。だったら、他人の事なんて気にしなくてもいい褒美をあなたに与え

ようと思っただの。あいにく、私は両親も他界してるし、兄弟も姉妹もいないわ。まあ、

親戚ぐらいいはいるけど、大した交流もない程度の関係だから文句は言わせない。だって、

私のお金を私がどうしようと勝手にしょ

思わず、息を飲む。歯をグッと噛み、目を開く。その言葉を・・・

・・・その言葉を

待っていたんだ。

「遺産ついていても、どのくらいあるのかなんて分からないんだけど、一生暮らして

困らないだけはあるはずだから。ちゃんとあなたの手元に渡るように書にも残しておくから安心して」

「そんな・・・でも」

言葉だけの遠慮を言い置く。断る気なんて更々がない。一応の配慮、ただそれだけの

こと。

「いいのよ。あなたはこれまでと同じように私の側にいてくれれば。それで私は満足だから。なにも、恋人になってくれたの、結婚してくれたのなんて言い出したりはしないわ」

男は笑みが零れてくるのを我慢しながら、心を躍らせる。願った展開が舞い込んできたのだ。

翌朝、久留米雀を自宅へ送り届けると、男は光村沙耶の部屋へ行った。今日は休日になったため、時間はたっぷりとある。案の定、女は眠ってる時間だったが、男の来訪に目を覚ます。そして、お決まりのように男と抱き合い、服を脱ぎ、股を開く。絶頂へと達すると女は可愛げのある顔を見せる。甘える事のない久留米雀、甘えたい思いを隠す片柳彩子と違い、女は素直に感情を出してくる。男に恋情を抱き、それを注ぐように。その逆がないとは思わずに。

「今日はなんだか穏やかだね」
行為が終わり、男の腕枕に収まりながら女は言う。その下の方では、抱き枕のようにして男の体を両足で挟んでいた。

「そう。別にそんなことないけど」
はぐらかしたが、男には女の言葉を理解できた。最近は精神の不安定に蝕まれ、正常を保とうとしていたが幾らかは相手に伝わるものがあつたのだろう。だが、今日に限っ

てはそれは大きく違った。今日の男の心は強く満たされている。正直、こんなに気持ち
が浮いたのはずいぶん久しぶりに思える。それもまた、幾らかは女
には伝わっているよ
うだ。

「なんかさ、ここ最近疲れてるみたいだったから」

「ああ。多分新しい仕事になったから、今までとは違うところを
使わないとならなく
て変に疲れちゃったのかもしれない」

もう大丈夫だよと女のおでこに唇をつけると、よかったと女は男
の口に何度か唇を合
わせた。

「そうだ。とっておきの面白い話があるの」

そう切り出し、女は男の肌に触れながら話を始める。女の話は勤
めているキャバクラ
に来る客についてだった。女はよく客に関する話を男に聞かせる。
女自身が話したいと

いうこともあるが、男の方もそれは興味のある内容だった。女がナ
ンバーツーとして在

籍する店はそこそこの通った有名店なため、財界人や芸能人や
ら暴力団員も出入り

しているらしく、そこで繰り出される会話は面白味のあるものばか
りだ。女を気に入る、

毎度指名する客からは特に門外不出とされるような話も聞けるらし
い。男がそれを聞き

たいと促すと、絶対他言しないようにという条件付きで女は話して
くれる。それを頭に

留めておき、女の目が向いてない時に男はメモに記しておく。こん
な貴重な情報、ただ

の興味本位の会話で終わらせるはずがない。武器としての情報とし

て、懷に隠しておく。

どこで使えるものは分からないが、いつか身を守るために使える武器になるかもしれない。

男はなにも愛してないだけの女とただ時間を共に過ごしているわけじゃない。一等地の部屋、優雅な暮らし、そして様々な分野の情報源。女の付加価値に対し、側に置いておくべき人間と判断して関係を持っている。仕事や美貌など、選り好みはしない。男の求めているものはそれじゃない。

光村沙耶の部屋で夕方まで眠りにつき、キャバクラの仕事に出掛ける時に男も一緒に外へ出た。次の予定まで少し時間があつたので、コーヒーストアに寄ってアイステイーを飲みながらコンビニで購入した新聞に目を通していく。その中で、夕刊に目を引く記事があつたので、捨てずに店を出た。

十九時、大通りに面したちゃんこ料理店に時間通りに到着すると、店員に通された個室には片柳彩子がすでにいた。待たせたみたいだねと言うと、全然ですと女の子は首を振る。今日はモデルを務めてる雑誌で担当してる連載の仕事だったらしく、夕暮れには終わらせられたようだ。

「今日はね、新宿から原宿までを明治神宮周りを中心に歩いてたんです」

女の子のやっている連載は、東京とその近郊の中から毎回一箇所にスポットを当て、

その周辺を名所から路地裏まで回るというものらしい。女の子自身がカメラで撮った写

真や、その様子をカメラマンが撮った写真を掲載し、レポーター感覚の文章を載せたも

のを合わせて完成するそうだ。

女の子は今日回ってきた経路についての話を男に聞かせたが、男にとってはタクシー

ドライバーの頃に幾度となく走ってきた場所だったため、大概の部分は初耳というフリ

をして聞いてあげることとなった。路地裏にこんな店があった、こんなかわいい動物が

いただの、初めて耳にする内容もあったが、正直どうでもいいものばかりでしかない。

それなのに、女の子はいたく楽しそうに話していく。無邪気という言葉がよく似合う。

それは男が大部分を欠いてきた感情だった。

女の子の話が途切れた頃には、二人を挟むテーブルの上に置かれた鍋が煮立ちだして

いた。鍋は肉や魚介や野菜などが入った味噌味で、女の子の希望でここに予約を入れた。

以前に仕事の打ち上げで利用した店のようで、それ以来この鍋が好物になったらしい。

男と女の子が待ち合わせをするのは食事処が多く、夕食を交えながら話をし、車で自宅

まで送り届けるというのが大体の流れになっている。店選びは女の子の食べたいものを

聞いてからリストアップする事もあるが、今日のように初めから店自体を選んでくる事

もある。

「これ、さっき発見したんだ」

鍋が出来上がり、食べ始めると男はさっき取っておいた夕刊を差し出す。記事の中に

あった特集に女の子が載っていたのだ。といっても、女の子が何かをしたわけじゃなく、

単にエンターテインメント的に日常を日記調に書いたものだった。

「ああ。私、まだ見てないんですよ」

そう言つて、女の子は夕刊を手にとって読み出す。黙読だが、鼻歌を鳴らしてるのに

本人は気づいてるだろうか。

「ありがとうございます。よく見つけましたね」

女の子から新聞をはいと返される。その特集は毎月交代で新進気鋭の著名人が日常を

文章にするというもので、今月は片柳彩子が担当している。内容について特に決まりは

なく、本人の現在の心持ちや環境からプライベートや仕事についてなど題材は様々でいいらしい。

「ホントにたまたま買った新聞に載ってたんだ」

「マジですか。ちよつと運命あるかも」

男の顔を見ながら女の子は笑った。その反応に、男も自然と笑みを見せる。なぜか、

女の子のいると男は心が安らぐ。また、その感情に素直に甘えを出す自分もいる。ただ、

その二人をどこから客観的に観察する自分もいる。緩めはするが、隙は見せやしない。

下手になるような事はしない。

その後、鍋を食べ終えるまで話は弾んだ。昨夜の件で男は上機嫌だったため、笑顔も

絶えない。そんな男の様子を目にし、女の子も気分がよかった。男がそうであるように、

女の子もまた男の存在に活力を注がれていたから。

店を出てからも浮いた心持ちは続き、二人でゲームセンターとボウリングへ行った。

ゲームセンターに入るのは数年ぶりだ。対戦型の機種で対決したが、両方とも初心者も

同然の腕前だったので他人に見せられるようなレベルじゃない。訳も分からずに機械を

操り、知らぬ間に勝敗がつき、その意味の無さに面白くなる。クレインゲームにも挑戦

したが、経験は無いに等しかったので三千円を使ってヒヨコのぬいぐるみを落とすのが

精一杯だった。それでも、女の子は大切にしますと貰っていた。ボウリングも前の職場

で飲み会があると、二次会でたまに行くぐらいだった。女の子はよく友人や仕事仲間と

やるそうで、中々いい腕をしている。男は百二十二、女の子は百五十八というスコアで

勝負はつく。男は以前の仕事場の中では優秀な方だったが、簡単に鼻を折られた。それ

はそうだろう。男と試合をするのは体力が下降線を辿る熟年者、女の子と試合をするの

は体力の衰えなんて知ることもない若者。張り合っている場所が元から違っているのだ

から。罰ゲームありきで始めたので、勝者は敗者への命令権が与えられる。何でもい

から私が喜ぶことをしてください、と女の子は告げた。

車で女の子を自宅へ送り届ける頃には二十三時になるうとしていた。車内でも会話は

弾み、時間は実際よりも早く流れている錯覚に陥る。男は自らの立場をわきまえつつ、

この瞬間の楽時にも浸かっていた。

「今日は本当に楽しかったです。ありがとうございました」

「いや、こっちこそ。ありがとう」

失礼します、と女の子は荷物を手に取る。助手席の扉を開けて外へ出ようとする女の

子の肩を掴み、振り向いたところに男は唇を合わせた。微妙に男は唇の位置をずらした

りしたが、女の子は固まったようにそこにいる。目は開いていたが焦点が合ってなく、

不意を突かれたせいで何も出来ずにいた。

唇を離すと、ようやく女の子の体は正常の機能に戻った。それでも、男に視線を合わ

せたり、外したり、変に意識をして眼球はキョロキョロ動いている。言葉はなかった。

余韻に浸るように、車内は静けさに包まれていく。その中に占めるのは窮屈そうな空気

が多かった。女の子はどうしていいのか分からず、迷った表情を浮かべている。なので、

男の方から助け舟を出した。おやすみと言うと、女の子は察したようにおやすみなさい

と言って車を降る。車の前を通り、いつもよりも早歩きぎみにマンションに入っていた。

男は息をつき、車を出す。女の子からメールが届いたのは十分後、「やばい」という

題の後、「ドキドキが止まりません」と一文だけがあった。男はフツと笑い、ゆっくり

心を落ち着かせてから寝るようにとメールを送信した。

それから、萎えていた男の心持ちは回復をみせた。久留米雀の遺

産を手にする口約束

を得たおかげで、向かうべき対象が明確になれたから。このまま週一で女の相手をしていけば莫大な金が入る。それも、女は年なので性交はそう長く続きはしないだろう。

いずれは性交渉が世話係となり、女の介護をこなしていく生活になる。日本人女性の平

均寿命からすれば、この生活は二十年ほど終わるだろうか。それだけ我慢を繰り返せば、男には五十歳手前に富が与えられる。

女との関係は呪縛に捕らわれたような心痛が伴うが、現実には強要されるものはない。

女からは、二人の関係に支障をきたさないのならと男の自由も約されている。他の女性

と仲良くなるのも関係を持つのも結婚するのも構わない。ただ、女との関係がバレては

ならないのは絶対的な条件となる。やるのなら完璧に嘘を突き通す、そうでないと全て

が水の泡となる。せつかくのこれまでの苦労は意味を為さなくなり、そうまでして保つ

べき関係など男にはない。

「大田くん、こちら記者の柴村さん」

女の紹介で、男は軽く頭を下げる。

「でっ、こっちが新しくマネージャーになった大田です」

女の紹介で、男は挨拶とともに頭を下げる。目の前にいる女性と名刺を交換し、二言

三言を交わす。女性は痩せた体型に顔立ちもしっかりしていて、意思の通ったキャリア

ウーマンという印象を受ける。名刺に目を通す。週刊誌「女性生活」の記者の柴村忍、

見たところ三十歳代の後半あたりだろう。

女は女性生活に連載を持っている。男も勉強の名目で雑誌に一度目を通した。もう、八年以上も続いているものらしい。なので、女と女性との会話はとても賑わっている。

連載は女が現代社会からテーマを一つ挙げ、それについて独自の考えを促すという内容になっている。そのテーマを決めるため、毎回二人でざくばらんな話をしながら進めていく。担当は八年の間に数回替わったらしいが、女は女性とは話が合うからと気に入ったようで長く続いているらしい。確かに、二人は傍から眺めていても気が合っていると思う。世の中に対して厳しい意見を持ち、それを素直に吐露している。

男は今週から久留米雀のマネージャーとしての仕事を正式に任された。先週は一週間、引き継ぎという形で菊月にいろはを教えてもらいながら現場を回っていたので、今週からが事実上の担当ということになる。この連載は隔週なので、女性とは初めての対面だった。男は初対面の人とは人間性を探るためにも深く係わり合いにはならないようにする。どのぐらい首を入れて接していい相手なのか、自分や他人との会話を通して見定めていく。

仕事が終わると、そのまま女性を含めた三人で食事へ行くことになった。時間が遅かったのであっさりしたものがいいとなり、うどん屋へ行った。座敷の席へ通されると、

うどんと日本酒を注文して乾杯をする。ここでも女と女性の話は盛り上がったが、男も女性からいろいろな質問を受けた。どれもプロフィールを一つずつ突いていくものだったが、男は真実と嘘を混ぜながら答える。過去については、掘られてもいいものだろうでないものがあるから。女性に限らず、久留米雀にも光村沙耶にも片柳彩子にも同じようにしている。出身地は九州と嘘をつき、細かく聞かれたので熊本と嘘を重ねる。これまでの経歴もそこから外れないようにした作り話にする。それ以外の生まれ年やら趣味やら特技やらは真実で答えた。よくあるシチュエーションにも思えたが、男には女性の瞳がいやに気にかかった。記者という仕事柄からか、相手の言葉の裏側を覗いてくるような観察的な瞳をしていた。

二千八百八十九万三千二百五十三円、通帳の預金額を眺めながら男はその数字に実感
を憶えていく。大学を出てからの六年間、タクシードライバーとして毎日をただ普通に生活してきた。野望は抱き続けてきたが、生活自体に欲を出す必要はない。家電も衣類も量販店で事足りるし、飲食もチェーン店で満足できる。月給から家賃や生活費や雑費を引いても、年間で四百万円は貯められる。新しく転職してからの五ヶ月、月給に加え、
久留米雀から毎週の行為の報酬代わりに渡される金もあり、ひと月でも百万円に近い額

は貯められた。金銭についても、住居についても、仕事についても、同世代の人間から比べると結構に高い位置にいるのではないだろうか。それでいい、その事実で俺は生きていける。

久留米雀からの特別な接触は仕事終わりの夕食と毎週の行為だった。料理はしない人なので、食事は自動的に近く外食になる。朝食や昼食でも現場で弁当が出ない時には外で摂っている。仕事日にはその場に必ず男も帯同する。金は女持ちだし、女がよく行く店なので味もいいため、悪い事ではない。逆に、それ以外に女からのコンタクトは無いに等しかった。電話が鳴る事もメールが届く事もほとんどない。線はきっちりと引いてくれるのは男にとってはやりやすかった。

光村沙耶からは頻繁に発信が届く。女は男の事を恋人と信じ込んでいるのだから当然といえる。用事があるうと無かろうと、声が聞きたいからと無理やりな理由をこじつけてくる。女は甘えた声を出し、男は落ち着いた声に終始する。二人の関係性ははつきりしていた。主導権を握るのは男、手綱を引かれるのは女。男の嗜め方の巧妙さによって、女は引かれている事にも気づかずにいる。

片柳彩子からも比較的コンタクトは多く届く。この前のキスで、女の子の心は完全に男の方へ向けられている。あれ以来、女の子からのメールに変化がみられた。内容や文章や回数に変わりはないが、絵文字にハートマークが増えた。それ

だけのことだったが、それが女の子なりのアピールなのだろう。急に内容を変えたり、回数を増やすと、勝手な恋人気分が一方通行になってしまいそうで大きな変化は控えたんだろう。

「ねえ、大田さんってモテるでしょう」

女性の質問に男は首を横に振る。

「全然ですよ、僕なんて」

「嘘だあ、その顔でモテないわけないでしょ」

決めつけのように女性は男に突いてくる。否定は続けたが、一向に信じようとはしなかった。

この日は久留米雀の女性生活での連載の打ち合わせの日だった。

担当はもちろん柴村

忍で、通常のように話は盛り上がっていく。今回のテーマは恋愛、最近の結婚活動など

のブームを軸にしていきたいと女性から持ちかけられた。

そして、打ち合わせ終わりでまた三人で夕食を摂る事となった。

三人でというよりは、

女と女性の食事に付き合わされる形であったのは明らかだ。鰻屋で

女の金で三人で松を

食べながら話は進む。仕事の流れを引いてきたように内容は恋愛に

なり、今度はそこに

男も加わることになる。正直、こうなると女二人と男一人の対式になるのは読めたので、

あまり癪に障るような発言は避けていく。

「今まで付き合った人数は」

「三人とか四人じゃないですかね」

あやふやな言葉にしたが、その通りだった。交際という名目で付

き合った人数はそれぐらいだったが、男の中でそれはあくまで建前でしかない。金の羽振りのいい女、地位のある女、そういう人間しか相手にはしなかった。男にとっては、別に付き合うかどうかどうかは関係ない。利点のある女が惜しみなくそれを提供してくれる、その特典でしか選びはしない。たまたま、これまでの人生の中でそれに当てはまる人数がそれだけだったということだ。

「もつというでしょうに」

「いえ、ホントですよ」

「じゃ、一人が長いんだ」

「まあ、そんなところですね」

適当な対応をしておく。本当のところも、確かに一人は長いが単に相手の心が冷めるのを待つてただけだ。女性側の感情が他方向へ行く、それが男の交際の破局の常になる。男自身は感情の変化で動くことがないので、相手の心が萎えたら関係が終わるという方式に自然となる。男からすれば感情論は無く、ただただらとした付き合いを続けるのみだ。

「好きなタイプは」

「特にはないですよ」

金と地位、とは言うはずがない。

「一つか二つはあるでしょ。細かいところで」

「そうですねえ、何か魅力を持った人ですかね。何でもいいですけど、尊敬のできるものを持つてる人かな」

「へえ、なんかありきたり」

女性はつまらなそうな表情をわざと浮かべる。もっと男の底をほじくりたいのだろう

けど、あいにくそんな滑る口は持ち合わせていない。第一、魅力という言葉に嘘はない。

尊敬とは言いすぎになるが、金や地位に魅力は感じる。努力で手に入るわけではないのがアンバランスであり、尊敬という言葉はあたららない。

「年下と年上ならどっちがいい」

「どっちってことはないですよ。年上の方は尊敬できますし、年下でも惹かれるものはありますし」

ほとんどマンツーマンのような質問の掛け方になっている。隣にいる久留米雀には相槌を求める程度で、女性の興味は男に向いていた。男にはこの空気感は嫌なもので、今すぐにも帰りたい思いに駆られる。

「なんか、さっきからその場を凌いでるみたいな返答が多いよね」

「どうしてですか」

「どうしてだろう。この仕事やってるからかな、どれくらい本音で話してるかが敏感に察知できるんだよね」

女性は男の本音を読み取るように表情を眺めていく。厄介なタイプだ、と直感で思う。

他人の深い部分にまで無理にでも入り込もうとしてくる嫌味な人間。この手のタイプが一番嫌いだ。まして、それが職業的なものだとしたら単なる病気だろう。人の痛みなど

二の次にしか考えられない奴に心の中など見せてたまるか。

結局、女性は男への質問攻撃を続けていった。男も折れずになあ

なああの返答に終始はしたが、胸糞悪い感覚を憶えながら表情だけはにこやかさを絶やさぬように心掛ける。女もどちらかというと女性に加担するような形で、二人で恋愛における女性側の感情を男へとぶつけてく。よくそんなに言葉が出てくるな、とばやきたくなるほど愚痴る口は滑らかだった。

暑さに慣れだした体を擦り抜けていく夜風は涼しく心地いい。こいう時に自然への懐かしさは蘇えってくる。子供の頃から肌に感じてきた四国の風が今でも一番この体に馴染んでいる。たまに、無性に故郷が恋しくなってしまう。あと数年もすれば、自分も定年だ。そうしたら、故郷へと戻って一日一日を愛おしく過ごしていこう。だが、その前にやらなければならないことがある。

男性は視線を上へ向ける。そびえるマンションの中の一室、そこに大田恵一が住んでいる。男性がここへ来た時にはもう帰宅しており、電気は点いていた。なぜ、あの男はこんな一等地の高級物件へと引っ越したのだろうか。はつきりいつて、運転手レベルが住んでいいところではない。そんな給料の相場が良いはずはない。ここの家賃だけでも月給を持っていかれてしまうだろう。身分不相応どころか、無謀という言葉しか当たらない。少なくとも、これまで目にしてきた限りではあの男はそんな事をするタイプでは

ない。

ならば、どうしてそれが可能なのか。理由はなんとなく察しがついている。久留米雀、

あの女が係わっているに違いない。あの男がタクシードライバーから転職した先の仕事

が久留米の所属する事務所の運転手ということは調べがついた。どういった経緯で転職

までしたのかは知らないが、おそらく前職の方が給料はいいんじゃないだろうか。それ

をわざわざ移行したのだから、何かしらメリットがあっただろう。一体、その条件は

何なんだ。考えるも、答えは出てこない。芸能人と触れ合える、などという幼稚な思考

では絶対でない。そんなミスター人間ではない。あの男はもつと沈着冷静でドライな

人間のはずだ。

唯一、その切れた線を繋げる推理はある。ただ、それを事実とするには相応の心構え

が必要になる。それは、久留米雀が大田恵一を飼っているという線。あまりに突き抜け

すぎた突拍子もない線に見えるが、全くの根拠なしというわけでもない。三週間ほど前、

亀谷右京は一つの流れを目に留めていた。その日の夜、まだ部屋の明かりが点いてなか

った男の帰りを気長に待っていた。男は一時間ほどで帰宅する。いつものベンツ、転職

した際に男は車も変えた。新しい会社から支給されたものを私用としても使ってるのだ

ろう。駐車場の様子は外からは見えないが、その後に通過するロビーにはガラス張りの

ところもあつて眺められる。そこから通常通りの男の姿を眺めようとしたが、そこには驚くべき光景があつた。男自身に変化はなかったが、その後ろに女の姿があつたのだ。

男性は目を瞬かせ、詳細を捉えようと身を乗り出す。視力には自信があつたので、その距離からでも全体像を把握することは可能だ。男の後ろにいたのは久留米雀、間違いはない。二人はいたって自然な様子でマンションの奥へと入っていく。しかし、その外観は明らかに不自然でしかなかった。運転手の部屋に入っていく芸人、どうということだ。

男性の頭内では様々な流れをこれでもかと行き交う。そのどれもが不正解な気がしてならない。胸が疼いてくる。変な思考が頭に湧き出てくる。トイレでも借りに行ったのだろう、心内を正常に留めたくて強引にそう思おうとした。だが、十分が経ち、二十分が経つても女は姿を見せない。トイレのついでに茶の一杯でも振る舞われてるのだろう、正常を乱してくる心内への強引さをそう増しにさせる。だが、やがて男の部屋の電気は消えた。男性は自失に近い感覚に襲われ、暗くなった男の部屋を眺めたまま立ち尽くす。

今、あの部屋で何が行われているのか。想像しただけで体に武者震いが生じる。還暦を超えた大物女優、容姿の優れた二十歳代の男、その二人が体を跨らせながら互いの欲望を満たしていく。こんな……こんなことがあっていいのか。頭内を汚染される

寸前まで侵され、瞳孔が開いたまま男はくわえていたタバコを道に投げ捨てて帰っていた。

女は前職時の男の運転するタクシーに乗車、そこで男に惹かれる衝動が起こる。それは女の中で強い思いとなり、男と何とか連絡を取って自らの所属する事務所へと引き抜く。女はそれでは飽き足らず、男の体すらも手に入れる。つまり、そういうことなのだろう。

男には何か相当な条件が提示されたに違いない。男はタクシードライバーという仕事を堅実にこなしていた。不当な欠勤もなく、勤務態度も良好、年齢の離れた職場仲間との交流にも問題はない。順調といえる毎日だったはずだ。それを辞めてまで移ったのだから、それなりの利益がなければならない。そして、さらに女と不埒な関係まで築いた。考えたくはないが、男はあの女に飼われてるのだろう。おそらく、

この高級マンションも女が用意し、それ以外にも行為に見合った報酬があるはずだ。それが何かは分からないが、一人の大人の人間としての軸を折るだけの刺激物なのだろう。

ついに本性を現したな、心内で男性はそう男へ告げる。お前は何かをする奴だと思っていたよ。このまま、大人しく平凡に生きていくような人間じゃない。そう睨み、今日

までこうやって追っていたんだ。何だ。お前の目的は何なんだ。金か、地位か、名誉か、何がお前の欲望に当てはまるんだ。まさか、もう一度過ちを繰り返

そうなんて馬鹿げた
発想をしてやいないだろうな。

その7（前書き）

登場人物

大田恵一・おおたけいいち（タクシードライバー、野望を携えて生きる野心家）

片柳彩子・かたやなぎあやこ（モデル、今どきの十代で分かりやすい性格）

久留米雀・くるめすずめ（女優、誰もが一目置く大物）

野木晃彦・のぎあきひこ（大田の学生時代の同級生、既婚で子供もいる世帯主）

柴村忍・しばむらしのぶ（週刊誌記者、久留米の連載を担当している）

亀谷右京・かめやうきょう（刑事、大田と過去に接してから後を追いつけている）

光村沙耶・みつむらさや（キャバクラ嬢、名の知れた有名店でナンバーツーを誇る）

その7

賑わう渋谷の街の一角にある焼肉店。20時過ぎという時間柄、店内には会社帰りのグループが多くいる。邪魔なほど会話は入り乱れてるのに、不思議とそれぞれが外部の会話に鬱陶しさを感じていない。男も状態は同じだった。通常ならば周囲に幅を広げる余裕を持っているが、今日の相手には隙を放るような真似は揚げ足を取られる御粗末な行動といえた。

柴村忍から携帯に夕食の誘いが届いたのは昨日のことだった。久留米雀無しの二人での食事がいいと言われた時には、何か心に構えるものが必要なのかと懸念した。焼肉店を選んだのは、単に三人の時には年長者に考慮して選択肢に入れてなかったからというだけのこと。

対面席にいる女性には異様とも思える気が張られている。これまでに出会ってきた女とは一味違う気、自信にも似た様はどこへ向けられたものなのだろうか。何の目的があって呼び出したのか、どんなカードを持っているのか、それによって出方の次第も変えていかなければならない。

メニューは一通りの肉の種類を一人前ずつ注文し、それを二人で分け合った。食事に

は何の変哲もなく、会話の内容も疑問が生じるようなものではない。ただ、このままで

すんなりと終わる気はしなかった。

「ねえ、大田くんって久留米さんにヘッドハンティングされたんでしょ」

「まあ、そんなようなところですかね」

「そりゃ、ヘッドハンティングするよね。こんぐらい良い男がいたら」

そう言い、女性は男を見つめる。男はそれを恥ずかしそうに制する。

「ああ見えてね、久留米さんは格好いい男が好きなのよ。普段はクールに装ってるけ

れど、意外に普通なところもあったりするわけ。あなたの前に運転手やってた人も格好

よかったわ。結婚するからってことで辞めちゃったけどね」

そうか、前の運転手も同じようなタイプだったのか。もしや、そいつにも札束で体を

求めてたりしたのか。結婚を機に退職したというところからすると、可能性はあるかも

しれない。だとしたら、あの年齢で大したもんだ。買われる側も買われる側、と言える

だろうが。

「実のところだけど、私ちょっと怪しいかなって思ってたの」

「何が」

「久留米さんとその前の運転手」

その言葉は男に緊張をもたらす。やはり、この女性は物事の本質を突いている。抜群

の思考を持ち、自らの目指す場所へと進んでいる。その先に自分がいるのか、そう心に宿る。

「そうなんですか」

「そうじゃないかな、って疑っただけ。何も確証はないわよ」

「どうして、そう疑ったんですか」

「なんとなく、その男の人が久留米さんの前だとそわそわする節があったの。厳しく

してて恐がつてるのかなって思っただけど、ちょっと違うなっと思って。怯えてるは

言いすぎかもしれないけど、普通とは表せない緊張感だった。久留米さんはいつも通りにしていたんだけどね。職業柄、いろんな人を見てきてるから洞察力はそれなりに優れてるの」

おそらく、女性の推測は当たってるんだろうと思った。女性の目を見てみると、その

目の奥から放たれる力の強さを感じられる。洞察力が優れてるというのは決して自意識

過剰ではないだろう。同時に、気を引き締める必要もある。前の運転手のように、女性

に関係を察知されるような事があってはならない。せっかく築いてきたものが全て崩壊してしまう。

「それで、あなたにはどうかなって思っ

て」
女性の視線が芯を突いてくる。ここが主文、これこそが男に聞かすべき目的の一文だと強く。

「どう、と言いますと」

はぐらかし、僅かながらの時間を作る。無論、女性の言葉の真意ぐらい初めから分かっている。この秒単位の間でしかるべき返答を用意するためのものだ。

「久留米さん、あなたに手を出してきたりしてない」

女性の言葉から一つ間を置く。急な反応は予め用意されたものだと窺われるかもしれないから。考慮の間が過ぎると、男は不意に笑い出した。出来るかぎりの自然さを心掛けて。

「そんなこと、あるわけじゃないですか。久留米さんが僕に、でしょ」

見間違い、そう思わせるように演技を続ける。記者だろうが何だろうが、ボ口を出しやしない。女性は男の笑い顔を見ている。自然な様を繕い、観察という奥の思いを携えながら。

「そうね、そりゃそうよね」

そう、女性も続くように笑い出す。男が逃げきった瞬間だった。表面上には映さない裏側での攻防に耐え切った。

男は女性を交わせた安堵を得ていく。しかし、その男の裏側に見た疑問を女性は崩してはいなかった。この男は不安定な足場に気丈にしているのではないか、と記者の勘が生まれていく。

「そう………柴村さんが」

その週の暗夜、久留米雀との行為は行われた。行為自体には何の変化もなかったが、男の心には靄があつた。それを押し出すように、女の体を下半身で突いていく。年齢によるものか、女の体は反応に鈍さがあつたが、今日に限ってはいくらでも突いてやれる

気があった。

行為が終わり、ベッドに横になると気を落ち着かせるための間となる。行為の長さはまさに疲労に繋がり、正常を取り戻すまでには時間が必要になる。幾らかの時間が過ぎ、

互いに息遣いが落ち着いてくると男は女に話を切り出した。柴村忍が二人の關係に勘を働かせている、という話を。

男の話に、女は驚きを見せた。まさか、気の合う仕事仲間にそんなふうに思われてたとは考えてもみなかつたようだ。だが、相手も週刊誌の記者だ。油断を見せた人間の懐に入る事は職業病といえどある。女性は女のそこへ入った。そこから取り出した疑問は中々に引き甲斐のある対象といえた。

「どこまで真剣なのは分かりませんが、何か事が起こってからでは遅くなります」

「事が起こる、って」

「週刊誌に掲載されるかもしれない、ということです」

女は頭内に男の言葉の想像を膨らませる。それを撥ね退けるように、軽い笑みを浮かべた。

「そんなことはしないわ。仕事相手を売るような行為よ。いくら大きなネタとしても、想像の範疇の情報を無理やり出したりはしないでしょ」

「だとは思いますが。ただ、もしもそれをしてしまったらという危険として言ってるんです」

女は言葉を止め、考える。今ある中での最善の策、それは一体何なんだろうかと窓外

の闇を見つめる。

男はここで女に話すまでに考え尽くした。確かに、女の言うように想像の壁を超えるものではないと思う。少なくとも、現時点では。しかし、そこまで辿り着いてる人間がいるのだから危機感を募らせておく必要はある。

「それは無いわ。そんな無謀なことはいし、出世に目が眩むタイプでもないし、スクープで一発当ててやろうって人でもないから。人間関係は割と大事にしてるらしいから、私を裏切ってまで証拠もない記事を載せたりはしない。結婚したら退職する、と言っていたし」

女は女性を信じたようだ。男自身、女の言葉は納得のいくものだと思う。あくまで、載ってからでは遅いという、可能性の話ではある。ただ、そうまで考えさせられる不安な心を起こすものがあの女性の目の奥にはあった。

翌日、男は光村沙耶と片柳彩子に会った。週に一度、久留米雀を抱いた翌日は女を車で送り届け、そのまま前者のマンションへ行き、夜に後者と待ち合わせで会うのが通例となっている。

女と行為を交わすのはなるべく翌日が休日の時にしてもらっている。共に夜を明かし、その足で仕事場へ向かうのは気分を転換するのが難しいからという意見に女は了承してくれた。仕事が詰まっていたとしても翌日も撮影になってしまう時には、女の撮影中

に一時現場を離れる許可をもらっている。その間に前者のマンションへ行き、仕事終わり、仕事終わりで後者と待ち合わせて会う。どこかしらで捻れた精神を戻さないと、己が屈折していつていつか滅んでしまふ。そうならないために、前者の部屋での行為で体内を清浄させ、後者と外で会うことで心内を清浄させる。その循環は男の中ではなくてはならないものとなっていた。

光村沙耶は男の裏を疑うことなく身を捧げる。男の引き締まった肉体に抱かれることが最上の喜びなのだとして声を上げていく。当然、女は男の肉体がその前に老体を抱いて蝕まれてきたものとは知らない。休日恋人である自分の元へと朝から来てくれる優しい人だと思い込んでいる。男がそんな行為に走ってるどころか、久留米雀の側で働いていることも知りもしない。余計な勘の利かせはいらないし、いくら男を信じきつてるとはいえ、普段から男と接することを仕事としているキャバ嬢の洞察力もあながちに侮れない。

片柳彩子も男の裏を疑うことなく現実を楽しむ。男との多くはない時間を過ごすことに無邪気に喜びを感じていく。当然、女の子も男の心内がその前に老体を抱いて蝕まれてきたものとは知らない。週に一度か二度、こうして夕食を機にして会う、友人でもなく恋人までいかなない関係なのだと思います。

正直、女の子は歯痒い思いを抑えている。毎回会うつと、二人はそ

の間に起こったこと

などを話題にして楽しい会話を続ける。それはそれでよく、その時間とはとても大切にしたいものだ。ただ、本当は進展を望んでるのも事実として胸の内に存在する。現状に不

満はないけれど、やっぱり恋人以上の関係になりたい。先日男からのキスによって、

その思いはより強くなった。

男は自分のことをどう思っているんだろうか。自分と同じような想いを持ってくれて

いるんだろうか。それとも、妹のように思われたり、友人と思われたり、体の良い遊び

相手だと思われたりしているんだろうか。違う、そんなことはない。キスまでしてくれ

たんだ、そんなに遠い存在に位置付けられてはいないはずだ。かといって、適当に女性

をたぶらかすような人でもない。この人は誠実で優しい、他人の心を思いやれる男性な

んだ。

「ねえ」

「あつ、ハイ」

男の呼びかけで、女の子は現実に戻された。男との事を考えてるうちに気が離れてしまっていたようだ。

「今の話、聞いてなかったかな」

「いえ、あの……すいません」

なんとか空気を保とうと試みたが、観念した。下手な嘘についても、掘り下げられた

りしたらすぐにバレてしまう。それなら、心は辛いにしても素直に謝った方がまだまし

だろう。

「ごめん、つまらない話だったかな」

「違います、違います。私が聞いてなかっただけです」

それも聞こえは似たようなものだと思いき、女の子はまた自分を辛くさせる。息をつ

く様を見て、男はフツと笑みを見せる。

「そんな落ち込まないで。別に、怒ったわけじゃないんだから。

悪いのは自分よがりの話をした僕だ」

「…………でも」

男の優しさに心を摘まれる。それに身を委ねたい思い、そんなに甘えていい関係だ

ろうかという思いも生まれる。

ちなみに、と男は話を続けた。

「何を考えてたの、さつき」

「えっ」

女の子は虚を突かれる。一分前の思考に帰る、とても男に直接に口にできる内容ではない。

「あの、内緒で」

「なんだ、そう言われると知りたくなるな」

そう言つと、互いに笑い合う。今はこの関係でいい、と女の子は思った。関係の進展

を望むことより、告げることで関係が壊れてしまうことの方が今の自分には大きくなるから。

食事が終わり、男は女の子を自宅へ送り届ける。ありがとうございましてと女の子が夕食と家まで送ってくれた事へ感謝を告げると、また行こうと男が答える。通常通りの

会話、それで別れるはずだった。

だが次の瞬間、瞬く光が目飛び込んできた。光は連射し、視界を奪う。光と同時に音も聞こえ、それが何の音であるかは分かりえた。ただ、現状を理解するには至らなかった。

光が止まり、視界が次第に復活してくる。しかし、夜も遅いので元々の視界が悪く、周りを見渡してもうまく識別するのが難しい。だが、あるものを捉えると事態の悪化を判断することは可能になった。

車の前に立っていたのは柴村忍だった。手にはカメラを携え、レンズはこちらを向いている。獲物を捕らえる真の瞳をしており、口角も上がっている。その要素を並べてい

くと、男は状況を理解することができた。隣を見ると、助手席の女の子は目を見開いている。何が起こったのか、まだ判断できずにいるようだ。

女性はこちらへと歩いてきて、運転席の窓ガラスをコンコンと二回小突く。男が窓を

開くと、女性は成果をあげた満足感を表した表情でこちらを見遣る。現在の状況の良し悪しがままた映し出されていた。

「くんばんは」

余裕のある感じを女性は醸し出している。上手と下手、どちらがどちらに嵌るのかは一目瞭然だった。

「どういうことだ、これは」

構えた表情で男は訊く。もったときつく問い質してやりたいが、感情はここでは抑え込

める。

「さあ、どういうことでしょうねえ」

意図的に無駄な白を切る女性へ男は怒りを覚える。振り切れる状況だなんて思っちゃ

いけないせに。

「ふざけるな。どうして、あんたがここにいる」

「偶然通り掛かったのかな」

「偶然のわけがない」

周りにはマンションや住宅しかない。女性の自宅付近でもないのにたまたま通る場所

なんかじゃない。これは明らかに故意的なものだ。だとすれば、考えられる推測は限られてくる。

「着けてきたな」

男の言葉に、女性はフッフと笑う。的中だった。

迂闊だった。まさか、ここに来るとは思ってもいなかったから。攻められるとする

なら久留米雀との関係だと気を張っていて、それ以外のところに重点など置いていなかった。

男が言葉に窮していると、女性の方から開口する。

「あなたには何かあると思ってたのよ。何かを包み隠しているような雰囲気を感じら

れた。それが何かを知りたくて。追ってみて正解だったわ。こんな良い場面が撮れるなんてね」

湧いてくる怒りを抑える男を余所目に、女性は助手席の女の子へどうもと軽い挨拶を

投げる。女の子はまだ目の前で起こった事実を把握できず、怒ったり、落ちたりもする

ことが出来ずにいる。男と女性の言葉のやり取りで知り合いなのは分かりえるが、実際どんな関係性なのかは分からない。今はただ、こんがらがる頭内に飛び交う一つずつのピースを嵌めていくしかない。

「片柳彩子さんよね、初めまして」

男を挟んだ先の相手へ言葉を掛けるが、女の子は返答しなかった。正直、何が正しいのかが探し当てられない。

「私、こういう者です」

女性は手を伸ばし、助手席の女の子へ名刺を差し出す。間にいた男は別に仲介したりなどしない。女の子は挨拶はしなかったが、この名刺は受け取った。この無理に現れた人物の謎を解きたかったから。

名刺を見る。女性の名前は柴村忍、週刊誌の女性生活の記者。雑誌は知ってる、見た

ことはないけれど。よく書店やコンビニの入口の近めの棚に置かれている成人女性向けの週刊誌の中の一つ、という印象ぐらいでしかない。その記者がどうしてこんなところにいるのか。運転席の男とどうして知り合いなのか。解消されない謎はまだまだ広がっていく。

「驚いたわ。彼を追ってきたら、まさかあなたが出てくるなんて彼とはどういった関係かしら」

女性の直接的な言葉に、女の子は顔を少し伏せる。

「いい加減にしてくれないか。これはまったくのプライベートだぞ」

女の子の反応を見て、男が言葉を挟む。

「あら、嫌だわ。週刊誌の記者は有名人の裏側を撮るのも仕事じゃない。表側ばっか

載せてるだけなら、スポーツ新聞で充分だし」

女性は開き直っている。この状況において、この堂々さ加減は厄介者以外の何者でもない。

「有名人であるなら、こういうところには気を張ってないと。まして、売り出し中の

モデルなんて恰好のネタなんだから」

挑発ともとれる口調で女性は女の子へと放る。女の子は目を細め、悔しそうな表情を浮かべていた。

「何がしたいんだ、君は一体」

「何って、とりあえず本に載せるに決まってるじゃない。こんなおいしいネタ、寝か

せたままにするわけないでしょ。まあ、片柳さんにはあらためて事務所を通して報告がいくと思うけど」

「何を言ってる。そんな勝手な真似、許されると思ってるのか」

「許すも許さないも、私は記者として当然の事をしたまだよ。撮るべき対象がそこにあったから撮った。当たり前の流れよ。抗議したければいいわ。するだけ無駄でしょうけど」

悔しいが、女性の言う通りだった。報道の自由がある以上、このレベルで抗議にでたところで結果は見えている。気の張りを弱くしていた男の負け、その己を納得させるしかない。

じゃあね、と女性は余裕の表情でその場を後にしていく。その後姿を眺めながら、

男は展開のまずさを感じていく。本人と面と向かっている間は高揚していたものが冷めてきて、次第に自身の感覚が取り戻される。

「・・・・・・・・運転手さん」

隣からの声で、女の子の存在を思い出した。眼前で起こった出来事に夢中になってしまい、いつしか助手席に座る女の子のことに意識を向ける心のゆとりの余りさえ無くなっていた。

「もう帰った方がいい」

柔に言ったが、本音は邪魔だから帰ってほしかった。心内のまとまりが利かないので、早く一人になりたいくて。

女の子は男の言葉を受けても帰らなかった。こんな事になったのに、このまま素直に帰ってしまつていいのだろうか。そう思いながら、何も言うことなく、ただ隣で男の方を向いている。

「ごめん、帰ってくれないか」

今度は言い捨てるように投げた。優しさのない視線を送りつけると、女の子はこちら

を固まつたように見ていた。だんだんと子犬みたいに瞳を潤ませていくのも分かったが、

今は多少萎縮をさせても手の届く空間から離れてもらいたかった。

女の子は荷物を抱きかかえて、おやすみなさいと力のない声で呟く。車を出ていく姿

も、マンションへと入っていく姿も、視界に入つた程度で特に目で追ってはいかない。

それどころではなかった。

男はハンドルに頭をぶつけ、自らの失敗に大きく息をつく。こんな事になるなんて。

細心の注意は払ってきたつもりだったのに、あんな女にしてやられるとは。不覚としか言いようがない。

あの写真が世間に出回ってしまうのはまずい。久留米雀は他の誰とどんな関係を持とうと構わないと言っているが、体裁はそうはいかない。今いる事務所における立場は一気に低くなり、下手をすれば責任問題に発展する可能性だってある。どうにかしなければいけない。

男はその足で光村沙耶の部屋を訪れた。女は仕事に出てる時間のため、ただの真っ暗

闇の部屋だった。電気も点けず、ベッドに身をあずけ、巻き返しのための作戦を頭内に巡らせていく。

女は通常通りに朝に帰ってきた。どこそのみすばらしい中年男性にアフターで送ってもらったりしたのだろうが、そんなことに一切の嫉妬はない。久留米雀から自分に対しての関係と似たようなものだ。こちらの思惑に添ってくれるのなら、あとは何をしようとも勝手にすればいい。

「どうしたの」

ベッドに寝そべっている男に驚いた様子で女は声を掛ける。頻繁にここに来ているが、

二日連続で来ることは割と少なかったから。

男は浅い眠りについていたらところから起こされ、女が存在を視界に捉える。今の男の

助けになるのはここだった。

「なんか、会いたくなつた」

夢うつつの状態で零した嘘はかえって真実味が増した。女は言葉をそのまま受け止め、喜色に満ちていく。

「シャワーだけ浴びてきちゃうね」

そう言い置き、女は荷物を置いて浴室へ向かう。ちらりとだけ顔を見たが、はにかんでいた。

風呂から出てくると、女はバスタオルだけを体に巻いてベッドに入ってくる。昨日と

同じ流れ、要は抱いて欲しいということだ。男は正直そんな気分ではなかったが、後の

ために女の気は乗せておきたいので望むようにした。二日続けての行為だったが、女は

昨日に劣らないほど強く感じていく。男はそれほどではなかったが、女の気を下げない

ために声を上げるようにして誤魔化した。やがて絶頂を迎えると、条件の責務を果たし

た感覚を得られた。

「この前に話してた、不動産会社の水増しがどうのつてあっただろ」

男の胸に頬を擦る女の髪を梳きながら話を始める。何気ない会話の始まりという印象を与えながら、本題に入っていく。

「うん。それが」

女は会話の内容に重みは見い出してない。男と密接していられる事の方が女にとって

重要なことだったから。男はそれを逆手に取り、話の内容を不自然と悟られないように深みに沈めていく。

「あれ、結局どうなったのかなあって思ってた」

いつぐらい前だかは忘れたが、それは女の口から零された。男でも名前を知っている

不動産会社の違法な水増しの話だ。難しい内容は女には分からなかったようだが、要は

アフターサービスとして徴収される手数料の一部がそうと疑われているらしい。ケアの内容によつて一部と二部に対象が分かれているが、実際は二部にあ

たるケアは手前文句

だけのもので活用される事はほぼ無いに等しく、消費者の安心を得るための厚みのある

宣伝としている。別法人として扱われ、経理も引き離されているので実体は謎が多いとされている。

女がキャバクラで相手をした四十歳代の二人の会社員が酒に酔つて、膿を出すように

吐き出した話だ。数年前から立ち上げられたもので、発足に係わったのは上層部の人間

がほとんどとされている。よつて、下の人間たちの中では悪い話が立ち上がる。一部の

お偉いさん方がグルになって作り上げた資金の集めどころ、本当は名前だけで実体さえない組織、溜まっていく一方の金は投資へあてている、などなど。

女にはまるで引きのない話だったが、男には頭に留めておくだけの情報だった。そして、

それを有効に活用すべき時が来たのだ。

「ああ。そういえば、三日前にまた同じ二人が来たよ。なんか、両方とも半分ぐらい禿げてて幸薄くてさあ。それで、話してくる内容まで愚痴ばっかだから苛々してきちゃった」

そんなことはどうでもいい。

「えつとねえ、絶対に違法だっていうのは言ってたかな。会社の中でも数人しか実体は把握できないみたいで、調べようにもバレたらクビだから恐くて誰もやらないって。実質的に仕切ってるのは副社長で、社長の弟さんみたい。溜まったお金は社長が個人的に企業なんかにも有利子で貸し付けてるらしいよ。まあ、全部社内に出回ってる噂の段階だけど」

「へえ、そうなんだ」

興味半分を外に出し、頭の中では女の言葉を全てインプットしていく。それから特には喋らず、女の頭や肩や背中を撫でながら早く寝につくのを待った。しばらくして女の寝息が聞こえると、男は入力した記憶をメモに書いていく。有力な情報を得られて、男はようやく安息に浸れた。

男は二時間から三時間の仮眠を取り、光村沙耶の部屋を後にする。今日は久留米雀の仕事が午後からだだったので、午前中は自由がきいた。そのおかげで落ちていた気を元に戻すことができ、仕事に差し支えずに済んだ。この日は情報番組の収録があり、いつも

のように女は軽快に言葉を走らせていく。昨日から今日にかけ、男にどんな受難が降りかかっていたかなど知りもせず。まあ、それでいいだろう。今回は女に報せが行くこともなく、事を潰してみせる。

「運転手さん、今は仕事ですか。出来れば、昨日の事で話したいです。きつと、私と運転手さんの間だけで留めておけないことだと思っから。仕事が終わったら、連絡ください」

片柳彩子からのメールだった。同じようなメールが朝から何通か受信されていたが、男は返信していない。余計ないざこざに彼女を巻き込むつもりはない。ただでさえ、柴村忍と自分とのラインには関係ないのにあんな目に遭わせてしまったのだから。今回の件に関しては、自分で決着をつける。だから、話し合いをする必要も、途中経過を報告する必要もない。

仕事終わり、女を自宅まで届けると男は携帯を手取る。連絡先は片柳彩子ではなく柴村忍だ。

「はい、もしもし」

その電話口の声に昨日までとは明らかに違う感情が湧いてくる。当然、女性の声自体に変化はない。

「大田です。分かりますか」

「分かるわよ。どうしたの」

どうしたの、じゃない。あんな姑息な真似までしておいて、よくもまあ平然を貫ける

もんだ。

「今、どこにいますか」

「会社よ。明日までに記事を仕上げないとなんないから、今日中に大まかに一通りは書いておきたいの」

「それって……」

「そうよ。昨日のあなたと隣のかわいいお嬢さんの事。驚くでしょうねえ、この記事が出回ったら」

ダメだ。完全に芸能のスクヤンダルに溺れた二流記者と化してしまっている。正面から願いを言っても、目先の勲章に眩んだ耳には聞こえやしないだろう。強行的に押し伏せるしかない。

「その記事を出すの、ちょっと待ってもらえませんか」

男の言葉に、電話越しに女性の微笑が聞こえた。

「ねえ、そのちょっと待ってもらえませんかで待ってもらえると思う。そんな甘いものじゃないでしょ」

女性からの言葉は上から投げられてくる。男との優劣は女性の中で結構な差となっているのだろう。

「もちろん、何の条件も無しにとは言いません」

「何。何か、面白いことでもしてくれるの」

「今から少し時間を取れませんか」

「今からねえ。まあいいわ、話ぐらいなら聞いてあげるわよ」

電話を切ると、車を走らせ始める。明日には記事を上げるということは機会は今日

しかない。確実な結果を求めなければならない。あんなネタ、市場になんか出してたま

るか。

待ち合わせ場所は女性の勤める会社の近くにあるファミレスにした。男が着いた時にはもう女性は席に座ってアイステイーを飲んでいた。男の姿を確かめると、女性は呑気にもこちらに手を振ってくる。男は女性の対面の席に座り、ホットコーヒーをオーダーした。

二十二時になろうとしていたが、店内にはまだ数組の客がいた。ただ、今は他の人間に思考を向ける隙間はないに等しい。

「聞きましょうかしら。その面白い条件ってやつ」
女性が開口すると、男はスーツの内ポケットから資料を取り出す。資料といっても、

今朝に書き込んだメモ帳だ。

「これは何」

「ある不動産会社の不当な手数料の水増しに関するメモだ」
女性の目の色が変わる。テーブルに置かれたメモ帳の内容に目を通していくと、確か

に男の言葉の通りのことが書かれている。

「信用できる情報なの、これ」

「おそらく」

「証拠は」

「具体的なものはない。ただ、これはその社員の口から出たものだ。信用はできる

に違いない。詳しく調べれば、きっと汚いものが出てくるはずだ」

男の言葉を耳にしながら、女はメモ帳を何度と眺める。一端の記者であるなら、魅力

のあるネタのはずだ。売り出し中といえど知名度は若い世代ぐらいにしか通じていない

モデルのスクヤンダルに比べれば、どちらを取るのがいいのかは説明するまでもないだろう。

「なるほどね。これと昨日のネタを取り引きしようってことか」
「どちらを取るかは君次第だ。まあ、考える必要はないと思うけど」

男は自信に満ちた演技を続ける。本当は光村沙耶から伝えられた間接的なネタでしかないが、自らの功名によるものである印象を植えつけていく。

「こんな情報、どこから手に入れたのよ」

「さあ、どこからだったかな」

見え見えの白を切る。まさか、疑いを持たれてる久留米雀、確信を撮られた片柳彩子、

それ以外にキャバ嬢の女がいるとは言えやしない。

「あなた、ただのマネージャーじゃないわね」

「何を言いますか。僕は久留米雀の単なる現場マネージャーにすぎませんよ」

男が口角を上げると、女性は真顔のまま微笑みを零す。女性にしたら、してやられた

という感覚が強かった。記者としては、男が提供してきたネタを選ぶのが正しいに決ま

っている。ただ、女性としては自分自身で掴んだネタに愛着もある。それが単なる素人の持つてきたネタにあっさりと逆転されてしまったのだ。心中が揺れるのは仕方のないところだった。

「分かったわ。これをキチンと調べさせてもらう。もし本当なら、ありがたく使わせてもらおうわ。その代わり、ガセネタと判明したら昨日のを記事にする。それで文句ない

わね」

「ああ。ただし、事実なら昨日の写真はネガごとこちらが貰う」

「いいわよ。それで交渉成立ね」

互いに不本意な破片は持ちながら契約は結ばれた。女性は記事をやリ直さないとなら

ないからと店を後にしていく。掲載を未然に防ぐことができ、男は背凭れに寄り掛かり息をついた。

「運転手さん、何回も連絡したんですよ」

電話口の片柳彩子は安堵と不満の混ざった口調になっていた。今日一日で様々な事が

あり、連絡をするのがずいぶん遅れてしまった。

「ごめん。今日は忙しかったんだ」

女の子へと伝えるのは全てが終わってから事後報告にしようと思っていた。いらない

心配はなるべく少なくなるように。

「でも、よかったです」

「んっ」

「全然返信が来なかったから。もしかして、避けられてるのかと思っ

て」
女の子は女の子で、今日一日を様々な思いで過ごしていた。あんな写真を撮られてし

まい、どうしよう。事務所やスタッフに迷惑を掛け、怒られるかもしれない。ファン

に落胆を与え、離れられてしまうかもしれない。マスコミから攻められ、心が折れてし

まうかもしれない。そうマイナス要素ばかりを考えると、どうしても気分は落ちていくばかりだった。

だから、男の声が聞きたかった。話し合う必要があることはもちろんだが、何よりも

男から直接前向きな言葉の一つでも掛けてもらえたら胸の内の不安心が和らぐと思ったから。

「そんなことはしないさ。本当に忙しかっただけだから」

「そう。なら、安心しました」

女の子は一つ心を落ち着ける。そして、また引き締めなおす。

「それで、昨日の事なんですけど」

「ああ、その事ならもういいんだ」

「えっ」

女の子は当然に驚く。この人は何でそんな楽観的な言葉を出しているんだ、と多少に気が抜けてしまいそうになるくらい。

「昨日の事について、さっき柴村さんと話をしてきたんだ。なんとか掲載は無しには

出来ないか、って。そしたら、実は向こうもそれについて考えてたところだったらしいんだ」

「どうしてですか」

「写真がね、うまく撮れてなかったみたいなんだ。昨日、帽子を被ってただろ。その

帽子の鍔のせいで、顔の鼻の辺りまでがうまく隠れてたんだ。

彼女は上から撮って

たし、君は伏し目がちになっていたから」

女の子は昨夜の自分を思い起こす。あの時、女性からいきなり写真を撮られた時の。

確かに、帽子は被っていた。ただ、そんなに伏し目がちになっていただろうか。でも、

写真がそうなっているならそうなのだろう。急な展開で、記憶も曖

昧になつてゐるのかも
しれない。

「柴村さんもそこに迷っていたんだ。無理やりにも掲載に持ち込むことも可能ではあるけど、正直そんなに望ましくはない。やっぱり、記者魂としては明確な記事を載せたいだろうから」

女の子の心はハラハラしていく。結果どうなったのか、男の言葉を喉から手が出るほど待ち望む。

「これは千載一遇の好機だと思った。こんな偶然のような展開、逃しちゃいけない。

だから、とにかく頼み込んだんだ。そうしたら、向こうも最後は折れてくれて。元々、

彼女とは知り合いだから、しょうがないなって感じで掲載は取り下げてくれた」

「本当ですか」

「ああ、代わりに高級フランス料理を奢る約束をさせられたけどね」

男が笑うと、女の子はよかったあと大きく気を抜いた。昨日から張り続けていたものがようやく剥がれてくれた心の軽量感に委ねていく。

無論、男の言葉の大部分は嘘だ。女性から昨夜の写真を見せられたが、女の子の顔ははつきりと写っている。それに、頼み込んだとしても女性の性格ならば無理にも掲載へ踏み込んでいたかもしれない。それ以上の見返りがなければ、取り止めになどしないだろう。言うまでもなく、高級フランス料理など奢りはしない。こちらも見返りのない事

はしない。

「ホント、どうしようかと思ってたんですよ。昨日とか、全然寝れなくて」

女の子は心の底から気を和らげていく。

「そんなに俺と載るのが嫌だった、とか」

「違いますってば」

「分かってるよ。いろいろあるからね、売り出し中のモデルは」

「運転手さあん」

「ごめんごめん、と電話越しに謝る。」

「これで疲れも取れただろう。今日はぐっすり休むといいよ」

「はい、運転手さんもね」

とにかくよかった。これで、あとは不動産会社のネタが真実であれば万事がまとまる。

おそらく、問題はないだろう。

その8（前書き）

登場人物

大田恵一・おおたけいいち（タクシードライバー、野望を携えて生きる野心家）

片柳彩子・かたやなぎあやこ（モデル、今どきの十代で分かりやすい性格）

久留米雀・くるめすずめ（女優、誰もが一目置く大物）

野木晃彦・のぎあきひこ（大田の学生時代の同級生、既婚で子供もいる世帯主）

柴村忍・しばむらしのぶ（週刊誌記者、久留米の連載を担当している）

亀谷右京・かめやうきょう（刑事、大田と過去に接してから後を追いつけている）

光村沙耶・みつむらさや（キャバクラ嬢、名の知れた有名店でナンバーツーを誇る）

その8

進展があつたのは、それから三週間後だつた。週刊誌の女性生活のトップ記事として、不動産会社の不当なサービス料の水増し、それによる多額の収入の流れの違法性を取り上げられていた。当然、一誌だけのスクープとなり、雑誌の売れ行きは前週までと比較になるようなものではなかつた。警察も動き出し、膿が出るのにその時間は掛からないだろう。

男はその日の夜、柴村忍と食事の待ち合わせをしていた。男の提供したネタが記事となり、大きな成功となつた事で女性は御馳走したいと気を良くしていた。片柳彩子との写真のネガも渡してもらえることになり、男は無論にそちらをメイソンとして約束を了承する。

二十時過ぎ、男は待ち合わせ場所の居酒屋に到着する。とことん飲みたい気分だから、という女性の意見でここに決まつた。男が席に通されると、女性は既に一杯目を飲みだしていた。どうやら、スクープを上げられた事に対して、相当心を持ち上げられているようだ。

「まあ、今日は飲もうじゃないの」
女性のテンションの高さに、男も程よく着いていく。このまま気

分をよくさせておき、

ネガさえ取り戻せば用は終わりだ。

女性はスクープによって周囲から多くの賞賛を得たようだ。ただ、本人的には自分が

撮ったもので勝ち取りたかったのが本音だったともぼやく。そんな喜びと羨みの話を男は適当に聞いていく。

女性からネタの出元をまた問い質されたが、真実は避ける。社員の話が間接的に自分のところまで伝わったと逃げておく。

女性の飲みのピッチは早かった。ビールに焼酎と実に親父くさくアルコールを流し

込むように体に入れていく。しかし、その割に酔いの回りはさほどでもなかった。どう

やら、元々酒には強いようだ。頬は赤みがかかり、目は細くなってきた、絡むような言葉

が多くなっているが、そこからが長かった。さつさと用事だけ済ませて帰りたい男からしたら、面倒な酔い方といえる。

結局、女性は三時間以上そこで飲み続け、タクシーで帰宅した頃には日を跨ぐ手前にな

っていた。女性は中々に酔っていたが、それでも一人で歩いていられる程度に正気は

保っている。男は自宅にあるというネガを貰うために着いていき、女性の部屋まで入っ

ていく。部屋の印象はいたって年相応なシンプルなものといえた。無理もしてないし、

無駄もない。

女性はリビングに荷物を置くと、台所で酔いを醒ますための水を飲む。そして、男に

ちょっと待っててと言置き、玄関近くの部屋へ入っていく。一分ほどで女性は部屋から出てきた。右手にはネガが持たれている。

「はい。どうせ廃棄するんだから、まんまでいいでしょ」

そう女性はネガを裸のままに渡す。ようやく手元にやってきた成果に男は安堵の息をつく。

「確かに。それじゃあ、僕は失礼します」

踵を返し、玄関へ向かう。靴を履き、外へ出ようとドアのノブに手を掛けると後ろから温もりが被さった。正気なのか、酔っているのか、女性は男の背中をしつかりと抱きしめる。

「何の真似ですか」

酔いか否か、どちらにしろ強い態度で制すべきだとして男は低めの声を送る。ネガはもうこちらの手にあるのだから、何も怯むことはない。

「もうちょっとここにいてよ」

さつきまでよりも小さい声で呟く。女性なりの甘えを出しているのだろうが、そんな

ことで男はたじろいだりしない。元より、今まで敵対に近い関係でいたのに急に真裏を見せてくれる方がおかしい。

「酔ってるみたいですね。もう休んだ方がいい」

腹の辺りにある女性の両腕を解き、ゆっくりと降ろす。

「僕は片柳彩子さんとの写真をあなたに撮られ、それと引き換えに違法性のある会社

のネタを提供した。互いの持つ情報を交換し、あなたは成功を得て、僕も自らを保った。

それで終わりです。これからは、また久留米雀の連載を通しての付

き合いに戻るだけなんです」

「戻らせないわよ、そんなの」

「あなたが何を言おうとそうなるんです。交換条件は成立したんだ」

そう諭し、男は余裕を保ちながら帰ろうとする。そこに、女性の不可解な言葉が突きつけられる。

「それはあなたと片柳彩子さんの写真でしょ」

男は言葉の奥に疑いを抱き、振り返る。女性は酔いを少し浮かべたままの状態で笑みを零す。

「どういうことだ」

「さあ、どういうことでしょう」

「とぼけるな。言いたいことがあるなら言え」

男の目は鋭くなっていく。状況が変化しそうな予感がこれでもかと襲ってくる。女性

は先程ネガを取りに行った部屋へと入り、今度は数枚の写真を手にして出てきた。はい、とそれを男の方へ向けて差し出す。一目した瞬間に自らに覆い掛かる危機を判別することが出来た。

「どうして、これが……」

男は崩れ落ちそうになるのをやっとの思いで堪える。女性が差し出してきたのは、男の住むマンションへと入っていく久留米雀との写真だった。無論、その後に二人の行為は行われている。

そんなこと有るはずがない。そう男は現実を否定する。男に受け入れられる許容範囲

をその写真は超えてしまっていたから。

「ダメじゃないの。あんなかわいい子がいるのに、こんな熟女にまで手を出しちゃうなんて」

ねえ、と女性は余裕たつぷりに言葉を投げる。形勢がどう傾いてるか、など一目瞭然だった。

「それも、自分がマネージメントしてるタレントさんになんてねえ。大田くんも中々やり手なこと」

ククツと笑う女性の表情がいやに鼻についた。だが、それ以上に頭に蠢く疑問が多すぎる。

片柳彩子との写真が撮られてから三週間、久留米雀との行為の後には最善の注意を払ってきたつもりだ。余程の腕を持つ探偵のレベルでもない限り、隙を取られるような事はない。一体、どうやって。

「いつ、これを」

正常を保とうとしているが、おそらく無理だろう。眼光も表情も気も震えてしまっているに違いない。

「これなら、あなたと片柳彩子さんとの写真を撮る前日のものよ」まさか、と思った。まさか、片柳彩子との写真よりも前に撮られていたなんて思いもしなかったから。男に不穏な気配を感じ、追っていった結果に女の子との現場が押さえられたものだと思込んだ時にはもうこの写真は存在していたのだ。あの時にはすでに尻尾を踏まれていたんだ。

それならば、どうして最初からこの写真を使ってこなかったんだ。何故、後から出て

きた女の子との写真を先に載せようとしたんだ。

「どうして、それを今まで隠してたんだ」

「そうね。それはそうよね。こんな絶好の写真を撮っというて使わないなんておかしいもんねえ」

男は絶壁に命綱も無しにしがみついている感覚でいた。あと一つの衝撃でも加われれば、底にまで落とされる状態。

「簡単に言つと、慎重にいきたかったの。前にあなたに言ったことあるけど、あなた

の前にいた運転手と久留米さんの関係を怪しんでたのよ。証拠を掴んでやるうと思つて

たけど、その前に運転手が辞めちゃつて。その後にあなたが入ってきた時、なんとなく

似てるタイプだったからもしかして思つたわ。しかも、運転手からマネージャーにま

で出世しちゃつて。疑つてゐる人間からしたら、怪しいったらないわ。そこで真剣に探つ

てみたら見事にこんな写真が撮れたつてわけ」

強い言葉を繰り返し、女性は一つ一つと男の上手に立っていく。

「これを撮つた時は嬉しかったわ。これだけのスクープは初めてだからね。だから、

もっと奥まで調べてみたくなつたの。そもそも、あなたはこういう人間なのかつてね。

仕事場だと二人は全くその関係性を出さなかったから、プライバシーを探るしかない。

そう思つて、あなたを着けてみたらいきなり片柳彩子さんとの写真が撮れちゃつたの。

二日続けて私にスクープが舞い込んできたけど、片柳さんの方についてはおあなたに写真の存在がバレているから早くに処理する必要があった。だから、あつちを先に載せようとしたのよ」

それも結果よかったのかもしれない、と女性は言い零す。

「片柳さんの写真と引き換えに、あなたは大きなネタを差し出した。どこで手に

入れてきたのかは分からないけど、私も記者としてあなたの提供するネタには興味あつたから乗ることにした。一つスクープが消えることになるのは悔しいけれど、もう一つ

私には武器があるんだからいいと納得したわ。第一、あなたは良い武器を持ってたのに

使ってしまったから、おそらくあれ以上のものはもう無いはず。余計な邪魔が入らず、

今回はスクープを載せることだけに専念できるわ」

男は完全に女性にやられてしまった。二つ目の爆弾があるとも思わず、目先の爆弾の解除に回路を奪われていた。しかも、厄介なことに二つ目の方が一つ目より遥かにタチが悪い。

「それとも、まだ提供できるネタがあるのかしら」

そう言いながら、女性は男に寄り添ってくる。男にはそれを跳ね返すだけの術はなかった。

「久留米さんがアリなら、当然私もアリよね」

女性は男に唇をつける。そのまま、女性に導かれるままに寝室へと向かい、ベッドで行為におよんだ。

「一度、これだけ良い男を抱いてみたかったのよ」

男は抵抗を諦めた。形勢は女性に傾いている。返しようのない事実を突きつけられ、
為すべき反抗は見当たらない。せめて、この場で出来ることといったら、女性の気性を
少しでも和らげるように務めるだけ。そんな些細といえる思いだけで、男は女性と体で
繋がった。

柴村忍から逆転の一手を出され、男は心の芯が抜けたようになってた。あの写真の掲載
を防ぐのは無理に近い、と判断したから。諦めたくはないが、再逆
転をするだけの対象
もない。

「もし、またネタがあるようなら五日以内に言ってきてね」

朝、女性の部屋を後にする時に言われた言葉だ。五日は来週号の
発売に間に合わせる
までの時間だろう。だが、男にはそれだけのネタは持ち合わせてい
ない。女性もそうで
あることを見越して言っている。

光村沙耶なら多少のネタは握ってるだろうが、あの写真に勝るだ
けのものは持つてな
いだろう。女の口からも、それだけの話は聞いたことがない。

久留米雀に話すべきなのか。それでも、女に記事を揉み消すだけ
の力はないだろう。

女性の覚悟は決まっていた。あの写真を載せることにより、女の連
載はなくなり、女と
女性との関係も消え去る。それは決心の上、記者生命にかけて仕事
をやり切るつもりで
いる。

どうすればいいのか。何か方法はないのだろうか。男はただそればかりを頭に巡らせ
ていく。仕事や会話も表面上を繕うだけの形式的なことしか出来なかった。誰の助けを
借りはせず、三日三晩無いであろう一手を考える。考えつくし、無いことに行き着く。
その繰り返し、どん底から這い上がるとしてはまた叩き付けられる。段々と心が病み
だしていくのが分かった。結果、男が出した答えはいつかの時に置いてきたはずの凶気
だった。

無論、そんなことをして生まれるリスクもある。何度か振り払おうとしては生まれて
くる、その連続。もうそれしかない、男は腹を括る覚悟をした。あんな記事のために、
これまでの計画を棒に振るわけにはいかない。あんな女性のために、俺が灰になるわけ
にはいかない。

男は携帯を手に取り、半年ぶりにその番号に連絡を入れる。こんなに短いインターバ
ルで電話するのは久しぶりだろう。

「もしもし」

「もしもし。どうした」

野木晃彦の軽めの口調は重くなった男の心を幾分か持ち上げてくれた。青春期の声変

わりによって低くなっていく声音の変化は男性にはさほど表れなかった。それが良いの
か悪いのかはどうでもいい。

「半年ぶりか」

「ああ、そんなになるかな。何かあったのか」

何かはあったが、それが何かは言いはしない。男性は男の過去を知っているが、未来まで教える気はない。

「実は、また帰ろうと思ってるんだ」

「なんだ、帰ってくるのか。いやに早いな」

「ああ。それで、一番最近の休日がいつか聞きたい」

「休日か。仕事の日でも全然時間なら開けられるけど」

半年前の時のように、男は二年から三年に一度のペースで故郷に帰っている。それに

比べると、今回のタイミングに男性が違和感を覚えるのは普通といえる。適当に流して

しまえばいいだけだが。

「いや、できれば一日空けてもらえるとありがたい」

「そうか。なら、明後日が休日になってるけど」

「空けられるか」

「まあ、別に家族とどこ行かつて話もないから大丈夫だと思う」

分かった、と男は口元を締める。それから当日のスケジュールの話を詰めていき、

五分ほどで電話を切った。

一つ目の計画の段に昇り、気持ちばかりの充足感を得られた。久方ぶりといえる満足

だった。で心はずいぶんと落ち着けられていく。緩んだ思いのまま、男は片柳彩子へと電話を掛けた。

翌日は久留米雀の仕事がなく、男も休日となっていた。朝、目が覚めると並々ならぬ
圧迫感に苛まれる。今日為すべき行為を考えると、睡眠もぶつ切りのような一時ずつのものにしかならなかった。

その前に、男は片柳彩子と約束をしていた。会いたいと言うと、女の子は仕事が早め

に終わるからと十五時に待ち合わせをすることになった。この心が深く侵されてしまう

前に、普通に会っておきたくて。

待ち合わせ場所の渋谷に女の子は数分遅れで来た。ごめんなさいと謝られ、仕事なん

だから仕方ないよと宥めた。仕事終わりで多く提げていた荷物をトランクに入れ、車を走らせていく。

「なんか、こんな明るいつ時から会つの久しぶりですね」

「ああ、そうだね」

男が転職してから約半年、二人は夜にしか会っていない。男には久留米雀に蝕まれた

精神を癒やすため、女の子には週に一度ほどの待ち望んだ時間として。昼間に会ったの

は、男がタクシードライバーをしていた頃の乗客と運転手としての関係以来になる。今

日はいつもより長く一緒にいられる。そう思うと、自然に女の子は顔が綻んでいくのが分かった。

その後は、映画を観て、アミューズメントパークでゲームをして、夕食を食べて、車

でドライブをした。映画は女の子が観たがっていたファンタジーものを選んだ。ヒット

シリーズ作だったので気兼ねなく楽しめるものだったが、男は心情的にそうもいかなか

った。アミューズメントパークではボウリングとバッティングセクターとメダルゲーム

をした。ボウリングでは前回と同じく三十ピンほどの差をつけて女

の子が勝ち、バツテ
 イングセクターでは逆に空振りばかりの女の子を余所目にし、男は
 邪心を振り払うよう
 に打ちまくる。夕食はパスタシヨップに行き、女の子は茄子とベー
 コンのトマトソース、
 男は豚肉とキノコの醤油ソースを頼んだ。話が弾んだので、デザー
 トでパンナコッタも
 食べた。

夕食終わりに車に戻ろうと歩いていると、女の子がふと足を止める。ここ入っている。ここ入っている。ジュエリーショップに寄った。店内は光沢に満ちていて、輝いている。

これから自分の嵌る世界とは真逆の空間で、異世界に足を踏み入れた霧困気にさえ駆ら

れた。その中で、女の子は目を輝かせながらケースの中にあるジュエリーを見ていく。

男は特に惹かれはせず、ただ女の子の後ろを着いていった。

「運転手さん、お願いしていいですか」

店内を一周し終わると、女の子が両手を合わせて希求してくる。

ここでどんなお願い

をされるかは予想しえたが。

「何かな」

「安いやつでいいんで、お揃いの買ってくださいませんか」

「お揃い」

「はい」

お揃いまでは予想していなかった。同じ物を身につけていたい、という願望なのだろうが。

「あんまりアクセサリーの類はしたことがないなあ」

女の子は萎んだ瞳を見せる。それに眩んだわけじゃないが、眩んだフリをすることにした。

「分かったよ。そこまで頼まれたら応えるしかないね」

「ホントですか」

女の子は表情が一気に晴れた。小さくガッツポーズをし、喜びに明ける。

ペアリングは女の子が選んだ三万円のシルバーのものを買った。

車に戻ってから、

梱包された提げ物を男は後部座席に置いたが、女の子は両手に抱えていた。

「大事にします、絶対」

「そう言ってくれるとプレゼントした甲斐があるよ」

女の子はふやけるように笑った。言葉だけの感情でないのはよく伝わってくる。実際、

前にプレゼントしたヒヨコのぬいぐるみも大切にしているようだ。

女の子のブログにも

数回出てきてるのも見ている。

車を走らせ、ドライブをしながら向かったのは海景色の見える場所だった。男は決意

に揺らぎそうになると、こういったところを訪れる。夜景を眺めていると、心を奮わさ

れる。闇に浮かぶ光に己を重ね、葛藤の促進と沈静を同時に行う。

左隣で女の子が綺麗

ですねと浸っているが、男にはもっと別の感情が増している。女の子の知らない

裏の感情が。

「運転手さん、これをはめてもらっていいですか」

そう女の子は先程購入した指輪の提げ物を見せてくる。

「ああ、いいよ」

梱包を解き、中にある指輪を取り出すとゆっくり女の子の薬指に通した。初めて薬指

にはまった指輪を眺め、女の子は感慨深そうに微笑む。同じように、女の子は男の薬指

にも指輪を通した。男も女の子に似た反応を繕う。男には既に表面と裏側の思いが共存しだしている。

「綺麗ですね」

女の子は自らの左手の薬指と男の左手の薬指を合わせ、互いの指輪を触れ合わせる。

その光沢を通し、先にある夜景を映す。とてもロマンチックな感情に浸れ、それは全く恥ずかしいとは思わなかった。

横にある男の顔を覗く。男の顔もこちらへと向く。女の子の感情は確かになる。この

想いに間違いはない。そう決し、静かに目を閉じる。少しすると、唇に柔らかい感触が

被さってきた。薬指を絡めたまま、幸福に身を委ねていく。この時間がいつまでも続いてくれれば、と思いながら。

帰りの車の中は無言の空間が続いた。車内に広がっている清福に浸っていたくて、意

図的にそうしていた。自宅まで送り届けると、女の子はおやすみなさいと満ち足りた表

情で車を後にしていく。男は女の子の姿がなくなるのを見届け、胸に手をあてる。車中

のありつたけの正気を吸い込む。この体が悪魔に汚染されてしまわぬように。男は複雑

な心中を抱え、瞳を暴化させる。時は来た。

時間は二十三時になろうとしていた。車は柴村忍の自宅マンションの駐車場に停め、誰の存在もないことを確かめながら女性の部屋へと向かう。予め連絡は入れておいたので、インターホンを鳴らすと女性はすぐに反応した。部屋へ入っていく。意識は雑にならないよう、極力に保つ事を心掛けている。何か飲み物でもと聞かれたが、何もいらないと断った。

「さて、何か面白いネタでも見つかったのかな」

久留米雀とのスキャンダル記事に代わるネタなどない。掲載を防げる方法も見つからなかった。女性もそうであろうと踏んだ上で話している。形成は完全に敗北に向けての一直線を辿っていた。

話したい事がある、と男は女性に電話を入れていた。女性は男がきつと土下座まがいの陳謝でもしてくるんじゃないかと予想していたが、男の決断はもつと別の道に行き着いていた。女性の思考では辿り着かない場所にある結論に。男には、女性が見ているものよりも更に奥の感情が存在していたのだ。

「いえ、あの記事の掲載をなんとか無しにしてもらいたいかなと思って」

そう男は頭を下げる。最後の選択肢を女性に投げ掛けた。相手はそんな裏がある言葉だとは思えないだろうが。

「無理に決まってるでしょ、そんなの。もう原稿も仕上がってるんだし。あなたと久留米さんには悪いけれど、あとは明日になったら上に見せるだけよ。」

みんな驚くでしょうね。まさか、私が二週も連続でスクープを出してくるなんて思ってもいないでしょうから」

女性の頭にはもう未来図が完成されている。この後の男の無念さを押し出した表情、感嘆の声を上げる同僚たち、邪な感情で雑誌を見開く市民たち、自分へと舞い込む賞賛。

どれもが快感を与えてくれるに違いない。自分にこれから人生一の頂点期が訪れようとしているのだ。

「ごめんなさいね。こっちも記者として、おいしいネタは載せなきゃいけないのよ」

「もう、こっちには何の手立てもないということか」

「まあね。でも、あなたが一生私のモノになってくれるなら考えてもいいかも」

挑発的に女性は投げる。そんなこと、男がするはずがないと分かりながら意図的に。

一生をこの女性のためにフイにするなど有り得ない。こんな低等な関係を続けられなど

しない。こんなプラスのない、マイナスだけの関係なんて耐えられない。精神が持ちこたえられない。

男は齒を軋ませ、悔しがる。女性はそれを見て、思わず声を出して笑った。上位にいる人間が下位にいる人間に対して浮かべる笑い、それが男の理性の幅を振り切る扉を開錠させた。

瞬間で男は目を据わらせ、女性を睨みつける。女性はすぐにその異変に気づいたが、

時は遅い。男は女性へ歩み寄り、何度と思いきり蹴りつけた。ケースから革手袋を取り出して着けると、女性の髪をグツと掴んで床へ叩きつける。息が荒くなってきた女性は

この場から逃げようとするが、すでに男の影は女性の体に被さっていた。恐る恐る後ろ

に顔を向けると、男はダイニングの椅子を上には振りかぶっている。

「やめて……」

微かに搾り出した声は男の耳に入ることなく消えてしまう。男は椅子を女性の背中に叩きつけ、部屋に木材の衝撃と人間の悲鳴が響く。椅子は雑に床に倒れ、女性はあまり

の苦痛に声にならない声をあげて転がる。男はケースからロープを取り出し、女性の視

界に入れる。女性は声を止め、涙を流し、言葉の代わりに首を横に振り続けた。どうか

止めてください、という命乞いとして。ただ、その思いは男の鬼気の制止に繋がることはない。

「原因を作ったのはお前だ。責任を取るのもお前だ」

最後の抵抗で女性はなりふり構わず暴れ狂う。だが、立てないほどの痛みを負ってし

まっている女性の底力では大したものにはなれない。男は女性の顔や腹を殴りつけて戦

意を喪失させ、ロープを首に巻く。

「記者なんて人の恨みを買ってナンボだろ。恨むんなら、自分を恨むんだな」

ロープを引き、思いきり力を込める。女性も必死に抗うが、もはや無力でしかない。

反発する力が衰えていき、下にかかる重力が増していく。なおも、

男は女性の息の根が止まるまで腕の力を込め続けた。

抵抗する全ての感触が無くなると、男はロープを緩める。女性の体は崩れ落ち、男はその場に尻餅をつく。息を切らしながら、女性に近づく。心臓と脈の動きを確かめる。

どちらも動いていなかった。自分はまた殺人を犯した。そう現実が全身へと行き渡り、様々な感情にやられてしまいそうになる。

でも、男にはそればかりに浸っている時間はなかった。すぐに立ち上がり、各部屋の捜査を始める。久留米雀との写真とネガを探し、男は家中を荒らしまくった。対象の物は最初に目をつけていた、玄関側の部屋で見つかった。それらをケースに仕舞い、部屋を後にする。誰にも見つからないように慎重に行動し、駐車場の車で外の世界へと脱出した。

家に帰るまでは夢中だった。興奮状態が続いていたので、何も考えないようにと心掛けた。

自宅マンションへ到着し、ベッドに倒れ込むとようやく成功を噛みしめる余裕に着いた。口角からとめどなく溢れ出していく不適な笑みはいつまでも絶えることはなかった。

その9（前書き）

登場人物

大田恵一・おおたけいいち（タクシードライバー、野望を携えて生きる野心家）

片柳彩子・かたやなぎあやこ（モデル、今どきの十代で分かりやすい性格）

久留米雀・くるめすずめ（女優、誰もが一目置く大物）

野木晃彦・のぎあきひこ（大田の学生時代の同級生、既婚で子供もいる世帯主）

柴村忍・しばむらしのぶ（週刊誌記者、久留米の連載を担当している）

亀谷右京・かめやうきょう（刑事、大田と過去に接してから後を追いつけている）

光村沙耶・みつむらさや（キャバクラ嬢、名の知れた有名店でナンバーツーを誇る）

その9

翌日、男は新幹線にいた。今日の仕事は休暇を取り、朝早くから家を出た。移りゆく

景色の中で、男は多様な感情を募らせていく。その中心にあるのは、当然に昨日の己の

凶気だった。あの時、一体どんな顔を自分はしていただろう。同時に、柴村忍の悲惨な

表情も頭から離れようとしな。あの時、女性にはどう自分が映っていただろう。正解

は見つかりやしない。女性はまだ口を開く事はないのだから。かといって、この記憶が

脳内から忘れ去られることもないのだろう。この先も携えていかなければならない記憶、

それが俺に与えられた罰だ。

正午過ぎ、男は徳島に到着した。約半年ぶりの故郷だったが、目新しい変化は見られ

ない。長閑な雰囲気は人間の気にも表れている。この空気が自分には合っている。正直、

昨日の罪事で腐りかけていた心を和らげるにはもってこいの環境といえた。

駅の改札を抜けると、外にはすでに野木晃彦の姿があった。三十分前に連絡を入れて

おいたので、前もって来ていたようだ。

「久しぶり」

「ああ、久しぶり」

毎度の調子の低い挨拶を交わす。たまに会う程度の旧知の間柄、

その瞬間に当時の関係へ戻ることが出来る。大抵は子供の頃の活発な状態になるのだろうが、男と男性の関係は違った。大人しく落ち着いた状態、それが子供時代からのものと思えば乾いた間柄といえる。

「ずいぶんな荷物だな」

男が引いてきたのは青のスーツケースだった。日帰りの荷物としては確かに気には掛かる。

「いや、お土産を大量に頼まれてるんだ。無理言って休みにしてもらったから、断りきれなかった」

「ふうん、そうか」

それ以上の話にはならず、道に停めてあつた男性の車に移動し、トランクにスーツケースを入れる。これまでの帰省時と同様に男は後部座席に乗り、男性の運転で車は動いていく。車内では軽い会話はいくつか交わすが、どれも内容に乏しく長くは続かない。

半年前に妊娠したと聞いていた男性の奥さんはもう間もなく出産になるようだが、そんなことは男には関係ない。男としては昨夜の記憶がまだ鮮明に残っている。

ので、それぐ

らいの程度の方が気が掛からなくてよかったが。飯屋にでも寄るか

と聞かれたが、九時過ぎに朝食を摂ったからいいと言い、車はどこにも立ち寄らずに目的地へと進んでいった。

目的地は吉野川流域のキャンプ地だった。帰省時には必ず自らの

軌跡の巡りとして寄る場所だが、今日は滞在として訪れた。暑さこそあったが、風も爽快に吹いていたので心地悪さはない。

「じゃあ、五時前には戻ってくるから」

「ああ、分かった」

到着してからは自由行動になった。男の帰り時間までの四時間前後をそれぞれに過ごしていく。男性は川で釣り、男は付近の自然の中で散歩と休息をすることに決めていた。だが、男の提示は建て前だった。男性にはそう言って消えれば、四時間は誰の気も止まらないで済む。

男は釣りの地点に向かった男性の後を追ひ、取りたい荷物があるからと車の鍵を借り、車に戻るとスーツケースごと取り出し、鍵を閉める。すでに釣りの地点に着いていた男性に鍵を返すと、男は大荷物を手に歩き出した。人目には絶対に触れないように極力の注意をし、人気すらない高地の森へと入っていく。道中、何度と左右に視線を向け、何度もうるを振り返る。誰の視界も届いてはいないことを確認し、暗がりの奥へと歩みを進めていく。

懐かしい感覚があった。景色、香り、匂い、音、風、土、どれもこれもが意識を幼い頃へと戻してくれる。小さい頃にはよくこの森に来ていた。他人と群れることはせず、自意識の中へ治まり、周囲とは違うことをするのに自らを見い出していた孤独な少年。

少年はいつも自然の集まるこの場所へ来ては、独りきりでいる時間と空間を特別なもの

としていた。ここに来れば、日々の喧騒や戯言も消化させることが出来る。ここは少年における聖域だった。

少年は大人になり、同じ場所を歩いている。体は大きくなり、心は荒んでしまったが、あの頃感覚を忘れてはいない。あの頃の自分が一番純粋に自分らしくいたはずだから。

金だの復讐だの野望だのは一切なく、ただ自己の世界にいたいことだけに幸せを感じていたのだから。出来ることなら、あの頃に戻りたい。あのまま、あの心を抱えたままで大人になりたい。ずっとずっと、独りきりでいたい。そう心を潤わせながら、男は歩いていく。

ふと我に返ると、それなりの距離を進んできていた。少なくとも、スニーカーを手引いてくるような場所ではない。誰の視界にも入らないし、誰が来ることもまずない。

周りには木々が無造作に生え並び、その間を冷感のある風が吹き通り、草花が日の陰で小さくも力強く育っている。それが快い。ここでいいだろう。そう定め、男は息を一つついた。

スニーカーを開き、中に入れておいた伸縮の自由がきく作業用タイプのシャベルを取り出す。それを目の前の地面へ突き刺し、土を掘り起こす。その繰り返し、シャベルを地面に突き刺し、土を掘り起こすだけの作業を続けた。五分、十

分、三十分、一時間、
二時間、三時間、男はただそれだけの作業を一心不乱に続ける。息が切れているのも、腕の力が減っていくのも、空腹であることさえも忘れていた。ただただ、穴を深く掘っていく。

三時間が過ぎ、男は腕を止める。成果を改めて見直してみる。これだけの深さがあればいいだろう。男はスツケースから黒のポリエチレン袋を出し、力いっぱい穴の奥へと投げ入れる。重さのある黒袋は鈍い音を出して穴に落ちた。これでおさらばだ、と心の中から穴の奥へ言葉を送る。またシャベルを掴むと、掘り起こしてきた土を穴の中へと埋めていった。

「どうだ、成果の方は」

「おお、戻ってきたか」

有言の通りに十七時前に男はキャンプ地まで帰ってきた。男性は四時間を釣りにだけ費やしたようで、数匹の結果には繋がったらしい。出した荷物だけ仕舞ってくるからと車の鍵を再び借り、男性が釣り道具をまとめて戻ってくる前にスツケースをトランクに詰め込んだ。

帰りも男性の運転で、男は後部座席に乗った。相変わらずに会話はありきたりで乾いていたが、男にはそれでよかった。飯屋に寄るかと思われたが、電車の時間が迫ったのでいいと断る。

駅に着くと、往路よりも格段に軽くなったスツケースの扱いが

楽になった。往路は
重い荷物なのに軽いとする演技をする必要があったため、普通の対
応でよいのでやりや
すい。

「そういえば、今日はどうしたんだ」

今頃聞くのもなんだけど、と後付けが入る。

「どうした、って何が」

「いや、急に帰ってくるとか言い出したからさ。東京で仕事でな
んかあったんかなあ
とか思つて」

仕事でミスをして傷心、とでも思つたのだろうか。あいにく、そ
んな低度のところになどいない。

「まあ、そんなところかな。でも、今日のでリフレッシュできた
よ。ありがとう」

「そうか、そんならよかった」

リフレッシュなんかしてるわけがない。一生ものの傷が増えたん
だ。そう簡単に癒え
るはずがない。

「じゃ」

「ああ、そんじゃあな」

また連絡でもする、とも言つことなく二人は別れた。この関係に
はそんな一般的な形
式は当たらない。連絡など、滅多なことでもなければしやしない。
それでも成立してし
まう関係なのだ。

帰りの新幹線で、男はようやく食事に有り付く。昨夜から続いた
体内の乱雑を一応に
落ち着けることができたが、その末に辿り着いたのはこれまでより
もさらに深い闇の中

だった。

翌日は朝から仕事だった。久留米雀が出演する二時間ドラマの撮影に同行し、昨日の休暇の謝罪を取り巻きのスタッフへしていく。昨日の動向については、友人の結婚式に出席していた事にしてある。あとは、適当に相手ごとに細かい嘘をついておけばいいだけだ。

この日は一日中、女の撮影現場にいた。ドラマの内容は、憎悪の果てに犯された殺人事件に対する真相究明という二時間ドラマにはよくある話だ。自分が視聴者の立場なら、間違いないチャンネルは他に回すだろう。

撮影の様子を見届けながら、男は自らをそこへ当て嵌めた。憎悪の果ての殺人、そこに己を重ねるのは容易だった。自分を失わないために犯した罪、そこにはどれほどの意味があるんだろうか。分からない。ただ、短絡的な考えじゃないのは確かだった。自身自身を無意味にさせないこと、それは人間として必要不可欠なものだ。それを否定するのなら、もはや死ぬしかない。でも、俺は違う。だから、やった俺は俺自身を見捨てたりはできない。

昼休憩が入り、午後の撮影に入る直前に携帯に電話が入る。妥当に適する対応をし、電話を切る。

「誰からかしら」
漏れていた言葉を聞き拾っていた女に訊かれる。確認はしておく

べき会話の内容だったから。

「女性生活の方からです」

「柴村さんじゃなくて」

「はい、違う方でした」

それはそうだろう。柴村忍から連絡が入ることは金輪際ない。

「どういう話だったの」

「いえ、実は……」

男は言葉をあぐねる。当然、演技として。

「どうかしたの」

「柴村さんの行方が分からなくなった、って」

男は息をついてから言葉を出した。何も知らないはずの人間からすれば、これから仕

事に向かう女性に言うのはためらうものだろうから。それでも、黙っておくべきレベルの内容ではない。

「どういうこと」

「昨日、仕事を無断欠勤したらしくて。連絡をしても繋がらなかったけど、その日は

そこまで大事になるとは思ってなかったからそのままにしたそうです。でも、今日も連

絡が取れなくて、会社の人が自宅に行ってみたら誰もいなかったみたいで。実家や仕事

関係をあたってみても、一向に足取りがつかめないそうです」

女は驚きを見せていたが、そうとポツリと零しただけで表情を曇らせる。結局、何も

ないまま撮影現場へと戻っていった。心配をしてるのだろうが、そんな必要はないと

言ってやりたい。あいつはあなたを裏切った、その制裁を受けただけだ、と言ってやり

たい。

翌日、柴村忍の両親から警察へ搜索願が提出された。失踪の前日までは通常に仕事をこなしていた、信頼もあつて真面目な性格、友人関係や恋人関係でのトラブルは今まで一度もない、などの生活状況が考慮されたため、特異家出人として搜索活動が行われることに決まった。

とはいえ、手掛かりとなる情報は非常に少ない。事件や事故へと繋がる可能性が低い人間だからこそ、その線を見つけるのは困難となる。ただ、唯一に線へと導かれそうだと思うのは女性の職業だ。週刊誌の記者となれば、怨恨を向けられることはあるのではないだろうか。そこを主線とし、過去に女性が担当した記事のネタを次々に洗い出していく。しかし、十数年の記者生活の記事の総数から割り出す作業はまた困難にしかならない。それでも、搜索側はそこに焦点を絞り、女性を捜していた。それが意味のない作業と知らずに。

久留米雀との写真は廃棄され、世に出回る事はない。片柳彩子との写真も廃棄され、誰の目に止まる事もない。どちらも女性が記事を他人に触れさせる前に対処したため、男と女性以外の人間がそれを知ることはない。つまり、警察が男へと行き着く術は限りなく無いに等しいといえる。安心とまで気を緩めはしないが、ひとまず気を難しくさせ

ておく段階は越えただろう。

これで事件は闇に葬られる、そう煙に巻いた思いでいる男の予測の外で危険信号が点滅していた。いつでも可動が可能な状態で待ち構えている者がその動きを始めようとしている。亀谷右京、男もその存在には気づいている。だが、自分に辿り着くことはないだろうと踏んでいた。むしろ、ここまで来れるものなら来てみるという挑発的な思いもあった。

その一週間後、亀谷右京に衝撃が走った。男の足跡を追い続けたきた彼がその異変を察知したのだ。久留米雀との不謹慎な関係に疑問を抱いてから、彼は女についての調査を開始した。個人的な意向のため、通常の仕事とは重ならないように進めていかなければならず、その分だけ時間も掛かったがある程度の面については把握する事ができた。当然に女優として作品を通しての女は知っていたが、それ以外の個人としての詳細部分の情報を。

そうしているうちに、一人の女性の名前が目映り込んできた。柴村忍、特異家出人として搜索が始められた女性だ。名前を目にしたのはたまたまたが、見覚えのある字だと気には掛かった。そして、女の調査をしている時に再びその名前を目にすることになる。柴村忍、女が連載を持っている週刊誌の担当者だ。その女性がなぜ搜索される

ことになったんだ。彼はすぐに女性の搜索の担当の人間に経緯を聞きに行く。不審とも

捉えられる失踪、意図的な何かが動いている可能性がそこにはあった。彼の頭には大田

恵一の顔が浮かんでいく。

男は女の運転手として勤務していたが、いつからか女のマネージャーとなっていた。

どうしてそうなったかは分からないが、おかしいと思わざるを得ない。これまで運転手

だけをしてきた人間を急にマネージャーになどするのだろうか。会社に例えるならば、

昨日まで社長の運転手をしていた人間が今日から秘書をするようなものだ。疑いを抱く

のはなんら変わったことじゃない。自分の側に置いておきたい、という女の思いなのだ

だろうか。だとしたら、あの二人は完全に異質な関係にある。女の支配欲も相当なものと

いえるが、男の欲もそれに劣らぬものといえるだろう。

男と柴村忍には繋がりがある。女と女性が仕事をする場に、マネージャーとして同席

はしているだろう。女と女性は仲が良く、仕事以外でも交流があったらしい。そこにも

男の姿があつたりしたのだろうか。女を介し、女性と交流があつたりしたのだろうか。

その先に、何かトラブルがあつたのではないだろうか。そううまく話がいくはずはない

と思うが、あの男の事とすると可能性は無いとは言いきれない。あの時の男の瞳を思い起こすと。

その日の夜中、男は久留米雀の体を抱いていた。もう、何度この細く弱々しい老体を包んできただろう。もはや、感情は大きく崩れ去り、慣れすら生まれてしまっている。

こんなことに慣れが生じるのは危機感が募らなければならないことなのだろうが、この先も続けていくにはそれぐらいに心を枯れさせてしまう必要もある。正常でなど、いられるはずはない。

「柴村さん、どうなってしまったのかしら」

行為の後、女が独り言のように呟く。女は女性の事を気に掛けていた。女性の失踪か

ら一週間以上が過ぎるが、一向に発見される気配はない。仲が良かった女からすれば、気掛かりなのは当然だろう。だが、事実を知っている男には裏切られてる女の惨めさも濃く映ってくる。

「無事を信じたいですけど。ただ、これだけ時間が経っても音沙汰がないと、何かの揉め事に巻き込まれた事も考えられるかもしれません。仕事柄、恨みは買いやすいでしょうし」

男の言葉に、女は無言で息をつく。女も心配は続けているが、さすがに事件や事故が絡んできている可能性も示唆されてくる。最悪の事態も何回かは考えてしまい、頭を悩ませた。

翌朝、仕事が休日なので女を自宅まで送り届け、男はそのまま車で渋谷に向かった。夜中まで賑わいを見せている中心街も、朝となると静けさに覆われ

ている。人もまばらにしかおらず、店も閉まっており、ここが日本の中心地区である事を忘れそうになる。

逆に、これだけ熱のある街が冷えている状態の中にいるというのも気持ちはいい。贅沢な気分ですらなれる。

そんな安息にいられるのはこの時だけだった。光村沙耶のマンションに到着し、中へ入ろうとすると横から何者かが割って入ってくる。その姿を目にすると、男は急速に身構えた。

「よお」

亀谷右京は精悍な面持ちで男へ近づく。男は事態の重さを考える。彼がこんな男の女先へ姿を見せることはなかった。遠目からは見ているのだろうが、男にも分かる程度に姿を見せるのは自宅付近が常だったから。何だ。何があったんだ。そう男の胸を不定にわだかまりが動いていく。

男は何も言葉は返さない。彼の言葉があろうとも、大抵は素通りをしていく。男は彼を昔から知っているが、もう関わりたくはないと決めている。刑事の責任が分からないけれど、ここまで長く執拗に追いかけられるのは良い気などしない。もう二十年になるのに、一人の事件関係者に何故そんなにもこだわるのだろうか。男は自分の本質を彼に嗅ぎつけられてるような気がしていた。それでも、ここに届くことなど出来やしないだろうが。

いつもの通りに男は彼の横を過ぎていこうとする。だが、彼の顔がこちらに向き、左

横に來た時に言葉を投げられた。

「柴村忍はどこに行った」

威勢のいい張りのある声が耳元に響く。その言葉に、思わず男も彼に顔を向けた。何

かを見据えた、相手の奥底を見るような目でこちらを見ている。長年刑事をやってきた

人間の、何一つの証拠も見落とさない観察力や洞察力が読み取れた。でも、それぐらい

で怯むわけにはいかない。

「どういう意味ですか」

男も目を細める。睨むとはならないように意識して。彼の言葉を怪しむ、という程度のもんとして。

「週刊誌の女性生活の記者、柴村忍の行方不明は知ってるな」

「はい」

それがどうした、と言い加えなくなるのを抑える。

「お前、どこに行ったのかは知らないか」

知ってるんだろ、と含めたような語調だった。

「知ってるわけないでしょ。何を言ってるんですか」

心外だ、という空気を醸し出す。この時点で、もう彼が男に疑いを掛けてるのは汲み取れた。

「何か知ってるのなら言っておいた方がいいぞ」

「いや、俺も早く無事に見つからないかと心配してるんです」

お互いの視線がぶつかり合う。気鋭な彼の視線と無心な男の視線。彼の方から視線は

外れ、舌打ちをして去っていく。

男も高級マンションへ入り、女の部屋でベッドに倒れ込む。亀谷

が自分と女性の関係に疑惑を持っている。大田恵一を追ってきた彼からすれば、そこへ行き着くのは難しくないのかもしれない。ただ、そこから解明までの様々に絡む糸を解くのは不可能に違いない。

そう経たないうちに、女は仕事から帰ってきた。甘えてくる女の服を脱がし、望むがままに行為に及んでいく。いろいろな体位で喘ぐ女が視界にいながら、男は何度か亀谷の存在が頭に浮かんだ。行為が終わり、裸で抱きついてくる女をなつかせながら心は別にあつた。

睡眠を取り、夜からは片柳彩子と会った。男が女性を殺める前に会って以来、女の子の接し方は多少変わった。表面的にも心的にも距離を縮め、恋人としての関係を紡いできている。男がプレゼントした指輪は仕事の際は体裁を考えて外しているが、デートの時には嵌めてくる。そして、女の子はよく幸せだなあと言い零すようになり、その言葉に男は心をくすぶられた。

亀谷右京は柴村忍の失踪時近辺の男の動向を調べた。女性が最後に目撃されているのは仕事を終え、帰宅する時の姿。別に、その後に誰かに会う約束をしているという話は聞かれていない。当日の様子も特にといった変化は見られていない。今のこの状況を予測していたわけではないのだろう。おそらく、女性は意図していな

い状況へと追い込まれたのだ。

男はその日は休日だった。つまり、一日どうとでも動けたといえる。休日の男の通常の動向は、久留米雀と自宅で一夜を過ごし、渋谷にある高級マンションの一室で朝から夕暮れまでを過ごし、夜は片柳彩子と外で食事をする。男は休日には、数ヶ月前から大概はこの流れで動いている。久留米雀とは異質な関係を築き、自らの思惑と交換しているのだらう。渋谷のマンションに行くのは、光村沙耶という女に会うのが目的だらう。

二人でいるところは二度しか見たことがないが、それ以外の住人としていたことはないの間違いはないはずだ。女はキャバクラで働いている。それも中々の有名店で人気もあるようだ。男と知り合ったのは、タクシーかキャバクラのどちらかだろう。男の自発的な趣味で行く店ではないので、前職の時に年長の同僚にでも連れていかれたと考えるのが妥当だ。本命なのかどうかは分からないが、あのキャバ嬢なら接する客も高等になるとすると利用に値する人間ではあるかもしれない。片柳彩子はモデルとして、それなりの地位を確立している。同世代の憧れの的、というやつだ。最近は女優業にも進出してるらしい。男と知り合ったのは、タクシーの乗客としてだらう。少なくとも、久留米雀のマネージャーとして係わる事はない。本命なのかどうかは分からないが、会っても食事

だけということも多く、スマートな関係といえるし、モデルという職業が利用に値するものかは疑問ではある。

男と女性に当日の接点があったとするなら、その後の夜の深い時間になる。どちらも

誰かに会っていた形跡はない。だからといって二人が会っていたわけではないが、その可能性は否定されないことにはなる。

そして、彼には追い風が吹いた。その翌日、男は仕事を休みにしてもらってるのだ。

前職から、男が病気や旅行の類の他に自ら休暇を願い出た事はなかった。友人の結婚式に出席していたという理由だったが、俄かに信じがたい。男には結婚式に参列するほど

仲の良い人間などいない。いとすらなら……野木晃彦、あいつぐらいだが、既に結婚しているから対象から外れる。結果として、当日の男の動向には疑いを拭い去れるだけのものはないことになる。

男が女性に手を掛ける理由はあるだろう。久留米雀との関係を掴まれたか、片柳彩子との関係を掴まれたか。光村沙耶にしても、仕事上で何か裏社会に通ずるものがあるのかもしれない。いずれにしろ、男は探られれば悪意を抱くだけの事をしており、悪意を抱くだけの人物でもある。

男が女性に手を掛けたとするなら、男は休暇を取った一日に何をしていたのだろうか。女性が生きてるにしろ、そうでないにしろ、自宅に置いておく事はないだろう。俺が

嗅ぎつく事ぐらいは予想してるはずだ。自宅に踏み込めば一発でバ
レてしまう。とする
なら、女性をどこかへと移動する必要がある。どこか、ってど
こだ。隠し場所なら
無数に存在する。大きく言えば、一日で日帰りをできる場所の全て
が対象になる。そん
なことを考え出したら切りがない。男が隠し場所として選択する
ところ、男が犯罪の末
として選択するところ……あそこか。

それから一週間が過ぎた。柴村忍の搜索について、警察から進展
の一報は届かない。
もう無事では帰って来ないのかもしれない、親近者にもそう覚悟せ
ざるを得ない状態と
なってきた。

男は久留米雀の現場にいた。二時間ドラマの撮影は佳境に入り、
刑事が犯人を追いつめ、
めるシーンとなっている。推理から導いた事実を突きつけ、犯人は
その場に崩れこむ。
弱った体を起こし、手錠をかけて連行されていく。

男自身、今回のドラマの内容には自らを投影する機会は多かった。
ならば、自分にも
こういうシーンが巡ってくるのだろうか。迫りくる追っ手から逃げ
切る術はないのだろ
うか。いや、そんなことはないはずだ。女性を殺める場も、沈める
場も誰にも見られて
はいないのだから。ここにまでなんて、辿り着きようがない。そう
だ、もっと心を広く
持っていればいい。

ただ、亀谷の不気味な存在感も拭いきれないのも現実だった。あ

の男は大田恵一という人間に勘付いている数少ない一人だ。表向きに繕ったものじゃない、裏側に潜めてる凶気に。

亀谷に初めて会ったのはもう二十年も前になる。あの時は今のようにはなく、子供に接する優しげな大人というふうに映った。しかし、次第に彼は優しさを薄めていった。

そして、男の現状を逐一に確かめるようになる。どこに行こうと、その視線は男に着いてきた。

「じゃあ、明日は八時に迎えに来ます」

「ええ、お疲れ様」

仕事終わりに女を自宅まで送り届ける。女はもう女性の事について口にしなくなった。

危険を心配するのを止めたわけじゃないが、もしかすればの事態も考えるようになったのだろう。

その10（前書き）

登場人物

大田恵一・おおたけいいち（タクシードライバー、野望を携えて生きる野心家）

片柳彩子・かたやなぎあやこ（モデル、今どきの十代で分かりやすい性格）

久留米雀・くるめすずめ（女優、誰もが一目置く大物）

野木晃彦・のぎあきひこ（大田の学生時代の同級生、既婚で子供もいる世帯主）

柴村忍・しばむらしのぶ（週刊誌記者、久留米の連載を担当している）

亀谷右京・かめやうきょう（刑事、大田と過去に接してから後を追いつけている）

光村沙耶・みつむらさや（キャバクラ嬢、名の知れた有名店でナンバーツーを誇る）

その10

深夜、タクシードライバーの業務を終え、帰ろうとする野木晃彦の前に懐かしい顔が

現れた。亀谷右京が東京へと勤務地を移したのが六年以上前になり、それ以来になる。

彼は大田恵一が上京する後を追うように徳島を離れ、それから男からも話を聞いたことはない。

「どうしたんですか」

「よお、ちよつと時間作れるか」

「はい、構いませんけど」

二人はファーストフード店へ移動した。ともにホットコーヒーを注文し、対面の席に

座る。彼が上京してからは年に一回ほど電話でやり取りをしていたが、改めて直接近況でも聞かれるのかと思った。しかし、それにしてもこんな深い時間に連絡もなしに待たれてるのも不思議だった。

「最近はどうしてる」

「特に変わりはありませんけど。もうじき、二人目が産まれます」
そうか、と彼は目を配らせながら小さく言う。子供が産まれる事は、彼にとってそう

大したものじゃないと思ったから付け足し程度に添えた。

「大田とは連絡は取ってるか」

通常通りの会話の進行。ただ、今回に限っては違った。これが本題への切り口。この

言葉への返信次第で進行は大きく変わる。

「はい、そんなに小まめじゃないですけど。あつ、でも二週間前ぐらいに急に掛かってきましたね」

彼の目が開く。二週間前なら、彼の望んでいた女性の失踪のタイミングにばつちりと合う。

「急に掛かってきた、ってのはどういうことだ」

「いつもは二年から三年に一度しか掛かってこないですよ。何日かしたら帰ってくるから時間取れないか、ってふうに。なのに、その時は前に来てから半年しか経ってないのに掛かってきて」

「何の話をした」

「いや、時間を取って欲しいって言われて。いつもは勤務中にタクシーに乗せて懐かしい場所を回るんですけど、その時は一日開けてくれって言われたんで休暇を取って会いました」

急な連絡、急な帰郷、男への怪しさは募っていく。これは掘れば先に行き当たるかもしれない、と刑事魂に火がつく。

「どうして、休暇を取るように大田は言ったんだ」

「分かりませんが・・・まあ、ゆっくりしたかったんじゃないですかね」

そんなところまではいちいち考えない。この年齢になれば、相手の言葉はそれなりに尊重する。

「その日の事、詳しく聞かせてくれないか」

前傾で聞きに来る彼に対し、男性は当然に異変を感じた。彼は二

週間前の男の動向を

なぜ知リたがっているんだ。

「あいつ、何かあつたんですか」

「分らん。それを調べるために聞いている」

それは、ほぼ疑いに掛かつてるように聞こえた。男に一体何の疑惑があるのか。それを分からぬまま、話してしまっているのだろうか。自分が素直に話す事は男にはまずい

事になるのだろうか、と葛藤する。同時に、目の前の亀谷からの圧力に似たものも寄せてくる。

「大田くんとは駅で待ち合わせをしました。正午過ぎに着くと連絡が来たので、その

頃に自分の車で迎えに行きました。そこから吉野川のキャンプ地まで移動して、あとは自由行動ってことになって。僕は川で釣りをして、向こうは散歩に行くと言って別れました。それで、大田くんの帰り時間に合わせてまた駅まで送った、

っていうところだと思ひます」

彼はしばし考え込む。男性の言葉の中にある違和感を探り出そうと頭内に反芻させていく。

「それは具体的に何日の事だ」

「多分、二週間前の木曜日だったはずだ」

木曜日、柴村忍が最後に確認されたのが水曜日だから次の日だ。タイミングは合っている。

「大田はその日のうちに徳島まで来て、帰ったんだな」

「はい」

「お前に休暇を取るように言ってきたのはいつだ」

「その前の前の日だったから、火曜日です」

男は何か理由があり、女性に手を掛けた。しかも、それは事前に考えられていた用意

周到な計画。女性の身を奪い、そのまま故郷にまで連れ運ぶ。生まれ育った場所なら地

の利はあるし、東京からも距離が離れている。女性の失踪が水曜の夜からなので、この

筋書きは見事に嵌る。あくまでも仮想にすぎないが、仮想に留めておけないものだと思っ
は思った。

「あいつ、何か大きめの荷物を持っではいなかったか」

「ああ、スニーカーを持ってましたね」

ハツとなる。スニーカー、大きさとしては可能だ。まさかだが、その中に女性の体
があっただんじや。そうだとしたら、おそらく女性は助かっていない
ことになる。

「その、キャンプ場からあいつが散歩に行ったのはどこだ」

「さあ、そこは全然分かりません」

肝心なところにある穴に彼は息をつく。そこさえ分かるのなら、
話は大きく進むはず
なのに。

「おい、そのキャンプ場を案内してくれないか」

「えっ、今からじゃないですよね」

辺りに視界が広がり、ようやくハツとなる。こんな深夜に行った
ところで何も出来や
しないじゃないか。男性の話がタイムリーすぎて、集中しすぎてい
た。

「明日、時間空いてるか」

「明日は夜からだから、それまでなら」

昼前からの約束を取り付け、二人は別れた。男性が去ると、彼は掴んだ成果の大きさを噛みしめる。一週間かけて休暇を作った甲斐は充分にあった。野木晃彦なら何か知ってるかもしれない、と踏んだのは正解だった。大田恵一の本質を分かっている数少ない人間の一人、そこを突くために徳島まで足を運ぶ事を決めてからは時間が長く感じれた。男が逃げたりなどしないことは分かっているが、早く真相を知りたくて気があくせくしていたから。ただ、それだけ待った分の返りがあつてよかった。これで、あの男を崩せるかもしれない。

翌朝、十時に二人は駅で待ち合わせた。男性は自宅へと戻り、彼は漫画喫茶で睡眠をとった。もうすぐ謎が解明されるかもしれないと思うと、あれこれ考えを巡らせて眠りにつくのが遅れてしまった。

男性の車で移動する間、会話は特になかった。男性は喋り上手ではないし、彼は妙な緊迫感を携えていて、なにより二人の関係性が駄弁を振るい合うものでもない。それで空気が張り詰めることもない。

二週間前に男と行ったキャンプ場へ着くと、男性はその時に自分が釣りをしていた場所と男が散歩へ向かっていった方向を教える。彼はその道を進み出し、男性もその後ろを着いていく。男が歩いていったであろう道は普通の道だった。車道はあるが相對する

車二台の通過はギリギリ、歩道も一人ぐらいの幅しかない。それでも、キャンプ地に入るほど奥入った道なので大きな問題はないといえる。そんな道を二人はただただ歩いていく。

しかし、逸る彼の思いは眼前の光景に寸断されてしまう。十五分ほど歩いていけると、やがて目の前の道が行き止まりになってしまったのだ。彼には現状の理解に少しの時間がいった。

「どういうことだ」

振り返り、後ろに着いてきていた男性に訊く。この道を男が散歩で歩いてきたのなら、

その先がここになるのはおかしい。

「あいつはどこに行っただ」

「どこかは分かんないですけど、適当に曲がったとかじゃないですかね」

ここに来るまで、右手には住宅が幾らかあり、左手には森が続いていた。曲がったと

いうのなら、右手になる。住宅地の方へと行き先を変えたのか。だが、どうにも納得が

いかない。散歩なら、もっと広々とした場所がいいんじゃないだろうか。都会ならまだ

しも、こんな地方なら長閑な風景を目にしたいものなんじゃないだろうか。日々を都会

で過ごし、たまに帰ってきた男なら特に。右手に目を向ける。住宅地の先の方にもこれ

といった休息の場所は見当たらない。思考がうまく男の行動へと重ならず、気が焦ってくる。

「何か知らんのか。何でもいい」

「そう言われても……ずっと釣りをしてただけなんで」
目を閉じ、落胆に近い息をつく。ここまで来たのに、根っこを掘り下げることが出来ないのか。

「あいつの行きそうな場所は分らんか」

「行きそうな場所っていうか、あいつが帰ってきた時にいつも行く場所なら」

「そこだ。教えてくれ」

二人は来た道を引き返し、男性の車で移動を始める。最も有力としていたポイントで活路を見い出せず、気が落ちてしまふ。なんとかここから盛り返したい。そう信じるしかなかった。

一つ目の場所は小学校だった。男や男性が通っていた小学校、この地に住んでいた彼も当然知っている。授業中だったせい、静けさが目立っている。

一応に考えてみるが、すぐに振り払う。いくらなんでも、こんなところに女性を移動させるような事はしないだろう。男の当日の空白の時間は平日の昼間、誰にも気づかれずに小学校に入り込めはしないはずだ。

二つ目の場所は林檎山だった。小学校から数分の距離にある中学校の裏手にあり、子供たちの隠れ基地とされている場所。林檎山は通称で、実際は山とまでは到底言えない広さしかない。遠くからの見た目から、そういう名前がどこからか付いただけだ。隠れ基地というのも、それが大人まで伝わってるようでは疑わしい。実際のところは、小学生が

授業終わりに溜まる場所になってるらしい。それも、学校で大将を張ってるような奴らが主に。

ここも移動は難しい気がする。男の当日の空白の時間は、詳しくは十三時から十七時まで。後半は小学生の下校時刻と重なってしまふ。それに、ここは授業をサボる小学生や中学生の集まる場にもなってるらしい。前半にも、ここを誰かが訪れる可能性はある。そうになると、ここも違うのかもしれない。

三つ目の場所は一軒家だった。男がここにいた時に住んでいた家だ。元々は家族三人で暮らすためにと購入したものだったが、父親は男が幼い頃に女を作って出てってしまったらしい。それから母子二人で貧しい生活を続け、その母親も八年前に帰らぬ人となった。

ここも移動は無理だろう。今は別の一家の住まいとなっている。庭では母親らしき人が洗濯物を干しており、家の中からも足音が聞こえてきた。

四つ目の場所は吉野川だった。男や男性だけでなく、そこは彼にとっても決して忘れ去ることの出来ない場所だ。十七年前のあの忌まわしき過去、ここに来るだけでそれはすぐに思い返されていく。目を覆いたくなる光景、多くの生命が失われた一時、廃と化された亡骸。今もあの惨事から抜け出すことのできない人達がいる。彼も、男性も、男もその一人だった。

ここなら、有り得るだろうか。あの男をああいいう人間にさせてし

まっただであろこの

場所なら。しかし、ここもキャンプ場である以上、オープンな場所だ。人間を移動させ

るのは容易ではない。誰の目があるかなど分らない。

「本当にここが最後なのか」

「はい。いつもこう回ってます」

男の四つの思い出の場所、可能性としてはこの吉野川が高い。だが、ここだと決める

何かは全くない。そんな段階の中で、安易にこのこととしていいのだろうか。ここではない気がしてならない。

「他に何か知ってるやつはいないのか。何でもいい。大田について、何か手掛かりになるものがあるやつは」

懇願するような思いだった。この徳島ではあるはずなんだ。というより、ここでないなら全ては振り出しに戻されてしまう。それも、そこから抜けることの難解な振り出しへと。

「手掛かりになるかは分かりませんが、鞆谷さんに電話してみましようか」

「鞆谷」

その名前にはどこか聞き覚えがある。

「大田くんの近所に住んでいた子です」

その言葉で、彼の記憶の中と鞆谷の名前が一致した。実際に会ったことはなかったが、名前だけなら資料で数えきれないほど目にしてきている。

鞆谷は、十七年前にここで起こったあのキャンプ場の火事に遭った学級の生徒の一人だ。彼女が生き残っているのは、当日の病気でキャンプを欠席して

いたから。やむなくの欠席が自らの命を救うことになった。確かに、彼女なら男のことを何か知っているかもしれない。

「ああ、その子に連絡つけてくれ」

鞆谷に連絡を取ると、行けることは行けると返答が来たのでここまで来てもらうことにした。

鞆谷とは男性も特に連絡は取り合ってるわけではないらしい。ただ、過去にあれだけの共通点が生まれた三人には言葉にはしにくい変な関係が互いにあるし、連絡先は今でも知っているようだ。

二十分ほどで鞆谷はキャンプ場へ姿を見せた。既に結婚し、息子は今年から小学生になっていてと男性から聞いていたとおり、髪型やら服装やら全体的な気にもそんな感じは出ている。若々しいものというより、一段落して落ち着いたような印象。もとより、この辺には東京のように奇抜な若者は少ないといえるが。

亀谷はこれまでのことを抜本的に説明する。無論、男性同様に奥底の方は包み隠して。

「何でもいい。大田について、何か知らないか」

また彼は懇願するように訊ねた。おそらく、男性はこれ以上に女性の移動場所に繋がるものを持っていない。となれば、彼にはもう彼女しかない。そんな強い思いで返答を待っていく。

「さつき、野木くんが釣りをしてたって言ってたところって、この先のキャンプ場の

ところかな」

「ああ、あそこだよ」

その言葉に、彼女は一つ頷く。何かが頭内で結びついたような反応に見える。彼はただ先の言葉を待つ。

「じゃあ、あの辺に大田くんがよく行つてたところがあるけど」
男が散歩に行くところの近くに、そんな場所があったのか。しかも、男性と

行つてきた四つの場所ではなく、断念をした元々の本命の場所。何か大きな活路が開けたような気がした。

「すまないが、そこを案内してくれないか」
力強く頼むと、それに圧倒されたのか彼女ははいと頷いた。移動する間に聞いた話によ

ると、男はその場所を頻繁に訪れていたらしい。幼稚園や小学校から帰宅するとそこ

へ行き、何をする目的もなく時間を過ごしていく。家が近く、同年ということもあり、

彼女は何度かそこへ連れてってもらった事があったが、やはり何をするにもなく適当

に話をして過ごしたようだ。そこを訪れる目的を訊くと、男は何も考えなくていいから

落ち着くと言っていたらしい。

やがて、数時間前に最初に訪れたキャンプ地を通過し、男が散歩へと消えていった道

を歩き出す。そして、数分が経つ頃に彼女は左へと曲がった。当然、男性と彼は驚く。

その道の左手にあったのは森なのだから。

「もしかして、ここに入つてくの」

「うん、そうだよ」

まるで当たり前のことのように彼女は言った。どんどん茂みの中へと入っていく彼女を追いかけ、男性と彼も森へ入っていく。森の中には道らしき道はなかったが、一人一人が歩ける程度のスペースはあった。それでも、森林に密閉された山なりの中を登っているのは蒸し暑く、中々に体力を消耗する。子供ならこれぐらいは平気で登ってしまえるんだろうが。

「ここら辺ですね」
そう彼女が立ち止まった場所を見ても、何も新鮮さは感じられなかった。そこに、これまで歩いてきた景色と何の変化もなかったからだ。山登りの休息地点とまで言わずとも、何かしら印象のある物でもあるのかと思ったが完全に裏切られた。単なる森の一部、それではない。

「どうして、ここだと分かるんだ」
「なんとなく、勘です。でも、大体合ってるはずですよ」
子供の頃の記憶、ということか。彼は滲み出ていた額の汗を拭き、息をつく。周りを

見渡してみるが、これというものはやらない。ただの森の中だ。だが、気を落とすことはない。ここが男の昔の隠れ場だったことは間違いない。男は小さい頃にここを安息の場所としていた。あの惨事が起こった前後もそうだったはずだ。そして、男が二週間前に散歩へと歩いた道もここへと繋がられる。女性がここへ移動させられた可能性は現時点で最も高い。

男は付近をしばらく歩いてみる。足場は悪いが、作業は不可能で

はない。ただ、数分歩いてみるも、それらしき跡は見当たらない。ただ、この付近とも限らない。この森の全体が対象ともいえる。そうになると、範囲はずいぶんと広がってくる。彼自身、取ってきた休暇は今日が限りだ。それだけの広さを調べ上げる時間など到底ない。どうすればいいんだ。

その日の夜、男は片柳彩子と会っていた。朝方までは久留米雀の老いた体に身を崩し、夕方までは光村沙耶の若い体に身を治す、いつもの流れで。夕食は個室のある店で鍋を食べ、帰りがてらに遠回りをして夜景を見ながらドライブをした。女の子の表情は終始緩みっぱなしで、男の側に寄りながら何度も幸せだなあと零している。男もそれに合わせるように笑みを見せていく。

ドライブの後、車は男の自宅マンションへと行き着く。通常なら女の子の自宅へ送り届ける流れだが、今日は男の部屋に上げる口約束をしていた。男の部屋を見せてもらうという名目だが、それでも女の子はこの上なく嬉しかった。一つ一つ進展していく二人の関係は喜色そのものだから。しかし、純な想いを続ける女の子には予想だにしない現実が訪れようとしていた。

マンションの地下駐車場に車を止め、エレベーターへと歩くうちに男は異変を察した。駐車場にあった車の隙間から四人の男性が急に飛び出して、あつと

いう間に男の周囲を取り囲んでいく。その中には、亀谷右京の姿もあった。急すぎる展開に男の頭も複雑に回転している。

「大田恵一、今から署まで同行してもらおう」

今さら警察手帳の提示なんて必要ないだろう、という具合にいきなり言葉から入ってくる。眉間に皺を寄せ、険しい表情。ただ、その奥に芯のあるものも見えた。こうまでしてくるということは、自信に繋がる何かを得たのだろう。男は抗争の覚悟を心に決めていく。

「連れていけ」

彼の一言で、他の三人の刑事が男を連行していく。男が抵抗をしなかったので、無理な力は加えられなかった。

「あなたにも来てもらいます」

彼の一言は女の子に向けられた。だが、女の子はそれどころではなかった。目の前で起こっていく非現実的な現実の場面に着いていけず、不定な心情に身を侵されそうになっっている。仕方なく、彼が女の子の肩を引いて歩かせた。

マンシヨンの表に停めてあった二台の車の一方に男、もう一方に女の子が乗せられ、

車は動き出す。後部座席に刑事と乗せられた男はこの先に起こるであろう出来事を様々

に頭に思い巡らせていく。警察はどれだけ捜査を進めたのか、それに対してどんな対応をすればいいのかと。女の子の方は顔色が悪くなるほど、思いを詰めていた。まさか、

自分の人生の中でこんなことが起こるなんて思いもしていなかったから。ただ、刑事が名前を発したのは男の方だ。自分はその付属のような扱いだっただ。それはそれで、男はどうしてこんなことをされるんだろうかと頭を悩ませ、詰まっていた。思いは増すばかりになる。

警察へ着くと、男は取調室へと連れて行かれる。亀谷ともう一人の刑事が残り、男と対面の椅子に彼が座った。

「やっと、こうやって話せる時が来たな」
待ち望んでいた、という感じに彼は言い放つ。男は動揺はしていない素振りを表面に出していく。

「どうして、ここに自分がいるのかは分かるな」
「さあ、どうしてですか」

白を切る男にカチンとくるが一時の感情は押し込める。男のペースに持ち込ませはしない。

「前にも聞いたが、もう一度確認のために聞く。週刊誌の女性生活の記者をしている
柴村忍を知ってるな」

「はい、知ってます」
「どういう関係だ」

「僕が女優の久留米雀さんのマネージャーをしていて、久留米さんが女性生活に連載
を持っているので仕事で接していました」

用意していた言葉を並べるように男は喋っていく。まあ、いい。前半はジャブで相手の出方を窺う。

「柴村忍と仕事以外で接する機会はなかったか」

「仕事以外で」

「ああ、久留米雀と柴村忍は仕事場以外でも交流があった。そこにお前がいてもおかしくはない」

マネージャーがタレントの食事につき合わされるのはよくある話だ。女性と男は仕事

で接しているのだから、その場に同席していても変じゃない。

「はい、何度か一緒に食事はしました」

「二人で食事をすることは」

「ありました。仕事の打ち合わせをしたい、と言われて」

「その後、柴村忍から言い寄られるようなことはなかったか」

「どういう意味でしょう」

「好意を持たれはしなかったか、ということだ」

そこを突いてくることは予測できた。男と女性の間を怪しむとしたら、そこを見るのは自然だろう。

「さあ、僕は彼女じゃないんで分かりません」

「そういう節はなかったか、ということ聞いてるんだ」

「なかったと思います」

食い気味に男は言った。彼の目を直視し、余裕を含ませて。相手もそれに怯む様子は全くない。

「では、柴村忍が失踪したことは知ってるな」

「はい」

「お前、何か知ってはいないか」

「どうして」

あくまで、男は白を切り通す気だ。お互いがお互いの思惑を知ったまま、探り合いを続けていく。

「じゃあ、もつと直接的に聞こう」

彼は姿勢を前傾に構える。男の目を一点に見突く。

「お前は柴村忍の失踪に係わってるな」

「意味が分らない」

「お前が実行犯だ」

「全然分らない」

「理由は分かんが、お前はしつこく柴村忍に脅しを掛けられた。おそらく、出され

たら困るような写真でも撮られたんだろう。お前は彼女の存在が邪魔になった。だから、

消したんだ」

「勝手な想像は止めてもらえませんか」

だんだんと二人の言葉は強くなっていく。ムキになりそうになるが、冷静さを保とうと気を落ち着ける。

「柴村忍の行方が途絶えた夜、お前には決定的なアリバイはない」

「アリバイがないから何だって言うんだ。そんな奴、探せば腐るほどいる」

「その翌日、お前は仕事を休んでいるな」

「単に休暇を取っただけだ。数日前から申請してあった」

「ああ、つまりは衝動的ではなく計画的に行われた犯行ということだ」

「馬鹿馬鹿しい。聞いてられない」

男は彼から視線を外した。攻められてはいるが、所詮は外壁から中には入らずに無駄な球を投げてただけだ。

「そこまで言うなら、何か証拠があるんだろうな」

挑戦的に男は投げた。こちらに致命傷を負わせるような重い球など持ってやしないだろうと。

「あるぞ」

男の目が開く。再び彼の方へ向けると、鋭い視線がこちらに向けられていた。

「柴村忍が発見された」

男の目も鋭くなる。相手の目の奥の真意を掴もうと。ただ鎌を掛けているだけに違いないと。

「どこにいたんですか」

「知りたいか」

「それはもちろん」

次の彼の言葉で真意は判明する。真実なのか、嘘なのか。緊張が男の体の中を駆け巡っていく。

「吉野川付近の森の中だ」

男は笑みを浮かべそうになり、それを必死に打ち消す。上歯と下歯の間に舌を入れ、軋ませるのを防ぐ。

「昨日と今日、徳島に行ってきた。野木晃彦に会うためにだ。あいつなら、何か知ってるんじゃないかと思ってな。案の定、お前が休暇を取ったという日に日帰りで帰郷をしていたことが分かった。俺はここに柴村忍の行方があると確信し、お前が帰郷する度に回るっていうコースを野木に連れて行かせた。だが、どこにもそれらしい場所はなかった」

男は彼の話を聞くだけだった。あとはどこまでが調べ上げられているか、それ次第になる。

「そこで捜査は一度止められてしまった。でも、ここに柴村忍が

いることだけは確か

だと思っていた。そうしたら、野木が鞘谷を紹介してくれたんだ」

鞘谷という名前に男は意表を突かれる。もう十七年、一度も顔を合わせていなかった

女性だ。

「彼女に経緯を話したら、一つの場所を教えてもらえたんだ。二週間前、お前が野木

とキャンプ場から離れて散歩へ行っただっていう道の先にある森だ。

昔、子供の頃によく

行っていた場所だそうだな。そこに行った時、俺はここだと思ったよ。だから、地元の

警察に協力を依頼して搜索をした。昔の仕事仲間も多かったから、頼み込んだら力を貸

してくれたよ。俺は途中で東京に戻らないとらなかったが、その

途中で柴村忍の遺体

が見つかったと報告が入った」

男も彼も視線を外すことなく、お互いを強く見ていた。その間に優劣は大きく変わっ

ていた。

その11（前書き）

登場人物

大田恵一・おおたけいいち（タクシードライバー、野望を携えて生きる野心家）

片柳彩子・かたやなぎあやこ（モデル、今どきの十代で分かりやすい性格）

久留米雀・くるめすずめ（女優、誰もが一目置く大物）

野木晃彦・のぎあきひこ（大田の学生時代の同級生、既婚で子供もいる世帯主）

柴村忍・しばむらしのぶ（週刊誌記者、久留米の連載を担当している）

亀谷右京・かめやうきょう（刑事、大田と過去に接してから後を追いつけている）

光村沙耶・みつむらさや（キャバクラ嬢、名の知れた有名店でナンバーツーを誇る）

その11

「それで。それが僕がやった証拠になるんですか」

「現場状況はお前がやったと指し示している」

「それが何だっていうんだ。僕がやったという決定的な証拠にはならない」

「お前、当日スーツケースを持っていったらしいな。野木には土産を入れるためだと」

「言ったようだが、その中に遺体を入れて運んだんだろ」

「勝手な憶測を言うな。土産を入れるために持ってたんだ」

「ああ、確かにお前は帰りがけに大量の土産物を購入していた。証言は取れている。」

だが、行きの中味は証明できない」

「行きは空だ。何の荷物も入ってなんかない。だったら、今ここにそのスーツケース

を持ってくるから調べてみるか」

「そんなもの無駄だ。証拠は消してあるに決まってる」

「消してなんかいない。元から何もない」

「どうせ、そのうちにお前の犯行だと全てバレるんだ。なら、せめて自白したらどう

なんだ」

「自白。自白はやった人間がするものだ。僕がする必要なんてない」

強い言葉が狭い取調室の中を行き交う。ここまで真実を明かされた屈辱に理性を振ら

されるが、まだ首の皮一枚つながっている事実で押し留める。まだだ、まだ俺は崩され

ちやいない。

そこで、一旦に話は途切れた。外壁を壊し、中へ侵入し、最後の牙城を崩そうとする

亀谷。己の運命が掛けられた牙城を崩させやしないとする大田。両者の睨み合いが続けられている。

「すまんが、席を外してくれ。一対一で話したい」

彼は取調室にいたもう一人の刑事へ言った。刑事は驚いていたが、彼の氣に押されて部屋を出て行った。

一人減ったことで、取調室はより狭まった気がした。閑散とした空気が余計に不穏さを際立たせる。

「告白をする気はないのか」

「その必要がないと言っている」

そうか、と彼は息を一つつく。

「十七年前の吉野川での火事を覚えてるな」

「忘れるはずがない」

「俺はあれもお前がやったと思ってきた」

正確に言うなら、途中からそう思い出した。事件当時には、男の裏にある凶氣に気づけなかったから。

「馬鹿馬鹿しい」

「ああ、俺も何度とそう思ったさ。だが、小学生が人を殺められないわけじゃない」

「ふざけるな。いくら刑事だからって、何から何まで事件に結びつけていいってもんじゃない」

そう言い投げると、彼は少し黙った。返答がなく、それが男には奇妙に感じられた。

「野木が全て話したよ」

彼の言葉に、男はまさかという顔を見せる。心を崩され、その事実を受け入れられはしなかった。

「あの火事はお前が起こしたものである事。そして、それが事前に計画された残虐な大量殺人だった事もだ」

それを男性から聞かされた時、彼も驚きを隠せなかった。それを長年疑ってきたのに、事実として告げられるとさすがに重いものだった。

「どうして……」

どうして、野木がそれを亀谷に話したんだ。俺はあいつを助けたんだぞ。あいつには俺を助ける義務があるはずだ。

「お前が柴村忍を殺めたであろうことをあいつに話した。あいつは本気で落ち込んでたよ。お前が全うな人間になってくれることを誰よりあいつは望んでたからな。だから、俺はあいつに訊いた。十七年前の火事の真実を教えてくれ、大田恵一がやったんだろ、

とな。それでも、当然あいつは口を割らなかった。でも、あいつの反応を見ていれば、

それがどういふことなのかぐらい簡単に分かる。もう時効は過ぎてるから大田やお前が

罰せられる事はない、その事について俺が二人を個人的に攻める事もしない、と言い加

えた。それでも、あいつは口を閉ざした。自分を助けてくれたお前を裏切ることが出来

なかったんだ。だから、俺は最後にあいつに言った。お前が本当に大田を助けたいと思

つてるんなら真実を話してくれ、償わないとあいつはいつまでも罪の世界から抜け出せ

ない、と。そうしたら、あいつは全てを話してくれたよ」

男の体に彼からの言葉が沁み込んでいく。もう罪に苦しむのは終わりにしたい、と前

に男性から言われたことを思い出した。

「野木は十七年も苦しんできたんだ。ずっと闇の中から抜けられないお前を目にして。

お前がそこから出ないと、あいつも出られないんだ。あいつは独りでそこから出るよう

な奴じゃない。抜けるならお前と、と思ってる」

「……うるさい」

小声で呟く。男の体の中が迷いで疼く。

「最後、あいつは泣きながら話してたんだぞ。もしかしたら自分がいけないのかもしれない、こうなる前にもっと早くお前を助け出していればよかったのに、って」

「……うるさい」

また小声で呟く。機能は壊滅する寸前まで迫ってきていた。

「お前は独りきりなんかじゃない。これだけ心配してくれる人間がいるんだぞ」

「うるさいって言ってるだろ」

男はありったけの声で怒鳴り、ありったけの力で机を殴り、ありったけの感情で亀谷

を睨み、溢れてくる涙を抑えきれなかった。

「俺も同じだ」

感情を曝け出した男から視線を外すことなく、彼は言いつける。

「十七年前の火事の時、真実に気づいてやれなかった事を後悔してる。あの時に俺が

本当のお前を分かってやれていたなら、こんなに長い間お前が苦しむ

ことはなかったし、
こんな事件も起きなかった」

この十七年間に雑に急速に思い起こす。どれだけの思いを男と男性と彼はそこに費やしてきただろう。

「すまなかった」

その言葉は、男の長年に渡って留めてきた感情を崩した。男の中で何かが解放された気がした。

「柴村忍を殺したのは……お前だな」

呟くほどの声で彼は言った。男は何も言わず、ゆっくり首を縦に振った。長きに渡って築き上げられてきたものが許された瞬間だった。

取調室を出ると、亀谷は大きく息をついた。自責の念に駆られながらも、十七年分の葛藤からの解放感もやってきた。昨日から今日まで稼働しまくった体への疲労感も同時に襲ってくる。今は取り合えず休みたい。

自分のデスクには戻らず、外に向かって歩き出す。狭い部屋の中にいたので、外界の空気を吸いたくなった。外へと出ると、涼しい空気が真正面から当たってきて気持ちがいい。しかし、落ち着いて何気なしに目を配らせると、視界に数メートル先に佇む人物の姿が捉えられた。彼はその人物の方へ近づいていく。不定な表情をして立っていたのは片柳彩子だった。

「大田なら、待ってても来ないぞ」

女の子への聴取はとくに終わっていたのだろうか、それからこ

こで待っていたんだ
ろう。聴取を担当した刑事がどう説明したかは知らないが、おそらく大体の事は伝わっているはずだ。

「ここにいつまでもいない方がいい。そのうち、報道の人間も詰め掛けるはずだ」

その時に女の子がここにいるのはまずい。恰好の報道のネタとして取り扱われるに違いない。

「教えてください」

署内に戻ろうとすると、言葉を掛けられた。

「何だ」

「教えてください。あの人の事、全部」

その不定な表情は言葉の通りに女の子の感情を示していた。男の繕った表面的な姿を信じてきたのだから、今の状況を素直に受け入れられはしないだろう。

「これ以上に首を突っ込んでも、あんたの立場がまずくなるだけだぞ」

殺人犯の交際相手、そんな事がマスコミから世間に出されたら女の子の芸能人としての人気は終わりだ。これ以上を知る事は、それだけでなく彼女自身の精神的ダメージを増やすだけにしかない。

「………違うんです」

女の子は首を振り、弱い言葉を吐く。何を違うと言ってるのか、彼には全く分らなかった。

「あの人はそんな悪い人なんかじゃないんです。もっと、心が優しく、時に弱くて、

温かい人なんです」

「それは、あんたの前ではそう見せていただけだ」

「そんなことはありません。あれは絶対に嘘なんかじゃない」

女の子の気迫のこもった言葉に、彼は息をつく。完全に男の表面の姿を信じてしまっている。

「あんたはあいつの何なんだ」

そう煙たがるように言い投げると、女の子は考え込んでしまう。

「分かりません。私があの人何なのか」

信じたい、自分が想いを寄せる人を。でも、現実には信じがたいものばかりを突きつけられている。

「それでも、あの人は私にとって大切な人なんです」

女の子の芯のある視線に、彼は手を上げる。

「分かった。全てを話そう」

このまま、男の本性を知らないまままでこの先を歩かせるのはあまりに酷だ。それなら、

いつそ一思いに苦しみを一瞬にしてあげた方が楽になるだろう。

「その代わり、最後まで背けずに聞いて欲しい。今から言う事は全て真実だ」

女の子は息をつき、覚悟を決めたように頷いた。

「大田恵一は徳島のごく一般的な家に生まれた。両親は将来を思い、あいつを妊娠し

た時に一軒家を購入したが、結局子供はあいつ一人だけだった。あいつがまだ一歳の時

に、父親は他に女を作って家を出て行った。元々が遊び人の気質だったらしいが、母親

と出会ってから大人しくなったので安心してたらしい。ただ、元来のものはそう簡単

には消えなかったようだ。だから、あいつは父親の顔も知らない。

まあ、知りたくもな
いだろうがな。それ以来、あいつは母子家庭で育てられた。生計を
成り立たせなければ
ならないから、母親は外で働き、その間あいつは祖父母に預けられ
ていた。それでも、
育ち盛りの子供をそうそう手放すわけにもいかないし、父親がいな
い負い目を味わわせ
たくはなかったから、母親は仕事もパートの数時間だけにして、な
るべくあいつの側に
いてやっただけらしい。それもあって、生活は苦しかった。父親からの
養育費はあったが、
かなり貧しい毎日を過ごす必要があった。それでも、二人はそれで
いいと思ってたんだ。
だが、周囲の心ない人間がその慎ましい生活を突いてきた。小学校
に入ると、あいつは
特定の数人から貧乏を囃され、いじめを受けるようになった。時に
は中傷され、時には
暴行され、心と体を痛めつけられた。教師も現場を目撃した時でな
いと助けてはくれず、
同級生も見て見ぬフリをし、学校にあいつの休まる場はなかったん
だ。家に帰っても、
いじめっ子が罵ってくる言葉の通りの生活で、次第にそこにすら滅
入るようになってき
てしまった。あいつの中で、小学校の六年間は地獄の日々だった。
それを吐き出せなか
ったのは、自分のために働いてくれる母親の存在とそこ以外に居場
所がなかったからだ。
六年間であいつはだんだん自分自身を閉塞させてしまい、精神的に
限界が近づいてきた。
来る日も来る日も罵倒され、暴力を振るわれ、やがて理性で押し留

めていたものを本能
が追い越してしまう瞬間が訪れた。小学校の卒業式の二週間前に、
あいつのクラスでは
キャンプが行われ、そこを逆襲の場として選んだ。全員が寝静まっ
た夜、あいつは全て
のテントに入口から火をつけていったんだ。俺はその時に現場に行
ったが、火は無尽に
燃え盛っていて手の施しようがなかった。結果、テントで寝ていた
十七人が全員死んだ。
俺の刑事生活の中でも最大の惨劇だった。あんな長閑な場所に起こ
るはずのない事件だ。
だが、当時はあの事件は事故として扱われた。現場には事件性を思
わせるものではなく、
花火もやっていたので発火の恐れのあるものもあり、なにより小学
生があんな事を起こ
せるはずがないと決めてかかっていたからだ。ただ、当時どうして
も気に掛かったこと
はあった。事故関係者に話を聞いている中で、あいつの瞳だけはや
けに印象的に映った
んだ。陰しく鋭くってというような分かりやすいものじゃなく、静か
なのに過ぎるほどの
感情を内に押し込めているような感じだった。事故の後も関係者の
ケアにはあたってい
たが、大田恵一だけは明らかに他の人間とは違っていた。事故によ
る悲しみじゃなく、
もつと別の悲しみを自身の中に抱いていた。そして、あいつに接し
ていくうちにある仮
説が俺の中に浮かび上がってきたんだ。あの火事は事故じゃないか
もしれない、という
とんでもない説だ。あまりに突拍子のない仮説だったから誰にも言

わなかったが、俺はそれが頭の中から消せないようになった。大田恵一はとてつもない凶気かもしれない、もしかしたら何か次に遣つてのけるんじゃないか、という思いが離れなくなつてしまい、いつからか俺はあいつの行方を追い掛けるようになっていった。定期的に、あいつの姿を確認するために仕事の後の時間を使った。中学生以降、あいつはいじめを受けることはなくなった。明るさを前面に出すようになったんだ。もちろん、それがあいつの本質ではなく、意図的に作り上げたものだ。中学と高校と大学と、あいつは特に大事を起こさずに無難に進学を続けていった。大学の卒業を控えてる頃に母親が亡くなり、あいつは卒業と同時に上京してタクシードライバーになった。俺もなんとか後を追おうと、熱心に頼み込んで東京の署に異動することが出来た。仕事でもあいつは周囲に溶け込み、無難に毎日を過ごしていった。ただ、一つだけ俺には気になっていところがあった。どうして、あいつはタクシードライバーを仕事に選んだんだろうと。大学を卒業していれば普通の会社員に落ち着くことができるのに、何故そこにいったんだろうと。当時は行き着くことができなかったが、今なら分かる。あいつは復讐を続けていたんだ。昔に受けてきた傷への思いをずっと消してなかったんだ。対象は人間ではなく、金。貧乏を貶され続けてきた過去を蹴散らすために、何不自由のない生活を送

れるだけの富を手

する人生に向かう決断をあいつはしていたんだ。そのためには、しがない会社員として

一生を平凡に暮らしていく道は択べなかった。出来るかぎりの富を築く一攫千金を狙う

人生、その道にその職業は合っていた。現実には、あいつは様々な有権者と関係を持つ事

になった。そして、そこへうまく取り込み、ヘッドハンティングされる事にも成功した。

だが、あいつの前に大きな壁が立った。柴村忍があいつに逆境となる写真を撮り、それ

を週刊誌に掲載すると言い出した。ネガごと処分したらしいから写真の内容はつかめて

ないが、あいつとしてはこんな復讐の半ばで線を断たれるわけにはいかない。あいつは

柴村忍を殺め、その遺体を故郷の山に埋めた。十七人を手にかけた人間にとって、十八

人目に対する迷いは自己制御の範疇にはならなかった。そうして、あいつは新たな犯罪

に手を染めてしまったんだ」

男の人生を言いあげるうち、途中から女の子は涙を流していた。悲しみなのか、憐れ

みなのか、もつと他の感情なのか。その涙の真意は分からないし、あえて聞くこともし

ない。

「あの人は……私のせいで」

「それは違う。今回の事件について、あんたに責任などない。これはあいつが独断で

遣った行為であって、あんたが強く心を痛める必要はない」

元々、男が柴村忍に手を掛けた理由はそこではないだろう。おそ

らく、男が女性から

脅されてたのは久留米雀との関係の写真のはずだ。

だが、彼はそこに関しての言葉は避けた。知らなくてもいい事実を無理に知らせるこ

とは止めておく。どのみち、これだけの真実を突きつけられ、男のところは留まっては
いられないはずだ。

大田恵一の逮捕により、柴村忍の失踪事件に終止符が打たれた。

男は女性を殺めて、

さらにそれを山に埋めるという殺人と死体遺棄の罪を重ねた。当然、この事件は報道で

世間へ知れ渡る事になり、関係者たちに激震を与えた。

亀谷からの聴取に対し、久留米雀は男との深い関係について否認を貫いた。柴村忍が

自身で撮影した写真で男を脅した事が事件の原因に繋がったのは調査済みで、その写真

は久留米雀との只ならぬ関係を証明するものに違いない。ただ、女はそこを否定し続け、

男の方もそこについての詳細を一切吐かなかった。現物が廃棄されている今、当人が口

を割らないと前進は難しい。

光村沙耶にも話を聞いたが、ここも否認を貫くだけだった。もとより、ここの写真

が撮られたところで脅されるようなことはないだろう。彼自身も特に疑いを持っていな

かったので、あまり深く突くことはしなかった。ただ、久留米雀も男を単なるマネーシ

ヤーと言い切ったように、女も男を単なる友人と言い切るぐあいはどうにも腹立たしか

った。女の部屋に男が何度と入っていく姿も、二人で仲睦まじく出かけてる姿も目撃していると言おうとも、単なる友人としか言わない。自分を守ることに必死で、見ていて無様だった。

それに比べ、片柳彩子は正反対といえる対応に終始した。男との交際を認め、柴村忍が撮影した男との写真についても自分とのものだと言断言した。それによって自分がどれだけのものを失うか分かってるはずなのにそこまで為し得る潔さは脱帽に等しいほどだった。そこまですることで現実に目を背けず、男との関係をきっぱりと絶とうとしたのだろうと思った。

世間へと流れた報道では、久留米雀は加害者と仕事上での付き合い、光村沙耶は全く零れなかった。逃がしてやったわけではない。知らなくてもいい事実を無理に知らせることはない、それだけだ。片柳彩子については、彼女の証言がそのまま世間に流れた。女の子の記事は社会を賑わせ、周りには常にマスコミがへばりつく日々が続く、右肩上がりだった人気は急落し、モデルを務めていた雑誌との契約は解除、所属事務所も解雇され、女の子の芸能人としての地位は消え去った。こんな時、世間というのは冷たいものだ。数日間には恰好の餌食として突つきまくり、やがて話題がなくなればあっさり捨ててしまう。

報道も一段落がつき、世間から次第に事件の記憶は薄れ出していた。亀谷右京は東京

拘置所の側に車を停め、窓を全開にして空を眺めている。雲は流れ、時間は流れ、記憶

も流れ始めている。忘れることなど決してないが、それでも日々は続いていく。新しい

一日は訪れ、そこを生きていかなければならない。十七年間という長い年月を費やして

きたが、ようやく自分も解放される時が来たんだ。

昨日、野木晃彦へと電話を入れた。徳島でも今回の事件は大きな衝撃となっていた。

地元の人へ死体が埋められ、その犯人が出身者だったのだから当然だ。男性は今回の件

について、誰に何を言われようと真実を話さなかった。知らない、分からない、連絡を

取り合っていない、と他人同然に振る舞った。よく知りもしない人間に余計な詮索をされ

ないために。

野木は一度、拘置所に面会に訪れた。その時の男は下に俯き、生気の弱まった病人の

ような印象だったらしい。そこでは男性の方が一方的に喋り、男はそれを聞き続けた。

内容は思いついた話ほとんどだったが、大人になつてからはそんな話もしてなかったのだ

新鮮にもなれた。話が一つ落ち着くと、職員から終了の時間の旨を告げられる。特に何

をしに来たわけではないが、実際何も得るものはないのかと思った時、急に男がごめん

と謝ってきた。何について言ったのか分からなかったが、おそらく一連の事件について

総じての謝罪だったんだと思う。男性はそれを笑って払ったが、男の思いは嬉しかった。男にとって、自分はそんなに大した存在ではないんだろうと思ってきたところもあったから。

大田恵一と野木晃彦が出会ったのは小学校五年生の時だった。二人はすぐにお互いの存在を認識する事になる。二人は、共にいじめられっ子だったから。男は家庭の貧しさ、男性は気の弱さがその原因だった。ただ、二人が絆を深めるシーンというのは中々生まれはしなかった。傷の嘗め合いをする気もなかったし、弱者同士が集まると、より負のパワーが増しそうで嫌だった。でも、男性は男に親近感を覚えていたのも事実だった。そんな微妙な関係は二年近く続き、まもなく卒業を迎えようとしていた。小学校からの解放にこれといった意味はない。中学に進んだとしても、自分の立ち位置に期待を持つことなどなかったから。そんな中で行われた卒業間近のキャンプも行事として参加する程度の思いにしかならない。だが、そこで男性は生涯忘れられない体験を目にすることとなる。皆が寝静まった夜中、同じように眠りについていた男性は体を揺らされて目を覚ました。目を開くと、そこにいた男は口元に人差し指を当て、喋るなどという無言の要求をしてくる。そこから男の誘導で周りの人間を起こさないように慎重にテントを出た。時間は分からなかったが、外は暗闇に包まれている。何をするのか

と思ったが、男は紙と着火機を取り出し、おもむろに火をつけた。すると、男はそれと同級生のいるテントの中へと何度と投じたのだ。男性は目の前で起こっている現実が強烈すぎて、何の言動も出来なかった。その間にも、男は他のテントにも同じ事をしていった。止めるべきだったが、まだ小学生だった男性は完全に気持ちが悪く、体は全く動かなかった。外で寝に入っていた引率の教師が気づいた時にはもう火の手は人間たちを網羅して、何の手の出しようもなかった。膝から崩れ落ちる教師、現実を拒否する男性、その横で何の感情にも行き着かないような乾いた瞳をしていた男は恐怖そのものだった。日は経ち、地元では歴史的な惨劇とされた十七人の犠牲者を出した火事は事故と判断された。当然に男から口止めを強くされ、夜中に恐くて男に付き添いをしてもらってトイレに行っている間に火事が起こったと男性は主張した。それ以来、男と男性には妙な仲間意識が生まれた。仲良くはしないが、変な繋がりを感ずる関係。近づきすぎず、離れることもしない。そんな関係がずっと続いていった。本人に確かめた事はないが、何度と心内に抱いてる事がある。どうして、男は十七年前の火事の時に自分だけには手に掛けなかったのだろうか。一人でやった方が実行もスムーズにいくし、その後の証言などにも手を焼かずに済む。リスクを背負ってまで、

何故そうしたのだろうか。それについて、男と接していくうちに辿り着いたものがある。

男は自分の事を仲間と思ってくれていたんじゃないだろうか、同じようにいじめられて

いる自分に同情してくれていたんじゃないだろうか。だから、自分には手を掛けなかつたし、その後にも付かず離れずの距離を維持続けた。それが男な

りの友情だったのか

もしれない。そして、男性もその男の思いに応えていった。男性にとつても、男は人生で唯一の友達だったから。

同様に、もう一つ心内にだけ留めてる事がある。それは男の幼少期からの知り合いで、

小学校の五年生と六年生の時に同じクラスだった鞘谷のことだ。彼女は自分たちとは違

い、学級内でも中心的な存在だった。正義感が強く、クラスでいじめがあつた時に報復

も恐れずにいじめつ子に食ってかかった。といつても、次やったら先生に言うからねと

強めの口調で言っただけだが。それでも、他のクラスメイトはそれも出来なかつたわけ

だから彼女の行動は勇氣あるものだった。実際、それから学級内でいじめられることも

なくなった。そんな彼女に対しても、男は手を掛けるつもりだったのだろうか。十七年

前のあの火事の日、彼女はインフルエンザで泣く泣くキャンプへの参加を断念する事になつた。あの日、もしも彼女が病氣にならずに参加していたら、男

は彼女を十八人目の

犠牲者にしていただろうか。何度か心内に浮かんだが、それを聞

くことはしなかった。

殺すつもりだった、なんて聞きたくはなかったから。彼女も助けるつもりだった、と勝

手な想像のうちにしておく。鞘谷は男性の初恋だった。同級生の中で唯一自分を助けて

くれた彼女へ淡い恋心を持っていた。決して届かせない、己の中だけで処理させる一方

通行の想い。自分にとっての彼女がそうだったから、同じ境遇にいた男には彼女に好意を持っていてもらいたかった。

亀谷は姿勢を直し、車のエンジンをかける。これでもう大田恵一に係わることはない

だろう。男は多くを失ったが、一つの確かなものを得られた。友情、それで男は未来へ

歩いていけるはずだ。時間は長く掛かったが、男はようやく人間らしい人生を生きていける。

そう彼は一つ息をつき、車を走らせていく。拘置所前の長い道を走っていくうちに、

一人の人間と擦れ違った。ただの通行人と思って通り抜けたが、すぐに彼は車を停める。

振り返り、後ろ姿をしばらく眺める。彼の思いはどうやら外れたようだ。友情の他に、

もう一つ男には得られたものがあつた。

大田恵一は東京拘置所でしめやかに毎日を過ごしていた。心身が萎えてくるのは当然

だったが、それでも芯まで腐ることはない。男には生きていく糧ができたから。これま

では他人の人生なんてどれも同じでちっけなものでしかなかった

が、やっと心を通じ
合わせられる人間ができた。亀谷から、今回の逮捕によって野木以
外の全員が自分から
離れていったものだと思ってもらいたいと言われた。でも、それで
いい。たった一人であ
るうとも、大切な存在に気づけたのだから。

今は裁判が始まるのを待つ日々だ。刑の重さは覚悟しなければな
らないが、命を奪わ
れることはないようだ。柴村忍の殺害については裁判で刑罰の対象
となるが、十七年前
の事件については対象外になる。時効が成立しているのもあるが、
亀谷がそこに関して
の全ての真実を隠したのだ。男を今まで闇から救ってやれなかった
自らへの咎めとして、
男が新たな道を歩むために伏せる事に決めた。

「面会だ」

職員からの言葉に、男は顔を上げる。亀谷からは前回の面会時に
これが最後になると
言われていたし、野木にしても前回の面会から時間がさほど経って
いない。それ以外の
人間が来ることも考えられなかったため、疑問を携えたまま男は面
会室へと入り、そこ
にいた人物に吃驚する。

「どうして……」

自然と漏れた言葉は、ガラス越しに立っていた片柳彩子にも伝わ
った。

「来ちゃいました」

久しぶりに男を目にできた感動で女の子はすでに涙ぐんでいた。
それでもなんとか喜
色を表そうと、精一杯の笑顔を零していく。

「なんで、ここに」

「なんで、って………会いたかったからです」

「こんなところに君が来ちゃいけない」

「どうしてですか」

どうしてもなにも、これからの輝かしい未来がある人間が犯罪者に感情を注ぐなんてあっちゃいけない。

「君は俺から離れないといけない」

「何言ってるんですか。私は離れたりしませんよ」

「君の立場がまずくなる」

突き放そうとする男の言葉に、女の子はかぶりを振る。

「そのぐらいで離れるなら、それだけの関係だったってことです」
その言葉は、今ここにいる二人に投じてるものにも思えた。なら、ここにまで来た女

の子の男に対する想いはどれだけのものなのか計り知れない。

「知ってるだろ。俺は殺人犯なんだ。ただの極悪人だ」

「そんなことはありません。あなたはそんなに悪い人なんかじゃない」
「い」

「君の事を利用してしようとしたかもしれないんだぞ」

「初めて会った時、私の事なんて何も知らないけど助けてくれましたよね。だから、

それが本当のあなたなんです。あなたは優しい人なんです」

かぶりを振る女の子の両側の瞳から涙が流れていく。その健気さの一つ一つが男の胸

を刺していく。

「そういえば、まだ言ってますでしたよね」

女の子は今出来得る最高の笑顔を見せ、ガラス越しの男を見つめる。

「………私、運転手さんのことが好きです」

女の子からの言葉に、男はその場に崩れ落ちた。自分の犯した過

ちに、今頃気づいて
しまった。

「私があなたに本当の愛を教えてあげますから」

こんなにも純粹な想いを自分は裏切ってしまったんだ。これだけ
の無垢な感情に、自

分はなんてことをしてしまったんだ。そう罪に悔いると、とめどな
く感情の線を破った
涙が溢れてきた。

「待ってます、ずっと」

片柳彩子への恋情、野木晃彦への友情の他に男が得られたものだ
った。

その11（後書き）

これで「黒く滾る炎」は完結となります。
最後まで読んでくださった方々、ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0901j/>

黒く滾る炎

2011年2月17日23時27分発行